

ポケットモンスター・騎士道

傘花

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゲーム内の所持ポケモンをまるごと詰め込んだパソコンと一緒に、ポケモン世界に転移したエイジ。

ポケモン世界のマイナー競技・騎士道でなんとか生計を立てた彼は、うっかり人をぶっ〇してしまう。

しゃーない、逃げよう。

時系列はORAS↓Pt∥HGSS↓BW↓BW2∥xy説を採用、細かい点は無視

現時点でPt後BW前

メガシンカの認知度は低いが知られているみたいだな

シンオウ逃亡編

1

「勝者——エイジ！」

審判の声でわあ、と観客が沸く。

それは見慣れてしまった光景。スタジアムの中心で勝利を告げられる俺と、3タテをしたガブリアス。

これで100連勝、しかし、胸にこみ上げてくるのは感動ではなく——自嘲的な喜び。

(当たり前だ)

俺は思う。この世界の”騎士道”と呼ばれるポケモンバトルは、小学生を蹴散らすようなものだ。個体値も、努力値も、種族値すらままらない世界。道行くトレーナーも、三値など考慮してはいないだろう。

何台ものカメラがフラッシュを焚いて、記者が波のように押し寄せる。翌日の新聞には『騎士の王、ついに100連勝』などと書かれるのだろうか。

仮初の栄光、張り子の虎、しかし、この世界の人々はその名誉を信じて疑わない。

「今の心境はどうですか？」

「ええ、感無量です」

感動は無い。対戦相手——騎士業界のトレーナー全員——には嫌われ、スポンサーには好かれ、騎士道協会からはもつと盛り上げてくれなどと言われる。

「明後日はシンオウ地方チャンピオンとの——」

「一番頼りになる手持ちは——」

「彼女とかは——」

当たり前障りのない回答をする。ワクワクは無かった、興奮も無かった、焦りも、余裕でさえも無かった。

刺し身にたんぽぽを積むように、作業的に相手を倒すのだ。

「はあ……お疲れ、ガブ」

「ガアアア」

シンオウ地方、ヨスガシテイのホテルで俺とガブリアスは東の間の休息を取っていた。ポケモンをボールから出しても良いが、少々値段の張る——俺の財布は全く痛まない——ホテルだ。

設備は少々大きく、ガブリアスはソファに飛び込んで、テレビを付けた。他の手持ちは試合に出ていないため、ボールの中で休んでいる。

ようきな性格のガブリアスは、画面に出ている俺を見てはしゃいでいる。俺がこの世界に来た時なら、ガブリアスは——自発的な行動を取ることはなかった。

何故なら、ゲームの中の存在だからだ。

トレーナーの指示を待ち、動くだけの存在。そこに人生は無かった。

「ガア？」

ガブリアスは考え込んでいる俺を見て不思議そうにしていたが、ポロクケースを取り出して甘いお菓子を放つてやると、喜んでそれにかぶりつく。

うむ、可愛いやつだ。

このまま眺めているのもいいが、そろそろ「試合前」対談の取材の時間なので、ガブリアスに声をかけて外に出た。

ヨスガシテイはコンテスト会場やポケモンだいすきクラブの支部があるだけあって、人混みが凄まじい。ガブリアスの少しザラザラするさめはだに手を当てて、先導してやる。

目的地は小洒落たカフェだ。中に入ると、「おーい」と声がかかり、客の視線がザッと集中する。

恥ずかしいから止めてほしいんだけど。

兎も角、呼びかけた張本人——少し太ったインタビュワーの男性が、額の汗を拭つてにこやかに笑う。

「待つてたよ、エイジ騎士王」

「ははは、止めて下さいよ、ヒョーゴさん」

ヒョーゴ——彼は俺の記事をよく書いてくれる人だ。この世界にやって来た時にお世話になった人で、仕事以外でもよく顔を合わせたりにしている。

「やあ、ガブリアス。君の独擅場だったね」

「ガア」

まあ、緩い感じで取材が進む。内容は騎士道のことだったり、趣味の話だったが、暫くすると彼はコーヒー（こっちはエネココア）のお代わりを頼んでから、切り出した。

「そういえば、明日はシンオウ地方のチャンピオン、シロナさんとの対決じゃないか」

「ええ、胸を借りるつもりです」

「まさか！ 僕はねえ、君が思いもよらない結果を出すと予想しているよ」

「ははは……いやいや……」

この世界のポケモンバトルは流動的だ。絶えず状況が変化し、ポケモンとトレーナーが適切に行動することで相手を打倒しようとする。

だが、俺にそんな技術はないし、ガブリアスや他のポケモンは激しく動き回る戦いが苦手である。いわゆる「火炎放射で相殺！」とか「よけろ！」が出来ない。

やらないのではなく、出来ない。バトルの練習をしたことがあったが、避けろと言っても「正しく理解」出来ていない。なぜ避けなければならぬのか、という具合である。

反面、騎士道の戦い——交互に技を打ち合う『ゲーム』の様な戦いならば、こちらに軍配が上がる。知識、読み、個体、アイテム、全てが味方している。

今回のシロナとの戦いは——勿論前者だ。

「ヒョーゴさん、私は騎士道に身を捧げたんです。普通のポケモンバトルなんて出来ませんよ」

「ははは、そういうのも含めて楽しみにしているよ」

その後しばらくして解散、俺達はホテルに戻った。

「リングマ、ニョロボン、バクーダ、よくやった……」

歓声が会場を揺らす、その舞台裏。一人のトレーナーが相棒のポケモンたちを抱きしめていた。

彼は——記念すべき百人目の生贄。「あの」恐るべきガブリアスに為す術無く敗北したトレーナーだ。

彼——エイジというトレーナーは騎士道の世界に現れた異端児だ。流星のように現れ、多くのトレーナーが敗北し、散っていった。

「チクショウ……」

騎士道の世界は、生易しいものではないし、狭い世界だ。

ポケモンを六匹、それぞれ五十レベル以上まで引き上げなくてはならない。これは少なくとも、ポケモンリーグに出場できるトレーナー一歩手前、もしくはバッジを八個集められる実力者の基準に近い。

五十レベルのポケモンを育てることは容易ではない。ゲームのように連戦連勝はまずありえないし、時間がかかる。まして、騎士道の世界でやっていくには、ポケモンにも慣れが必要だ。

「頑張った……よく恐怖に耐えたな……」

攻撃を交互に放つ事。それは騎士道の絶対の掟であり、犯してはならない聖域だ。

ポケモンは来る攻撃の恐怖に耐え、トレーナーは勝利のために出来る最善の指示を出す。それは信頼関係が結ばれるから出来ることだ。促成栽培みた育て方では、舞台に立つことは出来ない。

栄光の裏側——そこには、日陰に埋もれてしまったトレーナーがいた。

「あなたの全力、あたしに見せてみて！」

エイジに相対するシロナは、余裕を見せて言い放つ。

「ガアルツ！」

「カアーン！」

フィールドに二対のポケモンが躍り出る。片やガルーラ、もう一方はミカルゲ。主役が登場すると、観客は声を張り上げて会場を揺るがした。

『バトル開始ッ！』

熱気渦巻く中心部、戦いのゴングが響く——！

『さあ！ 今宵、世間を賑わす話題のトレーナーが——』

今、バトルフィールドに入場して、拍手喝采を浴びているのが俺だ。相手はあのチャンピオン——女子力の低い（らしい）シロナさんだ。エキシビジョンマッチみたいなのをわざわざ開いて、俺と戦う事になった。理由は不明だが、騎士道協会の人間が広告のためにやっている……のだろう。多分。

そんなこんなで試合会場。

手持ちはガルガブゲンにバシヤボルトガツサだが、三体で戦うのお達しなので、無難にガルガブゲンの並びを選んだ……不安だ。ちなみに、珍しそうな準伝説は知名度を考慮して連れてきていない。スイクンとかスイクンとかスイクンである。

ガルガブゲンは一応百レベルにしているのだが、こういった自由な形式の試合は初めてなもので、多分負けるだろう。

BW2ではそれなりにお世話（カツアゲ）になったが、今日ばかりはそういかない。まあ、やられっぱなしは流石に嫌なので、それなりに抵抗させてもらうが。

『対するは、我らがチャンピオン！ 我らが女王！ シンオウリーグ

の絶対王者！ シロナだア——ッ!!」

何も無い無骨なステージの反対側に、金髪の美しい女性——言うまでもなくシロナ——がやってくる。

ふむ、実際に見るとやっぱり美人だ。

「はじめまして、あたしはシロナ。あなたのポケモンバトルはよく見ていたわ」

「エイジです。チャンピオンに知ってもらえるなんて光栄ですね」

呑気に挨拶をしていると、歓声がピタツと止んでいた。

「あなたの全力、あたしに見せてみて！」

モンスターボールを取り出したので、こちらも準備を整える。

「舞い上がれ、ミカルゲ！」

「行け、ガルーラ」

二匹のポケモンがボールから飛び出ると、試合開始のゴングが鳴る。

「交換は必要かしら、チャレンジャーさん」

………していいの？

この人達、技を四つまでとか縛ってないから全然ありだけど……ここで交換したら俺のファン人气的にも、試合のテンポ的にも悪くなるから止めとこ。ガルーラならなんとかしてくれるでしょ（慢心）。

「メガシンカ、ガルーラ！」

キーストーンとメガストーンが反応し、ガルーラの袋から子供が飛び出す。

「地震！」

「空中に避けて鬼火！」

「(ゲエ!?) ガルーラ！」

早速仕掛けたのはいいが、ここで鬼火を喰らえばガルーラはほぼ機能停止だ。俺のポケモンは「避ける」が出来ないから外しを期待するしか無いが、実力者のポケモンは何故か技の外しというものを知らないらしい。

こんなチートや！

メガガルーラが地面を叩きつけて振動を起こすと、ミカルゲが宙に

浮いてそれを躲す。ガルーラ親子はふわふわ浮いた炎を食らって火傷状態になり、物理半減、事実上の機能停止である。グロパン搭載型ではないし、そもそもミカルゲには当たらない。

お前の特性浮遊じゃねーだろ！

「……岩雪崩」

「ミカルゲ、影分身で攪乱！」

メガガルが地面に手を差し入れ、大地を放り上げる事で礫を降らす。その礫は広範囲に降り注ぎ、ミカルゲ本体にも命中した。

「オオ！」

「ガルッ！」

子供の追撃も命中し、ミカルゲは一瞬だが怯んだ。これが第六世代のポケモンをガルモンと言わしめた実力である。それにしても影分身ごと潰すとは思わなかったが。

「岩雪崩」

「シャドーボールで撃ち落としてから影分身！」

「ガアア！」

出た、「撃ち落とす」だ。岩タイプ技のうちおとすではなく、技で技を迎撃するという、なんとも真つ当な戦い方である。

コレもゲームではできなかった芸当だ。流星のメガガルーラも困惑し、続く攻撃を影分身に当てられない。そして、試合はそのまま続き、ついにスリップダメージでやられてしまった。

悲しいことに、真つ当なバトルは初めてなのだ。レーティングバトルで猛威を奮ったガルーラは、「素早さの順番」というルールに囚われ、困惑したまま敗北した。

いや、俺のせいでもあるんだが。

『ガルーラ、戦闘不能！』

——わああああああああああ!!

興奮した観客の声が会場を埋め尽くした。騎士王の敗北に、湧いているのだ。

……無性に腹が立つ。戦闘不能になったガルーラは、地面に伏したまま申し訳なさそうに俺を見た。

——違う。お前のせいじゃないんだ。ろくに指示も出せない、俺が悪いんだ。

当初は負けると思っていたが、それはそれで、気に食わない。

「ありがとう、ガルーラ」

「ガア……」

モンスターボールに入れてやると、シロナさんが声をかけてくる。

「あなた……ガルーラに指示を出してあげないの？」

「……任せたぞ、ゲンガー」

答えは返せなかった。今の俺は、騎士道の戦い——ゲームの戦いしかできないのだから。

どうやってその概念を打ち壊す指示を出してやれるのか、俺のポケモンは少々騎士道に——レーティングバトルに傾倒している節がある。……まあ、元々はゲーム内存在だし多少はね？

「ゲエエ」

ゲンガーが飛び出すと、試合の再開が告げられる。もしもここから逆転するのなら、最速で指示を出して、急所にも当ててもらおうしかない。

「シャドーボール」

「ッ……ミカルゲ、こつちもシャドーボールよ！」

シロナの顔に動揺が浮かぶ。いや、多分嫌悪だ。ゲンガーは命の珠を握りしめており、シャドーボールを放つと低く唸り声をあげた。

彼女らは——優秀なトレーナーはコレを好まない。

体力を削る道具を持たせて、勝つための戦いをする。そんなものは邪道であると、騎士道をやり始めた頃にはよく言われた。

だが、押し通さねばなるまい。ガルーラも、ゲンガーも、ガブリアスも、俺に強さを求められて育ったのだ。ゲームのレートで、現実の騎士道で、畏怖と尊敬を一身に受けるポケモンにしてやらなければならない。そうしなければならぬと、今思った。

言葉を持たない彼らのためにも、己が強者であると示してやらなければ気が済まない。トレーナーとしての、責務であった。

シャドーボールが衝突すると、土煙を巻き上げて視界を遮った。

「砂嵐」のようなものか、それなら命中率が下がることもない。

「続けてシャ——」

『ミカルゲ、戦闘不能!』

「——今のナシ」

覚悟を決めた途端にコレである。相殺しきれなかったってやつか。それでも、HPの削れたミカルゲ程度ならもっていくらしい。

「ゲッ?」とこちらを振り返るゲンガー。一匹倒したから次に備えるんだぞ。

「グゲエエエ」

舌を出してニタリと笑う。彼の表情は本当に読めないが、恐らくヤル気なのだろう。性格はおくびようなはずなんだが……。

「グレイシア、華麗に舞いなさい!」

「キュウ!」

ケモナー御用達ポケモンの登場だ。実際可愛いし、シロナの手持ちとなれば、美しさも飛び向けているようにみえる。

「ゲンガー、ヘドロばくだん」

しかし、容赦は出来ない。

一瞬の溜めの動作、直後、ゲンガーの口から毒々しい液体が放物線を描いて飛び出した。直径一メートル程の球体がグレイシアに降り注ぐ。

ヘドロばくだんはグレイシアに直撃、ゲンガーはレーティングに倣って攻撃に備えるが、困り顔で振り返る。

彼の視線の先では放ったヘドロが凍りつき、グレイシアの手前で固まっていたのだ。なるほど、現実的冰タイプ特有の固める現象か。

「グレイシア、シャドーボールよ!」

「耐えて、シャドーボールだ」

シャドーボールを身体で受け止めると、ゲンガーは大きく仰け反り、口を天に向けたまま黒いエネルギー球を放つ。

しかし狙いは正確そのもの、グレイシアは避けきれずに命中。その一撃でグレイシアはフラフラと足元が覚束なくなる。対して、ゲンガーは平静を装っているが、もう一発喰らえば倒れる。

素早さは完全にこちらの方が勝っているが、ポケモンバトルの腕前なら向こうが一段も二段も格上である。

シロナは決定打を放たず、こちらの攻撃を避けることに専念させた。ゲンガーはこれ以上攻撃を命中させることは出来ず、そのまま敗北した。

最後の手持ちは、氷四倍弱点のガブリアスだ。

なんだかんだで、この世界に来てから一番付き合いの長い——一年ちよつとだが——ポケモンだ。

一番柔軟ではあるが、ガルーラやゲンガーと同じように一步も動かないだろう。どう戦えばいいのか、どう声をかけてやればいいのか、悩んでいると——神が降りた。

モンスターボールから飛び出ると、ガブリアスは大きく吠えて威勢を示す。氷タイプのグレイシアに怯む様子も見せず、指示を待っていた。

「冷凍ビーム！」

「ガブリアス、剣の舞」

両手の鎌をこすり合わせ、闘志を燃やす。心なしか赤く輝いて見える。

後続を考えれば、ガブやミロカロス、キッスが選択肢として上がる以上、一撃で落とす火力がなければならぬ。

タイプ一致の冷凍ビーム、ガブリアスは——ヤチエの実を噛み締めて耐えた。ここからは迅速に指示を出してやらなければならぬ。反撃の前に、倒さなければ。

「逆鱗！」

「吹雪で迎え撃って！」

激しい氷の風がグレイシアの前面に吹き荒む。これを回避できなければ、敗北。

言葉を、指示を、出してやらなければならなかった。

「ガブリアス、『先に』攻撃を当てろ！」

「ガアアア！」

素早さに従い、グレイシアに先制せよ。

下された指令を、ガブリアスは正しく理解したようだ。レーティングバトルの作法に則り、『先に』攻撃を当てる為の行動を開始する。

そのために、「ルールを無視」した攻撃は全てかわさなければならぬ。彼は巨体に見合わぬ素早さで吹雪を大回りに回避、グレイシアに判断する隙を与えず肉薄――

「バリアーよー！」

「無視しろー！」

咄嗟に貼られた透明な壁を、ガブリアスは強引に破壊。グレイシアの身体に強烈な一撃を叩き込んだ。

『グレイシア、戦闘不能！』

「ガアアアアア!!」

ガブリアスが勝利の雄叫びを上げると、観客は大きな歓声もなく、まばらに拍手をした。出る杭は打たれる定めなのか、それとも敗北を期待されたのか、いずれにせよ歓迎されていないらしい。

シロナが最後のポケモンを繰り出す。残りは、同じガブリアスだった。こちらはようきSVの極振り、まず先制できる。加えて一舞した状態だ。スカガブでなければ、勝利する。

俺のガブリアスは、「避ける」という概念は理解できなくとも、「先に攻撃」という概念は理解できていたのだろう、結果的に攻撃を避けた。ここが現実でも、Sが勝っていれば勝利できるということを証明したのだ。

……勝てるかも。

「ガブリアス」

「ガッ！」

ガブの鎌はエフェクトのような光を放っており、逆鱗が継続していることが分かった。彼は命令を待たずに飛び出した。

「穴を掘って回避するのよー！」

シロナのガブは地中に逃げたようだ。こちらのガブはそれを見送ると棒立ち。動作をとらなかつた。

穴を掘る、それは耐える。余裕だ、一致等倍でもHPの削れたガブ

は落とせない。

シロナのガブリアスが、無防備な体勢のガブリアスを地下から強襲した。次の指示を出そうと俺が待つと、ガブは驚くべき行動に出る。相手ガブリアスの一撃を掴んで受け止め、逆に逆鱗を食らわせたのだ。そうだよ、素早さを考えたら「あなをほる」を喰らうのはおかしいよね。

ガブリアスの一撃は相手をフィールドの壁まで吹き飛ばし、クレーター状の傷を付けた。確定一発である。

しかし、シロナのガブリアスは立ち上がった。

……嘘だろ？ タスキもなしに耐えるのか。いや、そういうシステムはあった。SMあたりで導入されたシステムだったか。撫でてやるとたまに攻撃を耐えるのだ。

「逆鱗よ！」

「ガアアアアアアッ！」

返しの攻撃がガブリアスを襲う。彼は、避けられる一撃を受け止めた。

『――勝者、シロナア！』

大歓声と拍手。惜しめない賛美が彼女に送られる。

俺との握手を済ませると、シロナは爽やかに笑って応じていた。

敗北は、残念ながら当然であつたか。むしろ、よくぞここまで食らいついたと、三匹に言つてやりたいくらいだ。

四天王及びチャンピオンの手持ちがゲーム内でレベル八十弱ということを考えれば、百レベルというのは遥かな高みであるということだ。

シロナがシンオウ地方最高のトレーナーであるならば、騎士エイジのポケモンはシンオウ地方最高の精強さであつた。

シロナは当初、慈悲のない戦い方に僅かながら怒りを覚えたが、戦っていくうちにそれは違和感へと変化していった。

こちらが攻撃をすると、相手もまた攻撃を返し、避けることなく倒れる。

ガルーラの地震も岩雪崩も、避けられなければあつという間にミカルゲを倒していただろう。ゲンガールのシャドーボール、ヘドロばくだん、それらも回避が困難な程の速度だ。

結果的にはシロナが勝利した。しかし、ゲンガールもガルーラも誇りを貫いた戦いを変えることはなかった。こちらがジワジワと削るような手段を使おうと、そのスタイルを変えることはなかった。痛みすら押し殺し、正確極まりない攻撃を放ってくる。

だから、シロナにはエイジのポケモンが怒っているようにも見えただ。

(彼らは——とっても強いきずなで結ばれているのね)

だから、シロナは出てきたガブリアスを見て、エイジの指示を聞いて、驚愕した。

——先に攻撃を

その一言で、流れが変わった。

グレイシアを倒した時、トレーナー達が会場に連れてきたポケモンはガブリアスの雄叫びに震え上がり、騎士王最高の手持ちと言われるだけの威厳を示した。

それこそ、シロナのガブリアスが耐えなければ、最強の座に君臨しただろう。

(一体、どんな生き方をしたのかしら)

戦いに生きるポケモン、戦いに生きるトレーナー。お互いにすべてを委ね、委ねられ、シロナの歩んできた強さとはまた別の強さを持っていた。

騎士道で頭角を現してきた当初こそ、多くのトレーナーの批判を浴びていたエイジ。命の珠や道連れを顔色一つ変えずに使う彼は、悪魔や鉄仮面などと罵られていた。

(それが、彼らの自慢なのね。勝利のために、次のポケモンに託す事を誇りに思っているのね)

シロナはエイジと握手を交わし、爽やかに笑ってみせた。

『騎士王、チャンピオンに敗北』

「はあ……」

溜め息を出さざるをえない。敗北という言葉は心にこうも重くのしかかるものなのか。新聞を放り投げて、エネココアを飲み干す。

肝心のガルガブゲンは気にしていないようだが、今後の身の振り方を考えなければなるまい。この世界に来て、戸籍を作成し、暫くはお金を気にせずに暮らせるだけの生活基盤を整えた。

名誉——不本意ながら——も得た。次は……結婚か、ポケモンと生きていくか、旅に出るか、選択肢は多い。

取り敢えず、家に帰ろうと思う。

シンオウ地方を南に進んで、海を渡ったところにある島が家だ。俺がこの世界で初めて目覚めたのがその島で、名前が売れ始めた頃に島ごと購入したのだ。島はタマゴ島と、俺が勝手に呼んでいる。

そらをとぶなら一日もかからないが、海路で行こうとするとサメハダーやギャラドスなどの危険なポケモンに襲われるため、開発されていない。侵入しづらいということも購入理由の一つである。

そらをとぶ要員のウルガモスに掴まって、タマゴ島中心部の洞穴に着くと、別個体のウルガモスが俺を出迎える。

彼の案内に従って洞窟の地下深くに足をすすめると、地上への穴が空いた大空洞につながった場所に出る。

巨大な縦穴の壁面には幾つもの穴が空いており、無数のタマゴと大量のウルガモスが配置されている。他にも、個別の部屋を作成して預かり部屋——事実上の繁殖スペース——を確保している。

タマゴの運搬や食料調達用にメラルバが駆け回り、面倒はミルタンクやガルーラに一任され、運営は今のところ無事になされていた。

実は、騎士とはまた別に、ブリーダーとしても活動しているのだ。尤も、こんな愛情もクソもなく、全てをポケモンに任せているのは俺

ただだろうが。

出来上がった個体——ポケモンは、クソ性格クソ個体——ユニークなポケモンだけを厳選して送り出すのだ。余ったポケモンは島の中で放し飼い（放置）をしており、独自の生態系を築き上げている。

産ませた以上、食料を定期的に空輸したり、ポケモンの食料になる木や草は管理している。

兎も角、こんな血も涙もないと言われるような場所は秘匿するしかないわけで、長期間ここを離れて何かをするなら、セキユリテイを強化しなければならぬのだ。

ポケモンに人並の知能があれば良いなあ……とはつくづく思う。

タマゴプラントの確認を終えた俺は、地上に出て再びそらをとぶ。タマゴプラントから離れた場所には、島購入の際に建設してもらったコテージがあるのだ。

広々とした中庭に加え、巨大プール付きの育成済みポケモン専用（俺も使うが）の家だ。別荘と言ってもいいかもしれない。

待遇が違うのは……稼ぎの違いよね。

まあこんな感じの家だ。

仕事や試合が入るまで、基本的にはこの家で過ごす。引きこもりではない、いいね？

というのも、ポケモンの自主性とやらを引き出さなければ、俺がない時に連れ去られる可能性や、シロナさんとの試合のようにまともな戦いが出来なくなる。

殴って殴り返すスタイルは騎士道だけで十分である。

その為、ポケモンたちとはフリスビーや海水浴などをしてよく遊ぶ。

こちらに来てしばらく経った今では、バトル以外なら、中々好き勝手に動き回るようになってきた。これはこれで世話が焼けるのだ。

ロトムやエルレイドと戯れていると（他のポケモンだと危険が危ない）、不意に騎士道協会から電話がかかってきた。

「エイジです。はい、はい、はい？ ……バッジが八つ必要？ 今年から、競技人口の増加を見込んで？」

俺はまだバッジを八つ持っていない。金策でひいひい言ってたからそんな余裕は無かった。だから、バッジが必要ない競技に目星をつけたのだが……。

やべえよ……ジム巡りに行くことはまだ出来ない。長期間ここを開けるなど出来ないのだ。

そもそも、マイナー競技の人口が急に増えるわけないだろ！ いい加減にしろ！ 第一俺のおかげやろ！

「その融通はききませんか？ ……暗黙のルールを明文化しただけ？ しかし——切れた」

最悪だ。十歳の子供と混じって、ジムバッジを集めなければいけないなんて。

トバリシティのジムリーダー・スモモが、その日、妙にそわそわしていたのを同じ道場の格闘家は知っていた。

故に、彼らはエイジというトレーナーには怒りを抱いていた。

「エイジさん、あたしスモモっていいいます。シロナさんとの試合見ました」

「ありがとうございます」

スモモには情熱があった。騎士道で百連勝を成し遂げた猛者と、ポケモンを通じて対話できる思ったからだ。強さとは何か、自分なりの答えが出ると、考えたからだ。

「あたしの全力をぶつけます。だから、どこからでもかかってきて下さいー！」

小柄な少女が繰り出すのはカポエラー。それに向かい合ったのは、グライオンという飛行／地面タイプのポケモンだった。

ジムリーダーともなれば、他のトレーナーとは一線を画する、タイプ相性を覆してしまうような戦い方が出来る。誰もが接戦を疑っていなかったし、誰もが戦いに期待していた。

結果は惨憺たるものだった。守ると身代わりを頻繁に用い、スモモ

のポケモンと「交互に」行動して戦ったグライオンは、一切の攻撃を寄せ付けなかった。

勿論、相手のペースに乗せられるほどジムリーダーはヤワではない。指示を出し、敵を翻弄しようとするが、グライオンの素早い身のこなしは忠実に騎士道方式を再現した。

「カポエラー、フェイント！」

スモモの指示は守るという行動を予見したものだ。フェイントという技は守るに対して有効である。間違っではないが、現実のバトルにおいて、先行がどんな技を出すのか分かってしまうバトルで、それは無限グライオンに対する悪手だった。

「身代わり」

フェイントを食らったグライオンの前に、ポケモンが作り出したエネルギー像が現れた。壊されずに鎮座したそれは、ある種の門番だったのだ。

地獄が始まる。

カポエラーはそれから何度も何度も技を繰り出す、守ると身代わりの効果的な運用が壁のように立ちふさがる。攻撃しても、攻撃しても、攻撃しても、攻撃しても、無限にそれは防がれる。

攻撃は精細を欠き、カポエラーは徐々に疲労していく。身代わりが「壊せなくなる」と、反撃が始まった。

カポエラーが倒れた時、観客から罵声が飛んだ。

「卑怯者！」「正々堂々と戦え！」「バトルを何だと思っている！」

怒りだ。エイジに怒りが向けられる。相手のポケモンを段々と追い詰め、削るように攻めていく戦いに非難が集中した。

「ポケモンを、交換したい」

憎悪の矛に取り囲まれた時、彼は言った。

（冷たい、機械みたいな声）

スモモは一瞬戸惑ったが、グライオンは何も言わず、出てきたカイリキーも試合に集中できなかった。交換を許可した。

試合はあっという間に終わった。蒼いスカーフ——こだわりスカーフを巻いたトゲキッスのエアスラッシュで完封された。目にも

留まらぬ速さで、ポケモンたちが倒れた。

機械のように緻密で、正確で、容赦のない戦い方をする騎士王・エイジ。巷で彼が戦闘機械と呼ばれる所以を、スモモは身を以って味わったのだ。

彼女の手持ちが全員やられるまでに、五分は掛からなかった。

これでいいだろう？　と言わんばかりに観客席を見やった彼に、抗議の声は上がらなかった。

肩を震わせるスモモからバッジを受け取り、立ち去る姿はその場に居る人間の目に焼き付いた。眉をひそめて、不愉快そうにスモモを睨んでから「ありがとう」などと皮肉を言ったのだ。

冷酷無情な、悪魔。その場に居る人間の反感を買った彼は、八日でジムバッジを集め、最速記録を更新した。

通信技術の発達した世界で、彼の行いはあつという間に広がり、悪評を産んだ。血の通わないトレーナー。道具のようにポケモンを従える。客観的に見れば、その評価は正しい。

しかし、エイジからしてみればそれは全く異なる見解であったが、今更正することなど不可能であった。

チャンピオンリーグ——その四天王が召喚命令を出したのは、世間一般から見れば喜ばしいことであった。ギンガ団が色々とやらかしてからまだ2年と経過していない。世論は悪いトレーナーには敏感であった。

裏でエイジのイメージ低下を危惧した騎士道協会が、圧力を掛けて四天王を招集したのだ。無駄に歴史だけはある競技の団体だ。不必要に権威を持っており、四天王もやや辟易しながら集まった。

それはエイジが全てのバッジを集めてから数日と経たない時であった。

チャンピオンリーグに呼び出された。

受けループでもないパーティーに無限グライオンを利用しようとする事は愚かであったし、絵面が非常に地味になるということも考慮するべきだった。

スモモのジムで、格闘タイプだしいけるやろ！ と考えたのがいけなかった。さっさとキッスで終わらせるべきだったのだ。負けて悔しいのか泣いちゃうし、こちらとしても外聞が悪かった。

他のジムリーダーはガブバシャでさっさと終わらせたが、流石の害悪戦法は問題だったらしい。

やべー。まじやべー、っべー。

いや、本当に。

何がやばいかって、トレーナー資格を剥奪される可能性があるのである。

トレーナー資格が無いと言うことは、非常にヤバイということだ。ポケモンを連れての外出は資格がないと許可されないし、モンスターボールの所持も——六つまでだが——許されない。

俺がこの世界に来てから一番最初にやったことは、トレーナー資格の取得だと言っても過言ではない。

加えて、ポケモンセンターの利用もトレーナー特権だし、何より収入に直結する。

一応、騎士道の売れっ子である俺はCM出演などもやっているのだが、イメージが傷つくと莫大な違約金が取られるのだ。

タマゴ島購入に家建設、百を越す大小様々なポケモンの食費で手持ちの金は少ない。違約金が発生すれば——不自由はないが——新しい仕事を探さざるをえないだろう。

このポケモン世界、チャンピオンリーグ関係者はかなりの権力を持っているのだ。四天王はその最上位と言ってもいい。人間的には一癖も二癖もあるだろう。

シンオウなら、頭がもじやもじやした人やキクコ似のBBA、虫使いに……あと一人は誰だ？ Ptはなにぶん、数年前のことだからあまり覚えていないので仕方ないね。

取り敢えず、その三人だけでも異色の組み合わせであることが分かるだろう。

そんな人間を相手に、僕は大丈夫なトレーナーです！ と宣言しなければならぬ。彼らは変人だが、ポケモンへの思いは真摯なものだ。欺ける相手ではないし、欺こうとするのも良くない。

しかも、これは非公式で内密に言われたものだと思っていたが、普通に周知されている。誰だリークした奴は！ 許さんぞ！ グギイイ！

取り敢えず、チャンピオンリーグに行こう。ウルガモスに掴まつて、空へ飛び立った。

チャンピオンリーグの制度はゲームとは違う。どちらかと言えばアニメに近いのだろう。一般トレーナーと四天王含むトレーナーがリーグ方式で戦って、優勝したのがチャンピオンに挑める、というルールだ。

いきなりチャンピオンと戦った俺って、結構（後ろ盾の権力が）凄いのである。

また、滅茶苦茶人が集まるので、土地だけは馬鹿でかいのである。デツカイ塔が建ってるだけじゃない。

で、会議室的なところに呼び出され、目の前に四天王がいる。

「キミ、相当クレイジーなんだって？」

「いえ、真面目です」

「相当悪いウワサを聞くぜ」

「エゴサーチはオススメしません。自分のことは自分にしか理解できないのですから」

目の前のもじやもじや……赤い髪のオーバさんが、いきなり失礼な質問をぶつけてきた。

結構、フランクなんスね。もっと逆○裁判ばりにギチギチした形式

でやるのかと思ってた。

「悪い男でもなさそうだけど、いい男でもなさそうだね」

「僕もそう思います。冷たそうな人だ」

キクノさんと四人目のゴヨウさんがそう俺を評価する。……結構悪いのね。目つきが悪いからかね。残念だが生まれつきだ。

「エイジ君、ハツサムやウルガモスの他に、虫ポケモンを育てたことはあるかい?」

虫の四天王、リョウ。やっぱり虫ポケモンに興味があるようだ。騎士道バトルの見せ合いの段階で、手持ちにいたポケモンも把握しているとは珍しい。

トレーナー資格がかかった質問だ、慎重に答えなければ。

「シユバルゴ、アメモース、ヌケニン、ヘラクロス、ペンドラー、そのくらいです」

「おや、テツカニンはどうしたんだい?」

「……忘れてました」

……虫ポケモン好きの前で、やつちやあいけないことをしたかもしれない。一匹作ったけど、バトンなら他でもいいからなあ。他の運用は考えたこと無いし。

「……なるほどね。協会がうるさいから顔を立てたけど、別にいいんじゃないかな」

ん?

「ギンガ団の事があるから神経質になってるだけだよ」

おお?

「アツくはないが、そんなに騒ぎ立てる事でもないだろう」

流れ変わったな。

「大丈夫だということ、騎士道協会に報告して解散ですかね」

よくわからんが開放された、やったぜ。彼らのOKの基準は全くわからなかったが、今の問答になってない問答でも許可が出るとは。

こうして、シンオウ地方保身の旅は終わりを告げた。評判に多少の傷は付いたが、傷の上からチャンピオンリーグのOKサインという金メッキを塗ったので問題ないだろう。

流石に、これ以上の問題はないだろう。もうちよつと慎重に動かなければならないという教訓も得た、意外と俺の評判が悪いことも分かった。

暫くは大人しくして、経済基盤を整えよう。

エイジの召喚理由、その背景がまたアホらしいと、四天王は感じていた。

ギンガ団が一般人やら建物やらに色々とやらかしたせいで、トレーナー協会に苦情が掃いて捨てるほど殺到したのは記憶に新しい出来事であった。

ポケモンとともに生きる歴史を持つ「人類史」で、ポケモンに関する問題を無視することは出来ない。

そのため、素行に問題アリとされたトレーナーやギンガ団に加担したトレーナーがエイジと同じように査問され、資格剥奪や罰金、逮捕など色々な処罰を受けたのだ。

更に、一般人——主にジムリーダーファン——からエイジに対する苦情が雲霞の如く湧き出たとあれば、情勢が情勢なので無視できない。

こういった経緯で、マイナー競技の売れっ子に対する悪評を問題視した騎士道協会が、無駄に持っている権力で圧力をかけ、無理矢理エイジを召喚させたのだ。

問題なしと判断されれば、それはチャンピオンリーグのお墨付きを得たということになる。

なんとも欲にまみれた理由で呼ばれたことに、呆れ半分怒り半分で四天王は応じたのだ。しかし、シロナは問題ないとだけ言って欠席したので、四天王は増々乗り気ではなくなったのだ。

結果、問題アリと声高に叫ぶ世論——一部のうるさい連中——とは反対に、問題なしとの結論が出た。

エイジはそれ以上、トレーナーとのバトルをすることはなかったが、騎士道のバトルはいつも通り続け、低IQのテレビ番組でなんや

かんやと騒がれていた。

ポケモントレーナーに潔白が求められる時代になったのだ。

グレーではなくホワイト。ブラックは消去すべし。

善人には追い風が、悪人には向かい風がそれぞれ吹いた。エイジも少なからずその風に曝されてはいるが、地位を脅かすものにはなっていない。例え四天王がNGを出したとしても、彼を擁護する声は幾らでも上がるだろう。

なぜなら、彼の放つ光はあまりにも眩しすぎるからだ。

普通のバトルとは異なる方式であるが、デビューから無敗の百連勝とは、あまりにも難しすぎる行為だ。

プロ同士のバトル、その平均的な勝率は三〇五割。バラツキはあるが大体がその層に位置する。そして、四天王やチャンピオンであれば頭一つ飛び抜けて、八割近い勝率を叩き出す。

競技に生きる者の宿命だ。

どれほどの強打者であっても打率が十割になることは有り得ないし、どれほど良いチームでも負ける時は負ける。更に、常に最高のコンディションが保てるとは限らない。

ポケモンでも同じことが言える、技が必ず命中するとは断言できないし、傷ついた時に万全の状態と同じ威力の技を放つことは出来ない。生き物の性に囚われているのだ。

だが、エイジはそれを乗り越えた領域に足を踏み入れる。

瀕死寸前の状態でさえ、ポケモンは膝を突くことすらおろか、技の威力を落とすことすら無かった。試合の日が続いたときでさえ連戦連勝。勝利の威光に影を落とすことはなかった。

試合を実際に見る者は少ないだろうし、編集された映像に目を通すトレーナーの方が多いだろう。競技の存在を初めて知った人間も多いはずだ。内容も知らない人間が大多数を占めるに決まっているのだ。

だが、踏み越える。

百回戦って百回勝つトレーナーに、注目しない世界はない。その経済をポケモンに大きく委ねる社会で、無敗というのは大きな称号の一

つ、偉大な業績の一つである。

彼の光に惑わされ、騎士道に転向しようと言つたトレーナーは増加傾向にあるのだ。そこには目に見えない熱狂がある。空の盃を傾け、美酒の味を想像しているトレーナーが山ほど存在する。

積み重なる影の頂は、悪を寄せ付けないのだ。

騎士王が墮ちる時は、彼自身が足を踏み外したときだけだ。

なんだかんだで二ヶ月ほど経った。季節的には真冬だ。

シンオウは北に位置するだけあって寒い。ポケモンがマフラーをしたり、服を身に着けている光景をよく目にするようになった。犬に服を着せるのと同じ感覚だ。

そして今、家から離れて二週間目となっている。春に向けて騎士道の新人を呼び込むための業務をやらされたのだ。具体的には「戦い方」の指南、「タイプ相性」を考えたパーティー構築などだ。

食い扶持をぶん取られるのは最悪なので、意図的に手を抜いているのは言うまでもない。

あとは、素早さが重要だということくらいだ。騎士道では予めポケモンの素早さを数値化し、それが高い順に行動するように定められている。それを知らずに入ってきた人（何故知らない）も多いらしい。ただ、極振りしている個体は滅多に存在しない。俺の手持ちならともかく、速さに特化して訓練するというのは、この世界では珍しい。五十レベルのラインを超えるのにはそれなりに時間がかかるらしく、育ちきる（ゲームで言うところの努力値振り完了）までの間に、攻撃も防御もと欲張るトレーナーが多いのだろう。

しかもレートみたく、ポケモンのレベルを五十レベルまでに抑えるレベル制限リングを付けることすらも知らない新人は多い。……まあ、それなんてオーパーツ？ って言いたくなるのは分かるが。

それはそうと、最近は騎士道の競技人口が増えているらしい。元々不人気だったマイナーだ、どうせすぐに減るだろう。

不人気の理由の一つには、テンポの悪さがある。競技には三人の審判が必要であり、審判を挟んで行動を決定するため、技を出すのに思考時間を含め三分以上は掛かる。カッププラーメンの待ち時間を複数回、試合が終わるまで待つのは苦行だろう。

加えて、将棋やチェスみたく解説役が居るわけでもない。技構成、耐久調整、持ち物、読み、何を考えて何をやろうとしているのか分からないのに、人気が出るわけないのだ。

だがマイナーと言われる程度には人気がある。つまり——
安定職！ 高給！ 高待遇！

後ろ盾は「無駄に」歴史と伝統があり、良くも悪くも馬鹿な連中だ。
これほど楽な仕事もあるまい。

空を飛んで帰路につくと、タマゴ島の沿岸に一隻の船が止まっていることに気づいた。

ウルガモスから降りて船内を見れば、無人。ただ、近頃問題になっている「ギンガ団の残党」とやらのマークがプリントされた上着を発見した。

ついに、恐れていた事態——人間がこの島に乗り込む——が起こったか。幸いにも、ギンガ団の連中は船の大きさを見るに数人だ。ぶつコロコロするにしろ、海に沈めるにしろ、難しい人数ではない。

急いでタマゴプラントに飛ぶと、人型のキャンプファイヤー跡が残っていた。他にも灰が積み重なっている場所が二箇所ある。

これは、既に何人かを「自動的」に始末できたということだろう。洞窟に到着するやいなや、大量のウルガモスが中から飛び出してきた。見知らぬ人間が来て敏感になっているのか、それにしても優秀な防御装置である。

「無事か？」

ウルガモス達は翼を羽ばたかせて肯定した。

……イエス・ノーくらいなら区別がつくようにはなった。これもコミュニケーションの賜である。

「他にも誰か居るのか」

これもまたイエス。ウルガモスの攻撃から逃げ延びた奴らがいるということだろう。……ここを見た以上、生かしてはおけない。どうせ不法侵入者だ、いなくなった所で搜索の手は伸びないだろう。

そろそろ日が落ちる。ロツジが無事であることを確認してから、船の近くに潜んだ。

完全に夜の帳が下りると、森がざわめいた。侵入者共が追われているのか、単にポケモンが騒いでいるのか。

夜が明ける頃になると、ボロボロになった男女が船に乗り込んだ。服もドロドロに汚れ、目の下には深い堀が出来ていた。

……四人か。

彼らが船を出すと、俺はウルガモスに乗ってその後を追い、モンスターボールからポケモンを出した。

「行け、サンダー」

「ギユアアアアオ、バリバリ！」

伝説のポケモンでも言うことを聞いてくれるのは確認済みだ。

で、何故サンダーを出すかと言えば、伝説のポケモンだからだ。

一般人が伝説のポケモンを所持するということは、実に面倒くさい。資格とかそういうのではなく、全く捕まえられないのだ。こっちの手持ちならともかく、野生で生きている個体はボールを弾くわ物理的にモンスターボールが届かない場所に逃げるだとか、実にやりにくい。

ちなみにこれは俺自身の体験談ではなく、他人の体験だ。

そういうわけで、公式には伝説のポケモンを持っていないのだ。言ってしまうえば違法伝説。つまり、伝ポケでコロコロしてしまえば、天災みたいなものだし仕方ないよね、となる。

そういう理由で、サンダーに雷の指示を出す。

轟音の直後、爆発音が響いた。

船は炎上したが、沈んではいない。五発ほど追加で雷を落とす（二発外した）と、船は完全に砕けた。

「ありがとう、サンダー。帰ろう、ウルガモス」

パタパタと一緒に飛んで帰る。伝ポケの性質上、おいそれと外に出す訳にはいかないので、今だけでも楽しませてやる。

サンダーに手を汚させたことは申し訳ないが、『殺処分』や『監禁』の可能性を考えると妥当だろう。

物騒な発想だと思わないで欲しい。……俺の持つポケモンは全て、タマゴ島にある「パソコン」に入っていたのだ。

その「パソコン」にはグラードンやカイオーガのような禁止伝説、三犬、三鳥、実に様々なポケモンが眠っている。ゲーム内のボックスが

統合されているのだ。

つまり、一体しか存在しないはずの伝ポケに二体目がいるということである。いや、十匹位いるポケモンもいるけどね。まあ、どんな惨事が引き起こされるか想像もつかない。「一匹ならええやろ」と解剖される可能性も否めないしね。

バレたらヤバイのだ、殺しを手伝わせるのもまあ許してねって感じ。

存在が露見してはいけないのには山ほど理由がある。人間が禁忌に触れることになるのだ。伝説のポケモンが山ほど眠るとなれば、タマゴ島を巡って、向こう千年闘いが続いてもおかしくないのだ。

伝説のポケモンの力があるのだ、誰も信用してはいけない。誰も信用することは出来ない。侵入者は絶対に生かして返してはならないし、僅かな情報を残すことも避けなければならぬ。

ちなみに、「パソコン」を移動することは出来ない。そのための試みは全て失敗した。移動「しよう」と思えば出来るのだが、それはあくまでも最終手段。計算に入れてはならない。いや、マジで核爆弾並の最終手段なのだ。地位を放棄するような行為だしね。

おいそれとそんなものは使えないので、守り通さなければならぬ。秘密のために、安定した生活基盤と社会的地位は必要不可欠だ。そのために、殺すときは殺す。バレないように、こつそりとやらなければならぬ。これからもそういうことは続くだろうが、今回は船を沈めたし、良しとしよう。流石に死ぬ筈だ。

万が一漂流して保護されたとしても、冬の海だ。ベッドの上で衰弱死するのが関の山だろう。

二週間後。

タマゴ島の別荘っぽい家で目を覚ました俺は、腹の上に乗っかるブースターをそつとどかして、窓を開けた。新鮮な空気と心地よい朝日が眠気を吹き飛ばし、大きく深呼吸をすれば身体に力がみなぎる。

朝の支度を済ませてから電子版のニュースを見た俺は、イチオシ記事と書かれた項目を見て、口にしたエネココアを吹き出しそうになっ

た。

『元ギンガ団員が語る衝撃の真実！ 騎士王エイジにかけられた殺人容疑の裏側！』

殺人容疑。殺人をしたと疑われている、ということだ。

此処に出るニュースというのは大抵、ネットの掲示板をまとめたものか眉唾ものの記事か……偶に出て来る本物のどれかだ。

生きていたのか……違う、殺し損ねたか。どういうこっちゃ。

やけに詳細な記事に目を通せば、ラプラスに助けられたらしい。

何にせよバレた。ここから誤魔化す方向に動くか、最終手段を使うか、上手く立ち回らなければ家宅捜索などは免れないだろう。

まずは、うるさい騎士道協会からの電話に出なければ。

「エイジです。ええ、見ています。……全くの嘘偽りです。この人物の証言には嘘が多い。……私は黄色の鳥ポケモンなど所持してはいませんが、それはご存知のほうでは？ それに、情報源が信用できません」

コイツめ、よほどしぶとかったらしい。サンダーの雷を五発も食らわせたと言うのに、記憶が吹き飛んですらいはないとは。しかも冬の海に落ちて無事とは……ゴキブリか何か？

「カメラ映像が残っている？ まさか、それこそ眉唾モノです」

（マジ？ 頑丈すぎない？ 陰謀とか疑うレベルなんですけど）

「ええ、情報提供はありがたいのですが……雷かなにかを見間違えただけでは？ ハッキリと申し上げますと、私にはこの人物を害する理由は……ああ、この記事ですね」

何々、「六枚羽のポケモンが、『遭難した』俺たちをいきなり襲ってきた」とな。あくまでも被害者ぶるつもりか。

しかし、タマゴプラントの事が語られないということは、そこまで到達できなかつたということだな。早々に撃退されたか。おくびよるような個体やひかえめな個体が多いことが、幸いしたな。

「失礼ですが、まずは私の私有地であるこの島について、把握していることはありますか？ 無い？ ではそうお思いになられるのも無理はありませんな。誤解を解くには、直接会って話しましょう。では」

強引に会話を切り上げると、育成済みのウルガモスを何体か連れてタマゴプラントに預けた。怪しい人物は撃退するように言っておいたので、家宅捜索にきた警官程度なら撃退できるだろう。

俺が居ない間に探られることは、なんとしても避けなければならぬ。
い。

家とプラントを移動用ウルガモスで往復していると、旅パ産ボーマ
ンダが放流された森から飛び出して、俺達の横につく。

頻りに騒ぎ立てるのでついて行けば、島の外縁部に「彼女」は佇んで
いた。

チャンピオン・シロナが、俺に微笑んでいた。

シロナはその一報を目にした時、「ついに」とも思ったし、「まさか」とも思った。

騎士王・エイジにかけられた殺人の疑い。夜を徹した研究の、ほんの息抜きに手に取った記事。鵜呑みにするつもりはないが、彼女の中でそれは大きな疑問となっていた。

(彼が、そんなことをするとは思えない)

エキシビジョンマッチの時、シロナも少なからず冷酷さを感じたが、彼のポケモンたちはエイジに対して信頼を寄せていた。あれほどのポケモンと信頼関係が構築できているのなら、世間が言うほど酷い人物ではないだろう——と思った後にコレだ。

(確かめないと)

学者としての性か、トレーナーとしての矜持か、シロナはいてもたってもいられず、飛び出した。

シロナがタマゴ島——彼女はこの名称を知らない——の沿岸に着くと、そこから島の内部まで続く森がざわめくのを感じ取った。森からは数多の視線を感じ取り、背後の海からは頭を出したポケモンが山ほどシロナを眺めていた。

(興味、不安……怒り、沢山の感情があるわ。珍しいポケモンが多いし、ここは一体……)

主に沼地に生息しているミズゴロウやヌオー、グライガーやガバイトなど森に似合わない地面タイプのポケモン、どこからやって来たのか、多種多様なポケモンのるつぼであった。

ざわり、ポケモンが空を見上げた。それに釣られたシロナは、ウルガモスとボーマンダが目の前に着陸するのを観察していた。

彼らに乗っていたエイジと目が合うと、シロナは慌てて挨拶していた。

「おはよう、エイジ君。お邪魔してもいいかしら？」

彼はシロナの頭の天辺からつま先までを注意深く観ると、

「今朝は一段と寒い。よろしければ、ココアでも飲んでいかれますか？」

と、シロナにとって想定外な発言をする。

(なんだか、もつと警戒されると思っていたけれど……)

「どうかしましたか？」

「ううん、なんでもないわ。それより、ご厚意に甘えようかしら」

エイジは一瞬だけ微笑んで、ポーマンダにシロナを乗せるよう頼んだ。二匹と二人は空を飛び、エイジの住む家に向かった。

シロナは俺を消しに来たのか。

突然何を考えているのか、と思うかもしれないが……ポケモンを使って殺人をした人間に対する措置は、普通に、逮捕である。あり得るか？ いや、あり得ない。

どの世界であろうと調子に乗りすぎたやつというのは、秘密裏に消されるのが定め。問題行動を起こしたトレーナーが、イケイケであればあるほどその鉄槌は大きい。

ポケモンというある種銃よりも恐ろしいモノが氾濫している世界では、ジュンサーという警察機関が存在するが、彼女らとて役に立たないことは多い。彼女たちはポケモンを持った単なる警察であり、戦闘員を数多く有する組織には無力である。

言わずもがな、ジムリーダーやプロのトレーナーが犯罪を起こした場合は人海戦術でボコボコにする。しかし、そんなにジュンサーが強いのかと言えば、そんな訳はないのである。事件が同じ地方で何度も何度も発生するわけではないし、経験値とて人数が多い分少なくなる。

ゲーム内でも、サカキであったり、ギンガ団の何とかさんにたどり着いたのは「主人公」やジムリーダーだ。大人の事情もあるかもしれないが、実際こちらの世界でもサカキは捕まっておらず、何とかさんも行方不明だと言われている。

強力なポケモントレーナーが犯罪をしたらどうなるのか。対抗策

が無いというのは国家としてありえないことであり、警察機関が糞の役にも立ちやしねえなら何かしらの方法を持っているはずなのだ。

特に、この世界でポケモンという力は強大なのだ。犯罪者を物理的に黙らせる人間がいけないというのは、どうあっても考えにくい。

その上で俺を殺すのであれば、戦闘機だの戦車だので島に押し寄せればいいわけで、まあ呆気なく終わるだろう。しかし、ポケモンが戦争の道具として利用されてきたことを考えれば、少なくとも被害が出るわけだ。

コスパは最悪、であれば、「勝手に生えてくる」チャンピオン・四天王をぶつければいい。

というのが自論である。

つまり、シロナという人間はイキスギなトレーナーを暗殺する役割を持っていてるQ・E・D.

とにかく、重要なのは「俺を殺す可能性があるトレーナーが目の前に存在する」という事だ。

現に彼女の腰のホルダーにはモンスターボールが六つくつついてるし、フルパーティーだ。

ウソやろ!?

今、飛ぶ要員のガモスと着いてきた旅マンダしかいない。市販のモンスターボール入れは六つまでしかボールを積めては置けないし、こんなことが起こるとは想定していなかった。

現状では、彼女のポケモンに対抗することは出来ない。

最悪を考えた場合、問題解決のためには育成済みポケモンの居る我が家に行かなければならない。

幸いにも、シロナは今すぐ俺をどうしようという気はないらしい。出会い頭にポケモンを投げてこない辺り良心的だ。多少不自然に見えるかもしれないが、コテージに誘って戦闘準備を整えなければいけない。

「よろしければ、ココアでも飲んでいけますか?」

——誘った。

誘いの言葉を口にすれば、心臓がバクバクと自己主張を始める。腰

にボールを付けたポーチは無い、露見すればこの場で闇系のお仕事される可能性だつて否定できない。

ゲームとアニメで描かれなかっただけで、チャンピオンというトツプに血なまぐさい側面がないと思ひ込むのだけは避けなければならぬのだ。

俺はウルガモスに半身を隠しながら、返事を待った。シロナさ……シロナは、目を少しだけ見開いて驚いたような表情を……いや、考えるだけ無駄だ。あれは所謂ポーカーフェイスというやつだ。表情を作つて、油断させようとしているに違いない。

「どうかしましたか」

「ううん、なんでもないわ。それより、ご厚意に甘えようかしら」

……え？

もしかしたら、下調べなのか？

ここの土地の情報を持ち帰ったりするのかな？

何なんだコイツは、まるで訳が分からない。

取り敢えず、ボーマンダに乗つてもらおうと、俺は小声でウルガモスに「距離を離しながら飛ぶ」よう指示を出した。飛行中もシロナが襲つてくることはなかった。

家に入ればこちらのもので、シロナのポケモンがいかに強くとも、物量で押し潰せる。生殺与奪権を俺が握れるのだから、まずは帰らなければ。

(すごく大きな家……ポケモンも住めるようにしているのね)

まるで巨人の家に迷い込んだようだ、シロナは心の中で笑う。

エイジはシロナよりも速く飛んでいき、追い付いた頃には家の中に転がり込んでいく姿が伺えた。

(彼、意外と子供っぽいのね)

普段とは真逆の印象に、シロナのエイジに対する評価は上がっていた。……不良が子犬に傘を差してあげるのを見た、というやつだ。

シロナも開け放たれた扉を通じて中に入ると、足を一步、思わず止

めてしまった。

「っ……これは!」

「どうです? 流石のチャンピオン・シロナも、これには(戦力的に)驚いたでしょう」

多種多様なポケモン達が、思い思いの形でくつろいでいるのだ。空間は縦横に広々と確保され、飛行タイプのポケモンが窮屈しないようにもなっている。ガラス張りの窓の向こうには、大きなプールとくつろいでいる水ポケモンが見える。

他にもキュウコンとワタツコがじゃれ合ったり、ガブリアスやカイリユーなどのドラゴンポケモンがテレビに張り付いてポケモンバトルを見ていたりする。

シロナが戦いで見た限りの印象では、想像もできなかった光景だ。

「ええ、(ポケモン愛に)驚いたわ」

「誰も入れたことはない、自慢の家です。……そのソファに座って下さい。今ココアを持ってきますね」

エイジはキッチンにもこだわりを持っているらしい。透明な壁で仕切りを作り、ポケモンが事故を起こす可能性を少なくしている。

「どうぞ」

シロナの前にマグカップを差し出されると、甘い香りが鼻腔に広がる。

「さて、要件を伺いましょう。何をしにこちらへ?」

「そうですね……簡単に言えば、確認をしに来たわ」

シロナがココアを啜ると、エイジの視線が鋭くなる。

(やっぱり、あの記事を気にしているのね)

(敵情調査か!) なるほど、それで、何の確認に?」

(デリケートな内容で) あまり言いたくないのだけど……」

「気持ちわかります。(始末されるのは) 不幸なことだ、あなたにとっても気分のいい話ではないでしょう」

「そうね、エイジ君がとても殺人をするとは思えないわ」

「ん……?」

エイジは片眉を顰め、違和感に気づいた。そもそもエイジの思考自

体が間違っているのだが、そこには気付かない。彼にとって、世の中の普遍的な真理は死角に潜む罠である。世代間相違ならぬ世界間相違のせいでもあるが。

「チャンピオン、アナタは俺を殺しに来たんだろう？」

「……え？」

「懐柔できるとは思わないで——」

「ちよつと待つてくれないかしら？ エイジ君が何を言っているのか分からないわ」

「しらばつくれるおつもりですか、素直に現実を見たほうがいいですよ」

「現実を見るのはアナタよ、酷い想像に囚われているわ」

シロナは不当な言いがかりを飲み込むほど寛容ではない——エイジの度が過ぎているとも言う——ため、徹夜明けということも加えて、であるでないの言い争い——水掛け論になった。

その光景を見て、ヘルガーやウインディは大きく欠伸をした。

（シロナが推定暗殺者であるという認識は、頭の片隅に置いておこう）
小学生以下の水掛け論などやっている暇はないのだ。今は話をする。

シロナが来たというのはある種逆境であるが、そもそもそれは彼女が暗殺者であるという前提の上で成り立つのだ。そうでないのなら、うまく話を進めて味方、もしくは敵でないポジションに収めないといけない。

コロコロするにもデメリットはある。無法者がわざわざ行き先を告げて来ることはない——と想定している——ので、遠慮なくやれるのだ。失敗したが。

シロナのようなまともな人間は、行き先を告げる可能性が大いにある。死体に変えてもいいが、バレれば社会復帰が完全に出来なくなる。ついでに殺すメリットがない。

逃げようと思えば最終手段でいくらでも逃げられるのだが、やろう

と思えばやれるという事をやるのはナンセンスだ。駅で自殺することとは出来るが、やるのとはまた別だ。

「その、私が暗殺をしようの、そうね……凄いい発想だと思わうわ。誰でもそういう時期はあるもの、今は精神的にも余裕が無いでしょうし……」

誰が厨二病じゃポケナス。

シロナも俺も、クールダウンするために二杯目のココアを口に含む。一気に飲み干すと、カップに残った熱で両手を温める。

「もし、私がそういう仕事をしているとしたなら、エイジ君の方にも誘いが来ると思わうわ。私よりも向いてそうなもの」

失礼なことを言っているが一理ある。

チャンピオンが第一の暴力装置であるなら、第二第三の者が居てもおかしくはない。彼女と俺を比べるのなら、戦力的にはこちらのほうが優位だ。ポケモンだけ、チャンピオンに準ずる実力があるのは証明済みだ。

シロナが暗殺者でないということ証明するのならば、暗殺者であるとは証明できない事を示さなければならぬが、その点において実に意味のある疑問だ。

まあいい。そればかりに固執するのは良くない。こちらは彼女が闇系の仕事人でないという前提で、前向きに話を進めていかなければ。逆風に逆らうことだけが人生ではない。

「分かりました。ですが、それなら貴女は何故この島に？ わざわざ、

それこそ今の時期に訪れるのは不自然です」

そこだ。まさか額縁通り「話をしに来た」ということは有り得ないはずだ。俺達は一度バトルをしただけの間柄、アポ無しで、突然やつてくるのは何かしらの目的があるはずだ。

「そんなに変かしら」

「ええ、そうですとも。チャンピオンが此処に来て、お話をして帰ると？」

「そうよ、話をしにきたの」

「……………」

非合理的だ。第一、メールでもすれば済む事だ。個人的なものとは別のアドレスを作成して、公開しているのだ。忙しいから見ないだろうが。

「ごめんなさい、いても立ってもいられなくて」

「……住所はどうやって知りましたか？ 公開はしてませんよ」

「島を買ったってニュースを見たことがあったから、飛び回って見つけたのよ。特徴的よね、ここは。すぐに分かったもの」

行動力が高すぎない？

いや、この世界の人間のアホみたいな行動に驚かされることは、一度や二度ではすまない。まだ、この世界では常識の範疇なのだろう。

とりわけ、ジムリーダーや四天王といった並外れた才覚を持つ連中は、馬鹿みたいなの——人間業ではない事を平然とやってのける節がある。縦に三メートル程飛び上がったたり、超能力を当然の権利のように使用したりと、物理法則から逸脱しているのだ。

そもそもポケモンとかいう存在がファンタジーなので、今更こんなことを言っても仕方あるまい。

「それで、一体何の話？」

「あの記事の真実が聞きたかったの。私はエイジ君がそんなことをするようには見えないわ、だから、聞かないといけなかった」

——チャンス到来。かもしれない。

仮にシロナの語る言葉が真実であるのなら、適当に嘘八百を並べて満足させればいいのだ。少なくとも、表面上は穏便に事を済ませられる。

見る人は見ているのだ。他人の評価というものは、普段のまともな行いが反映される。普通の人間であれば、敵よりも心強い味方が出来るのである。条件付きの味方だが。

で、何を言うかが問題なのだ。

「俺は、やっていませんよ」

「信じるわ」

マグカップを持つ手を、シロナが上から重ねた。

不意打ちに柄にもなくドキツと来てしまったが、ファミレスで怪し

い宗教系のお姉さんが話す時に用いる常套手段だ。相手の精神を無防備にする効果があるため、惑わされてはいけない。

「……この島に来て、どう思いましたか」

まずはジャブ。数多のポケモンを飼っていることは多分理解しているのだろう。

島にいるポケモンは俺からすれば、使えないので私有地の島で放し飼いでいる、という認識。家にいるポケモンは、稼ぎ頭だし、何が起るかわからんで厚遇中、と言った具合だ。

外から見ただけでは多分、何が違うのかをハッキリと理解することは出来なくても、雰囲気は感じ取れる。冷遇され外での生活を余儀なくされている者と、悠々自適に暮らす者。見抜かれたらヤバイ。責任をもつて飼えとか言われる。

「……奇妙だったわ。私が見たのは一部だったかもしれないけど、こんなにも多くのポケモンたちが、生息地や環境を無視して生活しているのには目を見張るものがあったわシンオウ地方に生息していないポケモンが、何故この島だけで生きているのか。地殻変動？ それとも誰かが連れてきた？ 誰がこんなに沢山のポケモンを？ 島で生きる生き物というのは、普通は長い年月をかけて独特の形になるのよ？ そのはずなのに、多くの地域に生息するポケモンと同じ形態をとっている。詳しいことは調査してみないとわからないわ、それに、ここでは食料争いの声は聞かなかった、どんなポケモンも——此処では生きていける。デッサンの狂った絵みたいだけれど、それが噛み合って不思議な空間を作っているわね」

流石研究者、語るねえ。しかし、独特の視点である様に思える。俺が飼っているという選択肢を端から除外しているようだ。

……何故だ？ ここは俺の私有地で、此処にポケモンがいるということは、それ即ちエイジのポケモン、という結論が出るのではないのか？

「この辺りはプレートと近いのだけれど、どちらかと言えば海洋プレート側なのよね。海底火山も少し離れたところにあるわ。そもそもこの海域に島があるということが驚きなの。ここは水深が深くて

千メートルを越えているはずなのに、この島だけが浮かび上がったようにポツンと存在しているの。危険なポケモンが多いのもそのせいね、水深が深いから浅瀬では見かけないようなポケモンが沢山生息しているの。最初は浮島かとも思ったのだけれど、ここの地面は岩よ。軽石でもない岩。浮力に対して重量がありすぎるし、浮島ではないわ。浸食作用が見られないのも驚きね。まるで最近できたみたいだわ」

へ、へー。この島ってそんなに訳分からん存在なのか。

そういうのって購入に待ったをかけるもんじゃないのか？ 家を建てる時に遺跡が出てきたら、建築をストップするのと同じだ。

いや、訳が分からないから止めなかったのか。どちらにせよ購入できたのはラッキーだ。

何より、怪しまれていない。

「私が考えているのは、この島が自然に作られたものではない、という事ね。人工物に見える自然は——例えば海底にある人工的に整えられたように見える岩なんかね——世界に沢山存在するけれど、それは条件が揃って偶然出来た自然の奇跡だわ。でも違うの、それとは別の違和感があるわ。自然の作用を受けないということは、既存の物質からかけ離れた——ポケモンによって作られた物だとか、古代人が作った物なのかもしれない」

そろそろ長くなってきた。いい加減切り上げて欲しいが、頭の回転が早くない俺はうまい言い訳を思いつかない。もう少し話して、考える時間をくれ。

「ディアルガとパルキアって知ってるかしら？」

持ってます。具体的には二体ずつ。

「シンオウ地方の神話に描かれる存在なのだけれど、彼らを祀った遺跡があるわ。ずいぶん古いものよ、もうぼろぼろになっているもの。古代の人達だって、劣化しない物を作れたわけではなかった……つまり、この島にはまだ語られてもないような伝説のポケモンが居た痕跡があってもおかしくはないわ」

何がつまりなんだ。というか、この人は別のベクトルでヤバイ。暗

殺者であろうとなかろうと、この島に再び訪れる可能性は高い。

「そうだ！ 今度、この島を調査させてくれないかしら？」

ほらみろ、本来の目的を見失ってやがる……。

「お断りします。……話を戻しましょう、次は私が話す番ですね」

「！ そ、そうね……少しはしやぎすぎたわ」

……。

上手い言い訳を思い付いた。

彼女の良心に付け込めば何とか説得できるだろう。多分。

シロナは善性の強い人間である、そう確信を持って言える。多分。プレイヤーからすれば「糞寒いセリフ言つて恥ずかしくないのおばさん？」と思うかもしれないが——彼女は二十四歳だ、意外なことに年下である——この世界では割と普通だ。

流石にチャンピオンを知らないとは言わない。テレビに出る機会も多く、それなりに彼女の価値観に触れる機会は多かつた。

ポケモンとの絆を重視する傾向があり、研究者としても活躍している。研究者とはMADでもない限り分を弁え、法律を遵守し、倫理に縛られている。

あたかも自分が善人であると装えば、大抵のことは納得してもらえ
るはずだ。駄目なら、やるしかない。

では、如何に説得するのか。シロナの話に着目すればその材料は全
て揃う。

着目すべきポイントの一つはこの島の性質である。

シロナ曰く、生態系がおかしい。何かがある。そんなことを言っ
たのだ。

つまり、珍しいということである。珍しい場所というのが大抵保護
されているというの、言うまでもないことだ。

ラムサール条約や絶滅危惧種といった単語にピンと来る人間は多
いだろう。それらは生物多様性の観点から保護しなければならぬ
……等の理由から生まれた単語である。ラプラスが一時期の間、絶滅
危惧種であったことから、この世界でも同様の概念は生まれている
だ。

何が言いたいのかと言えば、島に生息するポケモンを刺激したため
に起こった「不幸な事故」であると主張して、生態系の保護とポケモ
ンの保護を考えて島にいるポケモンを公にせず、内密に裁判などの処
理を行いたい、とシロナを説得するのだ。

ついでに、弁護士とももう相談しているなどと言ってしまうと、向

こうには真贋がつかないので、口を噤んで立ち去ってくれるだろう。尤も、敵ではない事を前提としているが。

「——というわけです」

「管理の面で追求されそうね……」

「シロナさん、迷惑をかけるつもりはありません。私の精神衛生上、貴女のような立派な方に此処に居てもらうのは忍びない……どうか、今日のところはお引き取り下さい」

「……………」

よしよし、考えてる考えてる……良心的な人間ほど、この手の言葉で察してくれるのだ。「これは悪いことをしちやいましたワ、帰りますワ」と帰ってくれるはずだ。相手の顔を立てつつ、帰宅を促す……我ながら完璧な

「エイジ君——とても良く頑張ったわね。一人でこの島を守ってきたのでしよう？　だから、今だけは力添えをさせてちょうだい」

What?

「駄目です。帰って下さい」

「お願いよ」

「忙しいので」

「それなら！」

シロナが勢い良く立ち上がって、目を輝かせる。……私欲が垣間見えるぞ。

「バトルで私に勝てたら、大人しく帰るわ」

自分の土俵に立って何が何でも要求を通そうとする姿勢は評価できる。

ただ、ポケモンバトルはもうシロナの土俵ではないのだ。悪いが、魔法の言葉を唱えてやれば、厨ポケが素早さに従って蹂躪してくれるのだ。

「申し訳ないですが……貴方は帰る運命にある。痛い目を見る前に去るべきですね」

「ごつちも譲れないわ。ルールは？」

「一対一。交換は無し、道具もなし。手早く終わらせましょう」

素の能力なら勝っているので、当てさえすれば勝利確定である。「始めましょう。貴方とのバトルは、今思い出しても熱くなるもの！」

勝った。

一対一だったので、犯罪者ポケモンで強引に勝ちに行った。

当初の俺の警戒とは裏腹に、シロナは連絡先を渡すだけであっさり帰ってくれました。(都合の)いい人だな。いや、この島に来ること自体が駄目なんだが。

それはそうと、タマゴ島が簡単に来れると判明したので、最終手段を使おう。防諜施設兼安全地帯としての役割が持てないので、此処に居続けるのは有り得ない。

騎士道協会に顔を出す必要もない、もう二度と会うこともないのだから。

シロナが水平線の向こう側に消えてから、「パソコン」のポケモンを取り出す。

ボールを投げると、パルキアとグラードンが飛び出す。

これから行うのは引越しと証拠隠滅であり、劇的に追跡という行為を終了させることが出来る。騎士王エイジ生存説というものを、真っ向から否定できるインパクトがある。

正直な話をする、島と家と食料だけで資金が底をつくはずがない。資金繰りが厳しいのは全く別のものを予め購入しておいたからなのだ。広義で言えば家なので、ウソはついていない。

別のものと言えば当然——土地である。別人の戸籍もキチンと作成した。引越そうと思えば何時でも——具体的には半年前から——出来たのだ。

ただ、安定し始めた環境を見捨てるのが無駄だっただけであって、あんな事態になればすぐさま移住できるだけの用意はあった。

移住先は、イツシユ地方だ。

立地としてはフウロがいるフキヨセの西、山を超えた中腹部の辺りから麓周辺までを買い取った。

ミルタンクの牧場を作るか、ヤチエの実を量産するか、セカンドライフには期待を寄せている。

いやはや、山はあれどもこれからは平野の続く人生だろう。これまで世話になったシンオウ地方には感謝を、これから世話になるイツシュ地方には祝福を。

冷涼な空気を目一杯肺に吸い込んで、新しい生活に思いを馳せる。
いやあ、実に楽しみだ。

目の下に大きなクマをこさえたシロナは、自宅に着くやいなやベッドに飛び込んだ。昼前であったが、そのまま夕暮れ時まで泥のように眠ると、空腹とともに起き上がる。

冷凍食品を電子レンジに投げ込んで、ソファに散らばった書類をまとめて脇に置く。床に落ちていたりリモコンを拾い上げ、何気なくテレビの電源をつけた。

『——沖で発生した地震により津波が発生した影響で』

画面にはヘリコプターの中から撮影された映像が映し出され、昼頃に発生したであろう津波の被害を報道していた。

(地震? 気づかなかったわ……震度は——)

シロナの目に止まった、映像の海にぽつんと浮かぶ一つの島。

存在感を放つ『あの島』は?

シロナはつい先程自分がいた場所と似ている——否、全く同じであることを嫌でも理解できた。

「……え?」

彼女の口から言葉が漏れる。シロナにとって液晶の光景は夢のように現実味がなく、ぼやけて遠ざかって行くように思えた。

ピピピと、電子レンジが呼ぶ。

それに意識を引き戻されると、今度は食い入る様に画面を見つめ始めた。心臓の鼓動は何故か早まり、呼吸は浅くなっていた。

嫌な予感がしたのだ。

『では、エイジさんとの連絡はまだつかない?』

『はい、そうです』

『ツイッターでは津波に呑まれたのではないかと言われていますが……』

「そうよ、彼の電話番号があったはず……」

居ても立ってもいらなくなったシロナは、散らかった室内で携帯電話を探し始める。五分ほど探し回って、ポケットに入れていたことを思い出すと、妙に冷たくなった機械を取り出した。

夕日が沈む。

真つ暗になった室内でブルーライトがシロナの顔を照らし、テレビが雑音を撒き散らす。

彼女は震える指先で宛名を探した。教えてもらったばかりの連絡先を、すぐに使うことになるとは考えもしなかった筈だ。画面に映る文字を下から上へ見送って、「エイジ」の三文字だけを求めた。

今ばかりは知り合いの名前が邪魔になる。

「あったー」

やつとの思いで——それは三分にも満たない時間だが——見つけた名前からは、既に連絡が来ていたようだ。

メッセージが残っている。

「これは……」

時刻は昼過ぎ、シロナが自宅で睡眠をとった、すぐ後の事だ。

地震の起こる直前、もしもエイジの行方が本当に知れないのなら——遺言になる。

シロナは先に電話を掛けた。残された言葉が遺言でないと、エイジの声を聞いてはつきりと示さなければならなかった。

コール音が鳴る。待ちきれず、無意識のうちに指で机をトントンと叩く。待ち遠しい、一刻も早く彼の声が聞きたい、大声で叫びたくなるような衝動に襲われる。

コール音が途切れると、シロナは早口でまくし立てた。

「エイジ君!? 無事なの!? 今何処に——」

『お掛けになった電話番号は、現在電波の届かないところにあるか』

「……そんな」

断たれた希望。シロナは目の前が真っ暗になった気がして、ソファに倒れ込んでしまう。書類の束が落ちるのにも気を止めず、もう一度画面を見た。

彼女は藁にもすがる思いで、残されたメッセージを再生する。

最初に聞こえたのは、地響きにも似た大気の振動音だった。

『今日は楽し……たですよ。また……るといいですね、二度と顔を合わせ……とはしないでしようが……ようなら』

雑音混じりの録音からは、気が抜けたような平坦な声が聞こえる。それは諦観か、絶望か、死ぬ前の安らぎなのか、シロナには判断がつかなかった。

一週間後、エイジの携帯電話が南の沿岸部で発見された。マスコミは生存が絶望的であることを仄めかし、行方不明だと報道した。

シロナは時々、エイジとの勝負に勝っていれば何かが変わったのではないかと考えることがある。

(エイジ君が逃げなかったのは、ポケモンがいたからだわ……守りたいポケモン達がああ島にいたから、逃げられなかった……)

——あの場にいれば説得出来たかもしれない。

そう夢想することは一度や二度ではなかった。自分のエゴから来る欲望だと承知していた、傲慢な願いであると理解していた。けれども、願わずにはいられなかった。

エイジは強かった。別れ際のバトルで感じた氷のような熱、一撃喰らってしまえば勝利への道が絶たれてしまうギリギリの戦い。早鐘を打つ心臓の鼓動が——忘れられなかった。

そして、シロナは自分の「弱さ」を嘆かずにはいられなかった。日常生活においてはエイジの言葉ばかりを思い出し、研究にも手が付かない。熱が去り、冷たさだけが残った。

それからというもの、シロナは騎士道の試合をよく見に行くようになった。会場へ赴けばどこからともなくエイジが現れて、人々の耳目を独り占めにするかもしれないと考えていたからだ。

冬が終わっても、シロナはこの癖が治らなかった。

「……もう、割り切るべきね」

一人、観客の疎らな席で眩く。今日も「成果」が無かった。トポトポと試合会場を後にすると、シロナに気付いた受付の女性が声を掛けた。

「あの、シロナさんですか!？」

「……! ええ、そうよ」

「私、ファンなんです! サインもらってもいいですか?」

色紙を差し出すファンの言葉に応じるシロナ。上の空だったためか、ペンを持つ手が止まる。

「シロナさんって、騎士道はよく見るんですか?」

「……そうね、最近、見るようになったわ。意外と奥が深いのね」

「そうなんです! 相手の交代を読んで攻撃するとか、その交代を読んで交代するとか、ネットで見た時は——」

熱心に語るファンと、シロナは思わず意気投合してしまった。彼女としてはそのまま話し続けたかったが、仕事が残る女性を引き止めておくのも申し訳なかった。

「悪いわね、引き止めちゃって」

「い、いえ! 私の話し掛けたんですから、こちらこそ!」

小走りで去った女性は、「あっ」と何かを思い出したように振り返り、「イツシュにも注目の選手が来たみたいですよ——!」と叫んだ。

シロナは帰宅すると、急いでパソコンの前に張り付いた。ネットで検索をかけると、彼はすぐに出てきた。

『エイジの再来か!? しかしヤツは熱い! 期待の新人・デューク仮面!』

シユバルゴをモチーフにした覆面とマント。紛れもなく不審者

——のような格好をした選手が、公式サイトのトップにデカデカと表示されている。

有料の試合映像をすぐさま購入すると、確信を得た。

これは——エイジだ!

シロナは飛び出した。

イツシユ安定編

8

引越しをした後、最初にやらなくてはならないのは何か。

ダンボールの片付け、食事、睡眠、引越し業者への支払い？

真に賢なる者は最初の一步を間違えないのである。当然、隣近所への挨拶だ。

今現在いる場所は、ジムリーダーフウロがいるフキヨセシティの西、山を超えた中腹部の辺りと麓周辺の間。パルキアで家を丸ごと持ってきて、そこで暮らしている。

当たり前だが、ポケモンは集めてキッチンと持ってきている。水棲ポケモンに対しても水場を作って対応している。手間暇掛けて生かした貴重な財産だ、家バレ如きで捨ててなるものか。

それにしても、パルキアとは便利な土木屋である。カット&ペーストを現実で行うなど馬鹿げているにも程が有る。PCゲームではなく現実でそれをやってしまうとなれば、もう業者の存在意義が無くなってしまう。

パルキアなどの伝説のポケモンと謳われる存在が、その能力を保持していることは想定通りとも言えたが、意外であった。ゲーム内存在であるポケモンが能力を持つことは、対戦ばかりをやっていた身からすれば「そんなボタンはない」と主張せずにはいられない。

だが、「パソコン」から出てきた彼らが呼吸をし、食料を口にするのと同じように、生来の性質として能力を持つていると推測できる。だが、物騒なんで普段は「パソコン」の肥やしになっているが。

当初、伝説のポケモンの力を利用することなど、露ほども考えていなかった——「パソコン」から取り出すのも躊躇うレベルで——が、それは偏ひとえに言うことを聞かないと思っただからだ。

なんとも馬鹿な話である。転移したばかりの頃はボールからガブリアスを出してキャツキャウフフと喜ぶくせに、伝説のポケモンだけを警戒するなど愚か極まりない。ガブリアスは伝説には及ばないも

の、人間を簡単にミンチにできるドラゴンポケモンである。

人間というものは自己の矛盾を認識できないのだ。俺は愚者らしく自分の経験から学ぶとしよう。

さりとして時には歴史からも学ぶのだ。ご近所関係の悪化が無用なトラブルの種になることは重々承知である。特に、特別な事情がある我が家にとつては御免である。

立地で言うと、近所と言うには遠すぎる——一番近い家に行くまでに山を越える必要がある——ので、認知されるという意味も込めて挨拶をしなければならぬ。

何処に挨拶をするのか、それは勿論『ポケモンセンター』である。

ポケモンセンターとは、宿泊施設・治療施設・食事処を兼ねる便利な場所である。慈善事業の塊と言っても申し分ないだろう。初心者から玄人まで、世話にならないポケモントレーナーなど全くいない筈だ。

ゲームでは無料で何度でも回復ができたが、あの施設をタダで使うには制限がある。具体的には年齢制限だ。

この世界には十歳から成人となる謎の法律が——見直すべきという声は年々高まっている——存在する。当然、成人ということは色々出来るようになり、税金も大人と同じように納める事になる。

当たり前だが、無理がある。親が支払う場合がほとんどであり、この税金問題はそれほど深刻化していないのだ。そして、ポケモンセンターの利用制限という核心を突くのは税金問題ではない。

問題とすべきは、ポケモントレーナーそのものだ。

近代化してすぐの時代には、ポケモントレーナーの数Ⅱ国力と言っても差し支えはなかったのだ、ある程度の実績は必要だったようだが、ポケモンセンターは施設利用を全面的に無償化していた。

そうはいつても、時代が進むにつれて人間が増えた。ポケモンセンターの負担が増加するのは言うまでもないことで、モラルのない利用者の増加もまた社会的な問題となった。

そこで導入されたのが年齢制限・収入制限の制度だ。

トレーナー資格を持ち、収入と年齢が一定以下の人間だけが無料で

ポケモンセンターを利用でき、それらが上がっていくごとに利用料金がゼロからどんどん上昇していくのだ。

で、ポケモンセンターというものはゲームと同じように、両手の指で数えられる数しかないというわけではない。大量にある。人間が一日で歩ける距離を目安に、道に沿って点在している。

そういう施設には当然トレーナーが集まるわけで、間違っても「あそこには珍しいポケモンがたくさんいるらしい」と噂されるわけにはいかないのだ。大口の寄付をして、間違っても馬鹿なことをしないように、と圧力を掛けるのが一番である。

実際、「エイジの時」も日本円換算で一億ほど寄付したことがある。その時とは目的が違うが、まあ安いもんである。

ちなみに、今の名前はイツシユの元ネタとなった地方らしく『ジョン・スミス』である。つまり、スミス名義で億単位の寄付をすればいいのだ。団体ならともかく、個人としてはそこそこの客である。

お金の問題？ エイジの口座からは既に全額引き出し済みだ。ローンを若干踏み倒す形になったので、少し余裕がある。

犯罪？ 馬鹿め、エイジは死んだわ。此処に居るのは顔とDNAがそっくり（完全に一致）なジョン・スミスさ。

というわけで、フキヨセシティと家周辺のポケモンセンターには片っ端から挨拶をしに行つて、ポケモンセンターの本部に多額の寄付を納めればいいだろう。

問題となるのは顔だ……そっくりさんで済めばいいのだが、それはそれで面倒だ。整形にも限度はあるし、常に気を使わなくてはいけないのはダメだ。

故に、変装をする。この世界、バシャーモ仮面だのマキシマムだのククイ博士だの、覆面の人間が多い印象を受ける。つまり、覆面とウィッグを用いれば、怪しまれる確率はグッと下がるだろう。

勿論、そのための覆面は購入済みだ。プロレス団体が作ったシユバルゴをモチーフとしたもので、赤と銀の模様がとても良い。まるで騎士みたいだあ……。

ウィッグは赤色にした。赤い髪の間はこの世界じゃあ珍しくな

い。恐らく、太古の時代はポケモンと共生するために、ポケモンの体表と近い色をした者は重宝されたのだろう、と推測できる。

これで変装は完璧だ。鏡の前に立って自分の姿を眺めると、この変装の致命的な欠点が発覚した。

……普段着には似合わないのだ。だが、発見と同時に改善策も思い付いた。先人に学ぶことは偉大なのだ。

そう、マントが無い。変装にマントを合わせなければ、本当に変人になってしまう。

現地調達になってしまうが、問題の発見は安定した生活への第一歩だ。幸先の良いスタートといえるだろう。

実際、ポケモンセンターのイツシユ地方本部に赴いた時、警備員に入場口で止められるようなことはなかったし、職務質問にも遭わなかった。フレンドリイショップにさえ入れたのだから、覆面とマントの組み合わせは比較的ポピュラーなのだろう。

ジョーイさんへの挨拶をつつがなく終えると、気分良く街へ繰り出した。

イツシユ地方、フキヨセタウンの中心にあるポケモンセンターで働くジョーイさんは、突然やって来た覆面の不審者に困惑していた。

ジョン・スミスを名乗る男性は、地図と幾つかの注意が書かれた紙を持って、「出来れば立ち入らせないように、注意して下さい」と言った。

ジョーイさんからしてみれば、本部からなるべく邪険にしないよう、「丁寧」な対応をして欲しいと言われていたのだが……。

(三千メートル超えの山を越えて、そこまで行く人はいないと思います)

「何言っただこいつ」状態である。電気石の洞穴のように行き来ができる道があるわけでもない、ポケモンセンターも開発の進んでいない山脈の向こう側まで進出はしていない、そんな未開の地に誰が行くものか。

富士山を越えて泥棒をしに行くか？　と言った具合である。

そもそも、フキヨセ自体が荒れ果てた土地を切り開いた場所であり、街までの移動は徒歩ならばネジ山を越えるか洞穴を通るかのどちらかである。要は地方都市、田舎だ。

田舎に来て山に登ろうという物好きはいるが、向こう側に行こうという馬鹿はいない。というか、向こう側への道は緑に整備されていない。

おかしい人が来たなあ、と感想を抱きつつも、ジョーイさんは平常通り業務をこなす。

同様に、フキヨセの人間も変人がいるとは思っていたが、一ヶ月も経つと皆慣れていった。狭い街なのでそれなりに見かける機会も多く、話してみると真人間なので好印象を抱かれていた。変人だが。

ジョン・スミスを名乗る変人は滑走路やその周辺に現れることが多く、フキヨセカーゴサービスをよく利用すると噂されていた。

パイロット達も見掛けに反してまともであると友好的だったが、その筆頭であるフウロは苦手意識を持っていた。

その原因はジム戦にある。

ジョン・スミスは元々、カーゴサービスを利用したいという客の一人であった。その頭のおかし——類稀な立地から、空輸便を利用しなければいけないらしい。

食料を大量に、それこそドン引きするレベルで購入した彼は、定期的に「こういう事」をしたいと申し出たため、フキヨセのパイロットの代表格であるフウロが話をする運びとなった。ベテランもジムリーダーには頭が上がらないようだ。

「こんなに沢山のポケモンフーズを月に二回……ですか？」

「そうですね！　ウチの農場には沢山のポケモンがいますからね」

ジョンは両手を大きく広げて、農場の大きさを身体で表現する。劇のような大げさな仕草に、フウロはクスリと笑った。

「へえ、何を育てているんです？」

「ヤチエのみですよ」

「ヤチエ？　……えーっと、あれですね！　あれ！　甘いやつ！」

「酸っぱいヤツですね」

「あははー……知らないかも」

ヤチエのみは知名度が低い。その酸っぱさと渋さから加工原料としてはよく利用されるが、そのまま食すということはあまり好まれない。冷やすことで一層美味しくなるが、オレンのみやオボンのみの方が多くのシエアを占める。

多種多様な果実が繰り広げる顧客の奪い合いは盛衰激しく、淘汰と繁栄をもたらした。七十種弱ある果実の内、一般人が知るのは精々十程度だろう。

フウロがヤチエのみを知らないのも無理はない。飛行タイプのジムライダーとして、それが適切であるかどうかは別であるが。

だが、一般的なトレーナーの知識としてこのような「半減実」の知識は、テストに出る問題の様なものだ。

何故なら、流動的なバトルにおいては弱点の攻撃を回避することや打ち消す事が可能であるため、わざわざ木の実を持たせてまで対策をしようというのは非効率である。

タイプ相性を覆せるのがポケモンバトルだ。半減実で対策を行うより、行動でなんとかしようというトレーナーの方が多い。それに加え、半減実を使用しても相手を倒すことに繋がるとは言えないため、果実が利用されることは滅多にない。

エイジがシロナとの戦いでヤチエのみを用いた時は、多くのトレーナーが頭に疑問符を浮かべたことだろう。

「これがヤチエのみ……」

青色のふつくらとした果実。表面は固く、リンゴほどの大きさがあある。フウロはそれを両手で持つと、齧り付いた。アボカドみたくクリーミーな果肉には酸味があり、渋みとともにフウロの表情を歪めた。

「うーん……あんまり美味しくないかも」

「でしような、若い人の舌には合わんでしよう。ジャムにすると丁度いい具合になりますよ」

「これは売るんですか？」

「そのうち、売るかもしれませぬ」

ジョンに対するフウロの第一印象は悪くなかった。物腰は丁寧で、何より見た目よりもまともだったからだ。そして、彼がヤチエのみを沢山栽培すれば、飛行タイプが苦手とする氷タイプに対する一種の回答として使えるかもしれない。そうすれば電気タイプ対策へより一層注力出来るのだ。

早速、フウロはジョンの農場に行くことになった。

飛行機に荷物を積んで飛び上がると、先行していたジョンのボーマンドを追い抜かして山脈を越えていく。険しい山々の稜線を下れば、もうジョンの家だ。フウロは平野部に滑走路を見つけると、難なく着陸した。

「んー！ きもちー！」

山の斜面は岩肌でゴツゴツとしている……のではなく、滑らかでよく整った地面だ。滑走路からは斜面に茂るヤチエのみ畑がよく見えた。

ジョンが来るまで、フウロはその広大な敷地を眺めていた。

(畑で動いているのはポケモンかな？ 空を舞うのは鳥ポケモン？
ここにはどんなポケモンがいるんだろう)

メリープが居ればまるでアルペンの少女ハイジんだと、国民的アニメを連想させるような牧歌的光景だ。

ジョンが滑走路に着くと、フウロは荷の入ったスペースを開放した。

「ジョンさん！ どうやって運ぶんです？」

「ポケモンに運んでもらいますよ。頼みましたぞ、ヤドラン！」

「ヤード」

ボケーとした音がよく似合うポケモンが出てくると、サイコキネシスでポケモンフーズの詰まったコンテナを持ち上げた。

「ヤー」

ヤドランはそのそと進み、十メートル程移動するとコンテナを降りろした。キリツとした表情を見せると、勝手にボールの中へ戻って

いった。

「……」

「……」

「お願いしますぞ、ヤサイドン！」

(野菜丼?)

ドサイドンがコンテナを持ち上げて、何処かへと運んでいく。

「ジョンさんはポケモントレーナーなんですか?」

「へ? ああ、一緒に暮らしているだけですよ」

「そんな! 勿体無い……強そうなポケモンなのに、バッジを集めないなんて」

「ははは、そんなことを言われたのははじめてですよー」

「気が向いたら、是非挑戦してくださいね」

話はここで終わった。ポケモンバトルの初心者だというジョンがフウロに挑戦するのは、冬が終わる時期だった。ヤチエのみ農場は軌道に乗り始め、フキヨセの住民はヤチエのみを目撃する機会が多くなっていた。

ジョンがジムバッジを集めているとは、フキヨセの住民は知っていた。作業の合間を縫ってそらをとぶで町々へ足を運び、バッジを獲得しているようだ。

五つ目のジムバッジを取った翌日、フウロの目の前にジョンは現れた。

「待ってたよ! 現れるのを!」

『ジョン・スミス氏、ポケモン保護団体に多額の寄付』

俺はエネココアを飲みながら、その新聞を見てニヤリと笑わずにはいられなかった。仮面を付けた男と人の良さそうな老人が、チヨロネコを抱いて握手をしている写真がデカデカと表示されている。

収入の安定化はきのみ農家にとって永遠の課題だろう。気候変動・病害虫・生理病・虫ポケモンなど、多くの害から果実を守らなくてはならない。

更に、同じ作物を育てる農家全体の生産量から、価格が変動する事もある。全体が豊作なら木の実を潰さないと破産してしまう可能性が出てくるし、凶作ならば価格が上がって売れなくなるかもしれない。

季節によって売れ行きが左右されることもあるし、需要と供給には常に気を払わなければならない。収入が安定することは農家としては悲願ともいえるだろう。

俺は農家の厳しい洗礼を覚悟していたが故に、強引な方法を用いて売れ行きの安定化を図ろうとした。実に単純な解決方法だ。売れないなら付加価値を付ければいいのだ。

行ったことは実に簡単、お金の力を借りたのだ。

プラズマ団とかいうポケモンの保護をする団体に多額の資金を提供し、ロットというおじさんにフキヨセ新聞社の記者を紹介してもらったのだ。

田舎の地方紙なのでそういった権力には弱いらしく、見事冒頭の記事に繋がったのだ。

意外なことに俺の名前はフキヨセの住人によく知れ渡っているらしく、頻繁に年配の方に挨拶されるようになった。話をすれば、ヤチエのみはジワジワと高齢者に人気が出始めているらしい。

茶髪の若者には甘いきのみを出してくれと言われるが、そんなものは気候的に栽培できないのだ。あきらメロン。

そんな「ジョン・スミスのヤチエのみ農場」の生産性は悪い。水やりや箱詰め作業、害虫の物理的な防除などの作業をポケモンに任せているため人件費はかからないが、本物の農場と比べて集約的でないため一本あたりの果実数は少なくなる。

100m掛ける100m——1ha^{ヘクタール}を基本とした農場で、ヤチエの木は縦横約1m弱の低木に成長するため、間隔を考えても理論上は約2,600本程度のヤチエの木が植えられる。

実際はその七割程度の1,800本しか植えていないのだが。

ヤチエの木には果実が大体二〜十個結実し、平均で見ればジョンの農場には大体4^{よんてんさん}・3個収穫できる。1haであれば7,740個だ。これが『月二回』収穫できる。

実際の収穫時期はバラバラだが、それでも一日に平均約500個は出荷できる。値段は五個入りで350円、全て売れば一日当たり35,000円の収益になる。月給に換算すれば105万円だが、そう上手くもいかないのが商売だ。

安定した生産に一ヶ月掛けたため、実際にはまだ一ヶ月しか販売を行っていないが、五割も売れ残った。この時点で月給52万円だ。

その内の四割が店舗の収入と税金に持っていかれるため、31万残る。山を越える際の空輸費用とトラックの代金で大体70万吹き飛ぶ。

ついでに輸送用の箱を購入して利益は—59万円。

単純に考えても計111万円の大赤字である。流石の俺もこの出費は痛すぎる、普段の出費も考慮すれば7,8年で資金が底を尽きるだろう。

例えば、栽培面積を3haにしたとしよう。値段を五個で250円にしても、7,500個しか売れなかったものが精々8,000個になる程度なので、月給は40万。損失で見れば考えるのも馬鹿らしくなる値段になる。赤字はほぼ決定事項だ。

考えるべきは戦略。面積を1haに保ったまま、売れ残る7,740個を如何にして売ることが問題になってくる。

という所で出た慈善活動家アピールだ。しかし、ネームバリューを味方につけても売れ残るものは売れ残るのだ。このまま待てば滅びは間違いない——が、指を咥えて黙っていられる程愚かではない。

手を伸ばすべきはポケモンフーズ界限。

ポケモンによつて好みの味が変わるのは世間の知るところだが、ヤチエのみは渋さと酸っぱさの二つにおいて定評がある。ポケモンは甘い、辛い、渋い、酸っぱい、苦いの五つの味の好みが特に分かれるため、性格を考慮すると約2.5割弱のシェアを占める事が出来る。

加えて無農薬栽培、ポケモンが育てた果実などの要素を付け加える事により、一部の顧客からの支持も集められる。

以上の要素を以つて企業に突撃した所、地元と北の方のフレンドリイシヨップや、高級ポケモンフーズを生産する会社と契約を結ぶことができた。フキヨセと周辺のスーパーだけに出荷などとアホな行為をするから赤字になるのだ。

兎も角、ギリギリ赤字を脱却できたため、ヤチエのみ農場は軌道に乗つたと言つてもいいだろう。なお、営業途中でジムバッジを幾つか集めておいた。これも営業戦略の一つなので、欠かすことはできない。

フウロもバンギラスでサクツと終わらせた。ちやーんと舐めプしておいたので、以前みたく不評が出ることはないだろう。

勿論、バッジを集めているのには訳がある。バッジを八つ持っているというのは一種のステータスだ。一個とて集められない人間は大勢存在するし、バッジを持って尚ポケモンバトルが苦手であるというトレーナーもいる。

バッジを八つ保持するというのは、言つてしまえば漢検一級だの英検一級だのを持っているのと同じ感覚だ。ナマモノポケモンを扱う分幾らか難くなるが。

エイジの時と違い、それなりに全国行脚（飛行）をする暇と資金があるので、集めておこうと思つたのだ。そのついでに、騎士道の選手としてデビューしようと思う。

実に単純なロジックだ。ある程度選手として売ればヤチエのみ

の宣伝にもなり、ギャラも含めて資金の足しに出来る。何故かこの地方にも騎士道が流行りつつあるので、ブームに乗っかって小金を稼ごうとするのは妥当だろう。

目立つほど勝たなければいいのだ。五十連勝辺りで負ければ大して騒がれもしないだろう。エイジの時もニュースで一分程度紹介されただけだ。精々一時期の噂になるようなものだ。

ラグビーの選手もテニスの選手も、CMには出ていたりしたがそこまで目立つてはいない。一発屋になりさえすれば、副業に多少の恩恵が出てくるというもの。

人生のチャートにチャーンと組み込んでおこう。

ちなみに、果物はきのみのせいで駆逐されている。

きのみはその特殊な生産性によって果実の収量を遥かに上回るため、味によって差別化されなければ価格競争で敗北してしまう。きのみは一個あたり百円以下が基本、三倍以上の値段がする果物では到底勝てない。

熱帯性の作物ならば十分な需要があるため、きのみとは十分に争える。きのみの異常性はその成長能力にあると言える。月に二回結実という昆虫もびっくりな一世代の早さだ。重要な点は特別な何かをすることもなく、植物工場並みの生産性を得られるということだ。

果実は促成栽培をすることが出来るが、ホウレンソウの様に養液栽培をすることは難しい。それは果樹であり結実するまでに時間がかかるからだ。

ついでに、これだけの生産性を保ちながら土地が貧する事もないのだ。恐らく、「氷を半減する」という様な「とくしゅ」な力が働いているからだろう。

現実的ではないとも思ったが、そもそもここはポケモンという物理法則もびっくりな生き物が存在しているのだ。今更だろう。

山頂の雪が溶ける頃には、晴れて騎士道の選手としてデビューすることになった。

正直、忙しさを過労死しそうだ。朝五時に起きて農作業、昼前には

移動して騎士道の試合。

今の季節、新人にはデビュー戦があるので、ここで好成績を収めなくては今後の商売にも差し障るというもの。疲れるが割とマジで戦わなければ。

ライモンシテイまで飛んで会場にたどり着くと、選手用通路を通じて控室に入る。対戦カードは事前に知らされており、今日はハイイチという選手と戦うらしい。

パーティーは試合の時間にお互いが見せ合う形となっているので、直接メタるということはできない。試合までは秘密である。まあ、新人の木っ端共しかいないので軽々蹴散らしてやろう。

この世界では種族値が明確になっていない。そういった意味でも、こいつらは雑魚なのだ。数値受けが成立するポケモンが少なすぎる。……種族値が明確になっていないのはある意味当然ともいえる。

BやDが測れないのはどの位喰らわれないかを実験していないからであるし、Sも個体差が多く、計測基準がバラバラである。AとCは最早訳が分からない。技で測るのか、握力で測るのか、腕力か、何が基準なのか不明だ。

しかしダメージがゲーム基準で通るのは証明済みだ、そういうものなのだろう。さりとて、ダメージがゲーム基準になるには条件がある。即ち、無防備であることだ。

フウロと戦った際、レベル百のバンギラスのストーンエッジでスワナが落ちなかったことがあった。体勢的に、所謂「浅かった」攻撃であったせいも、確定一発にならなかったのだ。

騎士道ではそういった主體的な回避と防御は反則に当たるため、安心してダメージをぶち込める。

試合の始まる時間だ。係員に呼ばれて連れて行かれると、バトルフィールドに着いた。相手も反対側についたので、互いに礼をしてポケモンをフィールドに出す。

こちらのパーティーはメガヤンギ、メガヤシギバナ、ヤザン、ヤヤ

ラ、ヤユバルゴ、ヤードランのヤーティーですな。

まず最初に互いのポケモンを見せ合って、時間をとって三体を選出し、それから試合が始まるのですぞ。

こちらには取り敢えずのヤーティーですが、レートに潜ることができないので客観的な視点を持つことができませんな。穴があれば穴があつたで、別に構わないのですぞ。完全なヤーティー、もといパーティーなどないのですから、そこはプレイングでカバーですぞ。

ボシヤーモは勘弁ですがな。

第一戦目、相手のパーティーはボオー、ボーマルド、ボシギバナ、ボアームド、ボガニウム、ボライゴンですぞ。

炎の通りがヤバコイルのなのでヤードラン、ボオーとフラインゴが重いのと害悪草ポケモンがいるのでメガバナを選びますぞ。地面の一貫を切りたいのでヤアラかヤザン、ここはヤアラでいきますぞ。

ヤアラヤシギヤードランの並びにしますぞ。

横にいる副審に最初のポケモンと残りの二体を告げると、相手が選び終わるのを待ちますぞ。笑顔で待つ以外有り得ない。

……やけに時間がかかりましたが、無事に終わりましたぞ。ポケモンを戻してボールを隣の副審に渡し、その審判が中央にいる主審に内訳を知らせますぞ。ルールですな、こういうのが一番面倒くさいですぞ。

「どうぞ、貴方のポケモンです。最初のポケモンは報告通りギャラドスを出して下さい」

「分かりましたな」

副審から選んだポケモンのボールを渡され、お互いの手元に三つのモンスターボールが残ると、司会があれこれと実況して紹介を始めますな。

『マスクをかぶった変な奴！ 相棒はシユバルゴだ！ デューク仮面！』

名前を呼ばれたので、観客に向かって手を振りますぞ。エイジの時によくやった事ですな。ファンアピールは紳士の努めですぞ

『ライモン育ちの都会っ子！ 相棒はメガニウム！ ハイイチだ！』

世間を知らない新人には、厳しい現実を叩き込んでやりますな。春は鴨狩のいい季節、精々引き立て役になつてもらいますぞ。弱肉強食の世界故仕方ないですぞ。

主審が旗を上げると、我とお相手氏は同時にポケモンを繰り出しますぞ。なるべく同時に出さないとルール違反になるので注意ですな。

「頼みましたぞ、ヤヤラドス！」

「相棒、コテンパンにしてやれ！」

出てきたのはボガニウム。メガシンカはできましたかな……？

兎も角、役割対象ではないのでフシギバナに引きますぞ。

「審判、ヤシギ……フシギバナに交代しますぞ」

「分かりました。相手が行動を決定するまで待つて下さい」

三分ほど待つて、お相手氏が何をするかを決定しましたな。やれることは降参、攻撃、交代のどれかですぞ。一度決定すると変えられないので注意が必要ですな。

「先攻、デューク仮面！」

「交代ですな。行きますぞ、ヤシギバナ！」

「バナ」

『おおっと、交代だ！ これは少々弱気のスタート！』

騎士道に実況をつけるのは失敗ですな。強気弱気の世界ではありませんぞ。

これは衰退待ったなしのクソ競技ですな……適当に稼いで撤退するのがいいと思いますぞ。騎士道を細々と続けて、金持ちの嫁を見て、悠悠々自適な生活を送る以外有り得ない。

全く、安定した地位と金は最高ですな！

「後攻、ハイイチー」

「メガニウム、はっぱカッター！」

ボ、ボガニウムとは片腹大激痛ですな。はっぱカッターは有り得ない。乱数六か八はありそうなクソ火力ですな。ポケモンにしかかなれないポテンシャルの無さ、リアル○であるが故の技の火力の違いは深刻ですぞ。

せめてエナボカリフストですな。これだから初心者狩りは止めら

れないですぞ。そもそも、ヤアラにつっぱするのならめぎ電でもあるのかと思いましたが。めぎパ厳選は現実ではほぼ不可能だと思いませんがな！

で、お相手氏は引くしかないと思うので、エアームドに一番入るめぎ炎ですかな。しかし、ムドーに引かれてもヤードランに引けばいいですので、ここはメガしてヘド爆でいいですな。交代先がバナなら最大打点ですな。

「フシギバナ、メガシンカですぞ」

「メガニウム、リフレクターだ！」

「ヘドロ爆弾ですな」

「地震！」

「……？ ヘドロ爆弾ですぞ」

「行け、フライゴン！」

「ヤラドスに交代ですぞ」

「大文字！ ドラゴンクロード！」

「氷の牙ですな」

「行け、ヌオー！」

「ヤシギバナに交代ですぞ」

「水の波動！」

「リーフストームですな」

というわけで、勝ちました。全体的によくわからない試合でしたぞ。

技も行動も全てが不明、これがあと数試合続くと考えるのは苦痛ですな。初心者狩りは収入的に楽しいのですが、死ぬほど面倒くさいですぞ。

喝采を浴びるほど惨めな気分になりますが、デューク仮面のキャラは明るく、と決めているのですぞ。んんん、とは笑えないのでガハハと笑って「いい試合でしたぞ」と言っておきますな。

早く通帳の桁が増えれば、このようなことはあまりせずに済むのですがな。

「時間に都合が付けば、見に来て下さい。私のデビュー戦です」

フウロはジョンの差し出すチケットを受け取って、「勿論です！」などとは口が滑っても言えなかった。

大空のぶっ飛びガールとはよく言ったものだが、ジョンに対しては仄暗い嫉妬の念やライバル意識を抱かずにはいられなかった。先のジム戦では、岩タイプのバンギラスに苦戦させることもできず、一方的にやられてしまった。

これに対してもフウロは煮え切らない思いを抱いていた。フウロの勝手な思い込みと言えばそうだが、ヤチエのみを推すトレーナーが岩タイプを使うとは考えが及ばなかった。それに加え、相手はつい二ヶ月前までは初心者自称する存在だったのだ。

（強いから悪い、そんなことはないんだけど、なんだか騙された感じがしてなあ……）

人当たりがいい分、余計に頭を悩ませる。

「あーもう！ 悩んでいるのも私らしくないかな、取り敢えず観に行こう！ そうしよう」

そらをとぶでライモンシティに向かったフウロは、会場の熱気に「おおっ」と感嘆の声を漏らした。

席についてパンフレットを開いてみれば、ジョンの名前は一文字とて書いていなかった。

「エンドウ、ハマダ、マツモト、ハウセイ、アウト……ジョンさんがいないなあ」

パンフレットを隅から隅まで探しても、ジョンはおろかジの文字さえ見つからない。デビュー戦と書かれた冊子には選手の顔写真と名前が――

「いるじゃん！ この変な覆面！」

シュバルゴをモチーフにしたおかしな顔の男が載っている。むしろ何故見落としたのか、その訳は名前の欄にあった。

「デビューク仮面？ 仮面って、しかもこの名前……つぶ。なんだかプロレスみたい」

試合が始まれば、これは中々面白いと、フウロは次第に熱中していった。

「今は有利でも、次に出てくるかもしれないポケモンにはあんまり有利じゃない……交代するか、それを読むか、なんだか迫力のある将棋みたい」

掴まんでいたポップコーンが無くなる頃には、ジョンの試合が始まろうとしていた。

見慣れた仮面の男が入場すると、まるで大御所のように自信たっぷりの様子でズンズンと歩いている。

相手のハイイチ選手も手を振りながら入場してくる。パンフレットによると、カントー・ジョウト・ホウエンのポケモンリーグでベスト八になった優秀なトレーナーであるらしい。

ジョン、もといデューク仮面の紹介文には『ヤチエのみの大農家、氷タイプには滅法強い!? 大自然のパワーとくと見よ! ※ポケモンの持ち物は被らせてはいけません』と、マヌケな文章が記載されていた。

(これじゃあ当て馬みたいじゃん!)

「ジョ、デューク仮面頑張つてー! あんなヤツこてんぱんにしちゃいなさい! ファイト、オー!」

熱気に当てられた、というやつである。ジムリーダーとは言うが実態は肉体労働者で、歳のに言えば大学生である。ノリは良い方だ。

すっかり熱中してしまったフウロは野次を飛ばしながら、デューク仮面の試合を見守る。

試合は——滞りなく進んだ。トントントン拍子でハイイチのポケモンを打ち倒していくのだ、その光景はかつてのエイジを思わせる戦いぶりであった。

強力な攻撃、物怖じしない度胸、相手の攻撃を寄せ付けない防御力、その鮮やかな勝利には王者の風格さえあった。

「おお……初めて見たかも、メガシンカ」

メガシンカ。それはジムリーダー及びポケモントレーナーとして憧れの境地であると言つてもいいだろう。

ポケモンの更なる力を引き出す、進化を越えたシンカ。フウロの手持ちにメガシンカが出来るポケモンはいないと知ったが、彼女は彼女なりにメガシンカをさせてあげたいと思っていた。

だが、メガストーンとキーストーンは現在、カロスやハウエンなど一部の地方で少量出回っているだけである。買おうと思えば何億円掛かることか想像もできない。下手なダイヤモンドよりも高価なのだ、一等地に豪邸を建てる方がまだ安く済むだろう。

「スワンナイトとか、ケンホロウナイトは無いのかなあ」

無い。が、そんなことを知る由もなく、ジョンに聞いてみようと思うのであった。

控室に突撃してきたフウロを飲みこみ誘った。何を言っているのか分からないと思うが、俺も状況が分からなかった。

以前ライモンシテイを訪れた際、目星をつけておいた店でビールとヴルストをしたたま食べてから解散した。ヴルストとわざわざ言うのは格好いいからである。

カミツレの所に行くと言うフウロを解き放って、一人夜の街を歩く。娯楽の多い街ということもあって、街中が輝いている。

電気タイプのポケモンが発電した電力を使っているらしいが、彼らに給料は出ているのかいないのか。

多分出ていないだろうな。ポケモンは「賢い」が、あくまでもそれは野生で生きる上での話。人間の通貨というモノを完全に理解することはできない。実際、正当な賃金を与えないことを問題にする団体も存在する。……プラズマ団とかプラズマ団である。

確かにポケモンは労働力として成立し、その対価として与えられるのは給料ではなく子供のお小遣い、それも現物支給。子供会でゴミ拾いをやった後に貰える駄菓子や詰め合わせを、引越しをやって後のゴリキーに配ると言えば分かりやすいだろう。

かく言う俺も、家の農場で働いているポケモンにはきのみジュースや好みのきのみを追加で与えている。一匹あたり約百円の追加出費、言い換えれば日給百円だが。

低賃金重労働、典型的なブラックである……が、人間は歴史的にこういった動物を利用してきた背景がある。

農耕用に牛を利用し、運搬に馬を、闘鶏等の賭け事には鶏や犬、狩猟食用等実に様々な接し方がある。ポケモンの低賃金問題は単に「ポケモンって結構頭いいよね？」などという「クジラ頭良い論」の如く感情的で現実を見ていない層が声を大にして言っているだけである。

倫理的に許容できない程少ない報酬がある事には同意するが、ポケモンに対してはある程度の水準を満たしていれば良いのだ。所詮は精密作業のできない、限度のある労働力だ。人間の様な知識を必要と

する労働ができない分、身体を利用して働くのは当然だろう。

百kgの重りを苦勞して持ち上げる人間と、大した苦もなく持ち上げるポケモンの違いは大きい。

ということとは、安い牛丼チェーンや某河童のお寿司のように、ポケモンの命でこの街は光っているのか。いや、流石に電気ポケモンの待遇は良いだろうが。

ライモンシティの裏事情を考えていた所で、見覚えのある服装をした団体が目の前を通る。グレイ人の皮膚の色をした指定ぼうりよ……秘密結社・プラズマ団の団員だ。

ゲーム内で彼らが行ってきた活動は知っているが、具体的にどうなのかは知らない。こちらは出資者だし、攻撃はされんでしょ。

というわけで、跡をつけることにした。

アウトローな人種には正直関わりたくないが、こつちには法律に守られた正当な暴力装置がある。具体的に言えばポケモンである。

ポケモンは味方につければ頼もしいが、敵に回した途端末恐ろしい存在になる。分かりやすく言えば、火を吐く犬や毒を撒き散らす猫ほどの大きさの虫が、人間の言うことをハッキリと理解した上で攻撃を仕掛けてくるのだ。

通常、人間は犬に勝つことは不可能である。それはこの世界でも同じよう、人間がある程度超常的な身体能力を持っていたとしても、殺し合いになれば勝ち目は無い。だからプラズマ団の連中の様に悪の組織の団員はポケモンを携帯しているのだ。

で、下つ端のポケモンなど高が知れている。数を揃えても一撃でお陀仏であるが故に、ちよつとの火遊びは身の安全が保証されているのだ。

銃で撃たれる心配は無いかと言えば、無い。

この世界での銃規制はキツく、正直日本よりもヤバイ。どれくらいかと言えば、取引をすれば暴力団だろうがなんだろうが取り潰されるくらいだ。

銃が発明された時代、人間の領域を増やすためにはポケモンをどうにかする必要があった。

それまでの手段は、ポケモンと共に森を少しづつ切り開くことであったが、銃で排除をすればいいという風潮が流れた時期があったらしい。実際に行われたこともあり、それはかなりの成果を上げたらしい。「らしい」というのは、資料が十分に確保されていないからだ。何故資料が十分に無いのか、それは火災によつて消失したからだ。火災の原因は勿論ポケモンである。森を切り開くということは、その住居を侵すということ。その勢いが加速すれば、当然「ぬし」が出て来る。

「ぬし」は言わば生存競争を勝ち抜いた強い個体であり、その地位はカースト下位のポケモンがいてこそ成立するもの。そして森が侵されるということは、得られる食料が少なくなり生存競争が活発化・過激化することを示しており、地位を守るためにはそれに対して反撃するのが当然だ。

野生のポケモンが「賢い」というのはこれが原因であり、程々にしなければ痛いしつpegがえしが待っているということである。

それが顕著に現れているのが森だ。森はゲームのように歩いて簡単に踏破できるというわけではない。順路が決まっており、野生のポケモンの領分を出来るだけ侵さないように配慮されているのだ。

「やろうと思えば出来る」が、それは森を切り開く理由にはならない。町や村が一つ消えるというリスクを抱えてまでやる必要はないのだ。

であれば、その原因となりうる銃は規制するのが当然である。このポケモン世界は特に善性が人柄に現れるため、ポケモンを傷つける手段と成り得るモノはなるべく制限をかける方が、政治家にとつても票を集めやすいのだろう。

特に、目立とうとしていないプラズマ団がソレを持つのは、ゲーチス的にもリスクが高い筈だ。というわけで安全である。いざとなればバンギラスやシュバルゴを盾にすればいいのだ、硬そうだし銃とか効かんでしょ。

そんなこんなで下っ端の跡をつけると、雑居ビルの中に入っていた。案内板にはキッチンと「2〜4Fポケモン保護団体プラズマ団」な

どと書いてある。人通りは少なく、隠れ蓑としてはいい場所だ。

事務所に突撃する度胸はないので、踵を返して立ち去ろうとすると目が合った。灰色のパーカーを着た、痩せこけたガキだ。

「……ウイッス、お疲れッス」

え？ なーに言っただコイツは。

「お、おう。お疲れ」

挨拶を返すと、子供は中に入ってエレベーターに乗る。到着したのは三階で、それ以上エレベーターは動かなかった。

「カツアゲされるかと思った……」

くわばらくわばら、ああいう類の人間には関わらないに限る。もうこんな所に来るのは止めよう。失うものが奴らと俺では違いすぎるのだ。そもそも、心が小市民な癖に危険を冒すからいけないのだ。

二週間後、麗らかな陽気に包まれる季節が本格的にやってきた。時折寒くなる日があるものの、過ごしやすくなったと言えるだろう。

春辺りにはプラズマ団が腰を入れて活動を始める……んだっけ？

正直覚えていないが、イツシュに来た当初、調べる過程でプラズマ団のHPを発見したことは驚きだった。そこには演説予定地や活動内容が載っており、フキヨセでも近く講演があるらしい。

まあ、演説を始めるとなれば活動が本格化するのだろう。

騎士道の方はデビュー戦を含めると十二連勝している。エンブオーが地味に厳しいが、勝ち進んでいる。イツシュの騎士道では三十四連勝が最高記録なので、記録を更新して小金を稼ぐとしよう。ちなみに、シンオウの最高記録はエイジの百二十九連勝である。

いや、どうせなら百連勝を越えるのもアリだ。農場も土地利用を考えた時の手段なので、別に拘っているわけではない。あと重労働だし、意外と生産性が悪い。

「パソコン」秘匿を考えるのなら、大金を稼いで後は隠居が一番効率的だろう。それに気付いたのは十連勝後に雑誌のインタビューを受けている最中のことだった。

忙しさが俺から冷静な判断を奪っていたようだ。

そして重要な要素——主観的要素の介在しない統計データを、ある分野においてチェックしていなかったのだ。もしも俺が勝ち続けるというのであれば、必ず見なければならぬものだ。

騎士道の競技人口、それと客層だ。

正直な話、沈みかけの船だという認識であったが、これがどうして中々人気に成りつつあるのだ。客層は二、三十代女性や五十代男性が多い。

イツシユではどうも「アイドル化」が進んでいるようだ。運営が特定のイケメンや美人を推しているようだ。解説にも力を入れていくらしく、分かりやすい説明で新規の客を取り込もうとしているようだ。

選手の方はどの年齢にもどの性別にも満遍なく居るが、十代後半から二十代にかけて新規の選手が増加しているようだ。この現象に関してはネット上に考察が載せてあった。

意見としては的を射ていると感じたが、それが真実ではないと思う。要は「エイジが消えたため、アメリカンドリームならぬ騎士道ドリームを夢見て、ポケモンリーグで大成する事叶わなかった若者が流入している」だそうだ。

なるほど、残念だったな。

だが、イツシユの騎士道協会はどうも頭が柔らかい連中のようで、技マシンの使用を推奨しているのだ。最近不一致地震をよくもまあ見かけるといえば、そういう事情があったらしい。

絶対癒着がある。

そんな事情は割とどうでもいいのだが、技マシンと言うものは世間のトレーナーにはあまり普及していない。良くも悪くも多種多様な種類の技マシンを販売しているのだが、これには一つ難点がある。

技マシンは所謂CDの形をしているが、これはビデオ授業と同じなのである。ポケモンが「覚えさせたい技」を放っているシーンを一時間程延々と繰り返す、人間にとってはある種拷問のような映像だ。

このビデオに一体何の問題があるのかと言えば、ポケモンが映像を見ながら技を練習しようとするのだ。

つまり、画面にダイレクトアタック。

パソコンがぶっ壊れたと非難轟々であつたらしい。今はスマホがあるため、そのような事件は偶にしか起こらないらしい。

まあ、そういうこともあつて今まで通り楽勝ルートでいけるとは限らなくなつたのだ。

で、そうなるやーティーでは継続的な勝利を得られるかどうか怪しくなってくる。だが、やーティーは耐久という不意をつかれた際の一種の保険を持ち得るし、意外と上を取れる。

それに、ガルガブゲンを使う訳にはいかないだろう。出処不明のガルーラナイトをエイジの後釜（に収まる予定）が持っているのは不自然だろう。ガルーラから子供を取り出そうとしてボコボコにされたというニュースもあるようだし、トラブルも予想できる。

また、シユバルゴは選んだ覆面的に外せなくなつてしまふ——覆面を変えれば良いのだが——し、準伝説はそもそもメディアから捕獲の経緯を聞かれた際に答えられるかどうか分からない。

ヒードランも役所に書類を出さなければいけないし、ヤツはギリギリの妥協ラインであつた。ランドロスなんかはトルネとボルトが現れた際に出てくるらしく、それを単体で持っているとなるとどう言い訳したものか。

いつその事やーティーを一新するのもアリだろう。エンブオー相手に焦つた時は、人生崩壊の足跡が真面目に聞こえてきたのだ。新しい覆面をネット通販で買って、ついでに色々やろう。

その為の電子機器、あとその為の「パソコン」。
隠居のための前準備の前準備、用意するものは映像の取れるカメラと発電機、サンダーである。

要は、捕獲を八百長すれば良いのだ。

筋書きとしては、ニョロトノやペリッパーで事前に家周辺を雨状態にしておく。これはサンダーが雷雲とともに現れるなどという民間伝承があるからだ。演出としてもGoodだ。

次に、サンダーが発電機を壊す。これは俺の家の電気が発電機とポケモンに依存しているからだ。そして異常に気付いた俺はカメラを

持って外へ行き、サンダーを発見。無事捕獲するという流れだ。

自作自演？

何、サンダーは一匹ではないらしいし、そろそろ捕まったっておかしくないだろう。Poketubeに動画をアップロードして、儲かった分はポケモン保護団体に寄付すればジョン・スミスの株も上昇するというもの。

話題性抜群、ポケモンハンターも出処の知れたポケモンは狙わない筈だ。サンダーを組み込んだヤーティーを、利益を伴って作成することが出来る。

金！ 名声！ 利益！ 騎士として恥ずかしくないのか!?

恥ずかしくないのである。これでも慈善活動家なんですよ。文句を言われぬ程度に還元してるので、利益を貪ってもいいじゃない。ついでに伝記でも書いてやろうか、いや、これを機にブログでも始めよう。それなりの収入源になる筈だ。

ついでに主人公——居るかは知らない——がフラグを立て、トルネロスとボルトロスがイツシュ地方で確認されたら、ランドロスを捕獲した体にして使おう。

だが、フラグの立て方は何だ……？ そもそも主人公ってどっちだ？

まあどうでもいい。勝手にしやがれ。

『ジョン・スミス氏、サンダーを捕獲！「人生の運を使い果たした」』

朝、祖父の読んでいる新聞の見出しを目にして、フウロはジャムを山ほど塗った食パンを落とした。

ベチャ。

「ああああ——ッ！」

「やかましいぞッ、フウロ！ 絨毯にジャムが付いたぞい！」

肩を落としたフウロが悪戦苦闘しながらジャムを掃除すると、祖父の新聞を横から覗き込んだ。

「Poketubeに動画？」

「テレビで散々見たぞい、朝からこの映像ばかりで飽きたわい」

フウロは急いでパソコンを起動し、Pocketubeにアクセスする。朝の八時だと言うのに、目当ての動画のアクセス数は三十万回を越えていた。

動画を再生すると、手ブレの酷い画面から始まる。手元が落ち着くとそこは外で、土砂降りの雨が降る真つ暗な夜だ。

懐中電灯の明かりだけが足元を照らし、腹の底に届く雷の音が鳴り響く。

男の荒い息遣い。空気を引き裂くような雄叫びと共に、雲間で光の龍が蠢けば、画面が何かを追うように動いた。

空を仰いだ画面、その中心には鋭いくちばしを持つ黄色の鳥が神々しい輝きとともに羽ばたいていた。

『ギャアアア——アアツ!!』

至近距離に落ちる雷。爆発の後、男・ジョンの『発電機が……』という呟きが聞こえる。

フウロも見覚えのあつた、芝生の多い牧歌的な風景に火が宿る。

燃え広がる斜面を背景に、ジョンが繰り出したサザンドラとサンダーは戦いを始める。掠れた大声でサザンドラに指示を出し、サンダーと死闘を繰り広げる。

画面は大きくブレて土が舞い上がり、技の衝撃が地面を抉る。炎と雷槌が舞う戦いは映像が途切れることで中断されたが、サンダーの入ったゴージャスポールの画像が表示され、動画は終了した。

不完全燃焼ではあつたが、フウロは興奮を隠しきれなかった。が、彼女の手は震える。

サンダー、ファイヤー、フリーザーは飛行ポケモン使いとしては、一度憧れたことのある存在だ。それが自分の住む街のすぐ側で、伝説のポケモンを追っている訳でもない知り合いに捕まった。

——ジョンが居なければ、捕まえていたのは自分では？

脳裏を過ぎる悪魔の囁き。フウロは柄にもないと頭を振ってから、頬を両手で叩いて朝食を平らげた。

(……こんなこと考えてる場合じゃないよね。今日はジム戦の申込み

が沢山来てるんだから！)

気を持ち直し、仕事に出かける。

ジムバッジを取得する順番は特に決まっていなかったため、実力のバラバラなトレーナーがフウロの元を訪れる。彼女はトレーナーのレベルに使うポケモンを合わせ——ジョンには全力で——バトルをする。

そして当然、人手が足りない。不足する分は国の認めた試験に合格し、尚且つジムリーダーの承認を得られた者がジムバトルを行う。所謂「訓練生」だ。

フウロがつつがなく午前仕事を終わると、昼食の時間になった。食堂で食べようかなどと思いを巡らせていると、聞き覚えのある——ある種忌々しい声が耳に入る。

「フウロさん」

「え、あ……ジョンさん」

今日だけは会いたくない相手が来た。

「その……何か用ですか？」

「ええ、お昼でも一緒に食べませんか、という誘いです。サンダーについて聞きたいのですが……大丈夫ですか？」

「予定は無いですけど……」

「では行きましょう。最近オープンした店の窯焼きピッツアがとても美味しいんです」

彼はフウロの苛立ちに微塵も気付いていないのか、明るい声にピッツアへの情熱を込める。目元を注意深く観察すればクマが見て取れただろう。

正直、フウロはこの話を断りたかったが、サンダーと言われれば食いつくしか無い。ついでにこの男が如何に無遠慮に夢を踏破したのかを懇懇と語ってやらねばならぬと、ひっそりと使命感を抱いていた。

マルペロリツツアという店に着けば、そこはチーズの焦げる匂いが鼻腔をくすぐるイタリア風の料理店だ。店員に案内されて席に付けば、魅力的なメニューがフウロの目を輝かせた。

「お気に召していただけましたかな」

「はい！……って、今日はサンダーの事についてたつぷり話しても
らいますからね」

フウロは怒っている。正確に言えばやり場のない憤りを八つ当た
り気味に発散している、と言ったほうが良いだろう。それに劣等感や
悲しみ、素直に称賛したい気持ちをトツピングした複雑な心境だ。

「実は、アナタに頼み事があるんです」

「頼み……ですか？ サンダーのことですか？」

一体何を頼むのか、フウロは生ハムとトマトのチーズピザを頬張り
ながら耳を傾ける。

「サンダーを預かってもらえませんか？」

「……」

「……」

「……ハム……」

徹夜とは非効率的な行為だ。人間は夜に寝て朝に起き、一年を変わらぬリズムで過ごすよう努めるのが最善である……というのが自論だ。

だが、時にはこのような事をやらなければならない。仕事の期限が短すぎる場合や始発に乗る場合は、失敗のリスクを考慮して夜を徹する事がある。

サンダーを表に出して、大掛かりな作業をやっているのだ。ニョロトノを総動員して広範囲に雨を振らせている状況が何日も続くというのは、いくらなんでも不自然だろう。

俺はサンダー、サザンドラと共に撮影した映像を鑑賞して、溜め息を吐いた。

「迫力が全く無い。修学旅行のキャンプファイヤーの方が、まだ幾分かマシだ。……そう思わないか？」

計四つの頭はなんとも微妙な顔をして、「ギャ」と鳴いた。ライモンシテイで大枚はたいて買ったお菓子を出してやると、彼らはそれを口に放り込んでから意気揚々と外に出ていく。

現金な奴らめ。

この売名映像撮影は話題性だけではいけない。何度も見返したくなるインパクトがなければならぬ。他人に衝撃と興奮、熱狂を与えられる事のできる、真に迫るものでなければ再生回数を稼ぐことは出来ないのだ。

この一回目の映像には、差し迫る危機というものを雀の涙ほども感じない。これでは本当にサンダーを——伝説を捕獲したとは言えないだろう。

望むべきは死闘。命が削れていくという感覚を、死が眼の前に降り注ぐ恐怖を、目撃する全ての人間に湧き起こさなければならぬ。

「出てこい、ウインディ」

ゴージャスボールからモフモフの奴を出すと、黒い布を掛けて闇に紛れるよう指示を出す。

「いいか？ サンダーが雷を斜面に落とすのに合わせて、炎を出すんだ。まるで草が燃え出したように」

おやつを支給していると甘い匂いに釣られたのか、ポケモンがやってくる。ゲンガーラッキーケンタロスゴウカザルジュカイン等々、やってきたポケモンの何匹かには役割——演出効果——を与え、他のポケモンには逃げ惑う役割や倒れる役割を与えた。

セルフエキストラとセルフ音響（悲鳴）である。

二回目、三回目と回数を重ね、完成した映像がコチラ。

一時間で一万再生とは、朝五時にしては中々の回数だろう。明日には十万再生以上は届くはずだ。Pockett erでも呟いておいたし、宣伝効果は多少見込めるだろう。

空輸しに来たパイロットは俺の動画のことを口にしなかったが、明日にはその口があんぐりと開くことだろう。ヤチエのみを輸送してもらおうと、俺は二度寝した。

十一時には再生回数が一千万を越えていた。何を言っているのか分からねーと思うが、取り敢えず臨時収入は見込めそうだ。

探検家を名乗る何人かからの「ふざけんな死ね死ね死ね死ね」というリプを見てから、事の大きさが想定以上になっていると気付いた。

集まっているのはヘイトだ。映像の出来を気にするよりも、俺は自宅周辺の警備を嚴重にするべきだったのだ。盗られたくない仕事道具——ポケモンがわんさか居るし、暫くは専守防衛に努めるのが一番だろう。

パルキアによって地下に埋められた、かつてのタマゴプラントには「家」がある。あの、コテージ風の豪邸だ。ポケモンを全てボールに戻して、戦いに備えなければ。

今はタマゴプラントの稼働を中止しているため、防衛を行うならあそこが一番適している。侵入経路である大穴には以前巣であった横穴が数多く存在しており、隠し砲台の様にポケモンを配置できる。

基本的な戦力はガブ十七匹、マンダ八匹、カイリユール七匹など、ドラゴンタイプのポケモンを中心に置いた。ウルガモスも腐るほど置

いてあるので、不躰な侵入者は即、消し炭になるだろう。……なるべくコロコロしないように言っておいたが。

なお、今回はPocketterであらかじめ『ポケモンが大変興奮しており、危険な状態ですので近付かないで下さい』と明記しておいた。Poketubeにもちゃんと言っておいた。立て看板も目立つように置いた。

「パソコン」はちゃんと言っておいたので、不意の家宅搜索にも対応できる。今回は裁判で徹底抗戦の構えだ。

なに、正当防衛で業界を追放されることはないだろう。俺は伝説のサンダーを捕まえた、いかにも金を生みそうな金のアヒルである。

まあ、起こっていないことを憂慮しても仕方がない。これからのことを考えねば。

取り敢えずフキヨセシティで昼食でも取ろう。人生の豊かさとは食であり、以前とは比べ物にならないほど散財できるのだ。人気の店でお気に入りの料理を食べるのがいい。

特に、今日はピザの気分だ。フウロでも誘って、客観的な意見を聞くでしょう。飛行タイプの使い手からどれくらい恨まれているのか気になるし、何より『婚活』の一環だ。

伝説のポケモンという最上級のステータスを手に入れた人間がどれほど優良物件であるかというのを、身近で俺と価値の近い女性で確かめるのだ。唐突な媚びがあれば話を一気に進めるし、反応がなければアプローチを掛ける。失敗すればカミツレあたりに突貫すればいいだろう。

イツシュに来たのも、ジムリーダーが可愛い、という一点に尽きると言っても過言ではない。

今の俺は金持ちで、社会的なステータスがあり、有名人である。

これなら顔が多少イケてなくとも、美人は釣れる。

フウロは俺からすれば十分合格点だろう。若く、キュートで、家族がフキヨセでは有力であるし、金もありそうだ。

サンダーはフウロに本格的なアプローチを掛けるための前準備と言ってもいい。これじゃあまるで性欲丸出しマンだが、ゲームの世界

に来たとなればこれくらいの事をしなければ来た意味がない。

テンコを大きく夢もでつかく、というやつだ。

折角力を手に入れたのだ、金・権力・セックスと短絡的で官能的な夢を見るのが楽しい生き方だ。モラルなど知ったことではない。

早速フキヨセに飛んで、ジムに顔を出した。フウロが出てくるまで受付嬢と話して時間を潰す。

声をかけたのは良いが……反応は芳しくない。受付嬢も同じような反応をしてきた。上の空のように言葉が詰まり、舌があまり回っていないようだ。視線がぎこちない。

財力に興味が無いのか。いや、もしかして俺はワキガなのか……？臭い人間に、俺は決して近づかない。そういう意味でも、騎士道ではさつさと自分用の控室が欲しい……思考が脇道に逸れたな。

いや、自分の欠点は自分で気付きにくいと言うが、可能性はある。しかし以前はまともな喋り方であった。サンダーを捕獲した日に、体臭で嫌われるのは少し突拍子もないのでは？

では、別の要因があるのでしょうか。それは何だ？

動画の再生数から考えて、今のジョン・スミスは超有名人であり――そうか。なるほど。こいつらはサンダーを捕獲したいと思っていたのか。妬みで「死ぬ」とメッセージを送ってくる有象無象と同類かもしれない。

だが、それではフウロが昼の誘いに応えたのが納得いかない。話題性のある事を話す体で誘ったが、仮にもサンダーは伝説。人を狂わせる魔力があるはずだ。フウロにはキラキラとした欲望は感じないし、頻りにコチラのゴージャスボールを気にする様子もない。

……あれか、人柄で人間を見るタイプか。サンダーとか関係無いと思う人間か。フウロは善良そうな見た目であるし、何より可愛い。

よし、「尋問」だ。ゆさぶるぞ。質問を投げて、フウロのムジンを暴くのだ。店に入って少し雑談をしてから、切り込んだ。

「頼みがあるんです。サンダーを預かってもらえませんか」

「……………ふえっ？」

可愛い。満場一致の無罪……ではない。

残念ながら顔には動揺が見られる。何が目的かは、次の言葉でハツキリする筈だ。

「勿論冗談です。死ぬ程苦労しましたからね」

目の前の餌を取り上げられた犬は悲しげな顔をするが、フウロは逆に安堵したような笑顔を見せた。

ふむ、伝説が欲しい訳ではないのか。欲望に目がくらむタイプではないようだな。ついでに本来の目的も聞くとしよう。ピザを呑み込んでから、次の質問を投げかける。

「私がサンダーを捕まえたことについて、どう思いますか？」

「……元氣出して下さい」

えっ。いや、答えてよ。

フウロとの話し合いは無事終わった。まあ、悪印象は抱かれていないようなので良いや。

また、先程のものとは別に用事ができた。ポケモンハンターが少々目障りなので潰しておこうと思う。食事の度に襲ってこられては困るのだ。

ここは一つ、プラズマ団の傘下組織に袖の下を渡して、ポケモンハンターの居場所を突き止めてもらうことにした。どうやらプラズマ団内部でも奴らの行動は問題として取り上げられているらしく、快い返事が貰えた。

大物は手に負えなさそうだが、そこは不審死してもらおうとしよう。パルキアの力があれば証拠を残さず、さくつとやることが出来る。

サンダーを狙ってやってくる相手を攻撃するより、やってきそうな相手を証拠無しにぶち○す方が遥かに安全でお得だ。ジュンサーを呼ぶのにもそろそろ疲れた。

ついでに、顧客のリストも貰っていかうか。エイジの時に色違いのポケモンをギリギリアウトのルートで流したことがあるが、資金が心許なくなってきたのでそういう客が欲しいのだ。

フウロは死ぬほど苦労したと語るジョンの目を見た瞬間、自分の考えがちつぽけに見え、自嘲的な笑いが出た。

あの映像が頭の中で何度も再生される。自分の知るあの穏やかな山肌が炎に包まれ、雷と衝撃で地面がめくれ上がり、そこにいたであろうポケモンたちが逃げ惑っていた。

稲妻が頭上を通過したり、目の前に降り注いだ事を思えば「何故お前が捕まえた」などという言葉は出てこなかった。ジョンのサザンドラは雷で幾度も焼かれていたし、横たわったまま動かないポケモンも沢山いた。

(傷ついたんだ……言葉には出さないけど、大切なポケモンを失って……辛いに決まってる)

「どう思いますか？」

フウロはマスクの奥で光る瞳に、暖かさのない視線を感じ取った。シャレにならない冗談しか言えない精神状態なのか、フウロは何故自分に話し掛けたのが気になったが、支えにならなければという使命感を抱いていた。

彼女はジョンの手を両手で包み、励ましの言葉を掛ける。失ったものを取り戻すことは出来ないが、立ち直るために手を差し伸べることは出来る。

「……元気を出して下さい。辛いことがあつたら何でも相談に乗りますし、私にできることだったら力になります！」

ジョンは目を何回も瞬きさせた後、苦笑しながら感謝を口にした。

「エエ、そうさせてもらいますネー」

それからは和やかなムードで少し盛り上がっていたが、店がにわか騒がしくなる。

「どうしたんでしようか？」

ドタドタと乱暴な足音が近づけば、黒い目出し帽を被った三人組が二人の前に現れる。ポケモンハンターだ。下っ端の一人がジョンの後ろで円筒形の投網マシーンを構え、「サンダーをよこせ！」と叫ぶ。

リーダー格の男がワルビアルを繰り出すと、フウロはモンスター

ボールを手にとつて立ち上がった。

「何なんですか！ 人のポケモンをとつたら泥棒ですよ！」

「ジムの女と呑気に飯なんか食つてるからこうなるんだぜ！ ガハハ！」

フウロがポケモンを出そうとすると、ジョンがそれを手で制する。彼は振り返ることなくピザを嘔下して、水の入ったコップを飲み干すと、「ゲンガー」と呟いた。

瞬間、ジョンの影からゲンガーが飛び出して気合玉をワルビアルに叩きつける。ガンマンの早撃ちの如く、ゲンガーの素早い攻撃は下端もろともポケモンを吹き飛ばした。

「ひい……」

「催眠」

あつと言う間に三人を黙らせると、ジョンは真つ先にフウロへ謝罪を投げかけた。彼女はええはいと曖昧な言葉を返したが、状況を飲み込むとジュンサーへ通報した。

二日に一回はこそ泥に襲われていると、ジョンは笑いながらフウロに語る。

騎士道で二十連勝を成し遂げたジョンと飲みに来たフウロだったが、彼のジョークは少々笑えないものばかりだ。ジュンサーを一日に二回呼んで「引越してください！」と怒鳴られた話以外は。

大衆酒場でプリプリと身の詰まったヴルストを齧りながら、ジョッキを啣る。酒が深くなり何度目かの乾杯をすると、笑いながら二人は話に花を咲かせる。

「そういえばあゝ」

「はい？」

「シロナさんがあ、来るそうですよお」

「はえ、そうなんですかあ。あのチャンピオンの？」

「ジョンさんに会ってみたいんですってえ」

「はっ」

ポカンとするジョンの顔は、ショートケーキの苺だけを食べられた

子供のよな顔をしていた。そんなことは露知らず、フウロはニコニコとジョッキを傾けた。

「ぷはー。今度、試合が終わったら一緒にご飯でもどうですかーって」

「前向きに検討します」

「お店三人で予約とってもらいますねえー」

「ああ、そうだ！ 飲みなおしませんか？ 良いお店を知っています

からその携帯を一旦置いて置いて置いて」

「そうしんーっ！」

「ああ……これだから酔っ払いは……」

顔を赤くしたフウロはもうグデングデんだ。酒気とエロスが漂うものの、ジョンはもうそれどころではなかった。

シロナが来る。

我が家の住所は実質公開中である。

住居という点ではそうとも言えないのだが、私有地に入るだけなら山を越えれば誰でも出来てしまう。

ALSOKでも居れば良いのだが、一々山越えをしては資産を守れない。そうなると人間の警備員が必要になるが、求める条件が厳しすぎるので断念した。

従順で、優れたポケモントレーナーでなく、物分りが良く、仕事を真面目にこなし、経歴に一点の曇もなく、口が堅く、ネットに疎く、僻地での一人暮らしに対応でき、物欲の薄い人間。ついでに言えば俺に対する忠誠心や信仰心を持っていて、立場をわきまえた人間であれば尚良い。

が、居るわけ無からう。奴隷の所持は禁じられているし、仮に、適当に拉致して一から奴隷を育て上げたとしても、いつかバレる。このだっ広い敷地への侵入を防げるわけがないのに、情報を遮断するなど無理。人手なしに、資産を一箇所に集めて防衛する方がまだ現実的だ。

俺はたった二畳しかない「家」でウンウンと唸る。

二週間後、シロナと会うことになった。常識的な範囲の日程だ。だが悩ませるのは日程ではなく、出会う人物——シロナだ。シンオウ地方のチャンピオンだ。

イツシュ地方に来るという設定は知っていたし、予測しなかったわけではないが、直接アプローチを掛けてくるとは毛ほども考えていなかった。それもこんな早期に。

「なんてこつたい」

まあ、見た目だけなら誤魔化せなくもない。今履いている靴は上げ底だし、服には肩パッド、おまけにマントで体格も隠し、万が一覆面を剥ぎ取られても良いように付け髭とカラコンを付けている。

完璧だ。

ボロを出さなければ、の話だが。

シロナとそのポケモンに面識のあるポケモンを連れて行くことは万が一を考えれば出来ないし、酒に飲まれないようにしなければ。

シロナとの接触はなるべく絶たなければならぬ。その為の方法は一つある。

まる一。フウロとの関係を友達からランクアップさせ、「彼女以外の女性とは遊びません」の呪文を唱える。ある種非常識な行動を取る彼女だが、そういう人種は真つ当な行動な理由には強く出れない。

……デジャヴか？

強引に連れて行かれそうだ。

まる二。逆に、シロナを攻略する。

無い。有り得ない。可能性として論外。考える必要すらない。

暗殺者疑惑のある奴を攻略すれば、顔を見せた時に首を狩られかねん。シロナに限ってそんな事は無いだろうと思うが、一応。一応である。彼女の結婚相手としての条件は魅力的だが、命の危機があるのはNG。

だがしかし、俺は公的には死んだ人間だ。今更命を狙うだろうか？
……………。

唐突な予定変更は止めたほうが懸命だ。二兎追ってどちらか一羽を都合の良いタイミングで捕まえるのは至難の業だ。最初の予定通りフウロを攻略しよう。

そもそも、シロナが俺にエイジを導き出すには材料が足りなさすぎる。声を直接聞いたわけでもないし、会話をしたわけでもない。第一、エイジの時代にシロナとはあまり話していないのだ。分かるはずもなからう。

精々、俺が居なくなつた後に騎士道にハマつた、などという下らない理由だ。フウロと接点のある——ついでに記録更新も期待されている——俺と話をしたというのは何ら不思議ではない。

だが、話す意味は無い。彼女が一体何の理由で俺に近づくのか。

どのように考えても、ジョン・スミスにエイジと知っていなければこの行動は出来ない。高々二十連勝の新人、まだ珍しくもない。

……脱出に何か瑕疵があったのか？

証拠が残っていたか？ 控室に監視カメラがあったりするのか？

国家ぐるみで俺を追っている？ ……これはないな。シロナとの遭遇で俺に悟らせる意味が無い。

何らかの手段で、シロナは俺の事に気づいた。そう考えるとお宅訪問の際、盗聴器か監視カメラを設置した可能性がある。だが、そうだとすると何故今更になって接触してくる？

ダメだ、思考のドつぼにはまっている。訳が分からない……。

であれば、発想を転換して、防衛する方向に意識を向けよう。

防御はゲンガーを影の下の地面に潜らせておくのがトレンドだ。ゴーストタイプは物理的接触を避けることが出来るので、咄嗟に身を守らせるにはうってつけの人材だ。

ゴーストタイプに限らず、ポケモンを常時外に出して連れ歩く場合は、スタンガン同様警察に届け出を出さなければならぬ。ポケモンを連れ出すことはおろか、牧場で飼っているという体もあるのでその辺の抜かりはなかったが。

これは^{あらかし}予め申請しなければ、親友だろうが相棒だろうが普通にお縄or罰金なので注意しなければならぬ。サ○シもちやーんと書類を書かなければ、ピカさんと離れ離れになってしまうのだ。

暗殺を防ぐ為のポケモンなら、キノガッサや鋼タイプは非常に便利である。昏睡&肉盾に加え、対ポケモン・対人間に於いて大変優秀な成績を収められる事は間違いない。

ただ、一つだけ欠点を上げるとするならば、胃痛には何の気休めにもならない所だ。正体の見えない^{シロナ}仮想敵に怯えて暮らすのはストレスが掛かるらしい。

シャツターを切る。

サンダーは口に啞えたヤチエのみをパクリと食べ、籠を背負ったグレイシアが荷物を振り落とした。実を付けた低木が延々と写る風景を納めると、彼らに労いの言葉とおやつを渡す。

「ギャーオ」

「腹の肉が増えてないか？」

「ギャ」

ほぼ日課と化した写真撮影だ。ブログにサンダーと他のポケモンの写真を上げているのだ。流石伝説と言うべきか、アクセス数はそれなりに伸びている。

しかし、未だに「写真を取らせて下さい」などと、自称プロカメラマンのカスどもがメールを送ってくるのだ。中には本物が混じっているのだが、彼らに好き放題撮らせてはサンダーの価値が下がる。

今俺が使っているカメラは大したものではないし、画像は意図的に解像度を悪くしている。許せないのだろうなあ……だが、一銭にもならないオナヌーに付き合う気はサラサラないのだ。

ヤチエのみを出荷している企業から、是非とも使わせて欲しいというオファアもあつた。それは勿論受けた。少なくない報酬が支払われるし、お互いの良好な関係にも繋がるだろう。

真のカメラマンは偉い人の伝手で現れるのだ。

コミケでコスプレを撮る感覚でホイホイと公開しているサンダーではない。尤も、そんな事したら企業に怒られる。

「贅肉を減らさないと威厳がなくなるだろう」

「ギャーオー！」

「騎士道の試合に出てもらおうからな」

翼をバタバタと羽ばたかせて抗議するサンダー。この数週間で随分と墮落したものだ。手伝いの報酬にお菓子を提供するのは控えたほうが良さそうだ。カタログを利用する制度を導入しようか。

それとも、Pocketubeに上げた動画の広告収入で報酬を決めようか。

フウロは騎士道の試合会場に来ていた。サンングラスで変装をバツチリと決め、待ち合わせの場所でシロナを待っていた。

ライモンシテイのドームにはサンダーの出場を謳う横断幕がデカデカと表示されており、チケットを求めて無数の人が屯たむろしている。

「遅いなあ……」

かれこれ三十分ほど待ち続けているが、シロナは来ない。事故にでも遭ったのか、それともプラズマ団のような連中に襲われているのか。

気が気でないフウロだったが、呑気な声が聞こえれば振り返ってシロナに詰め寄った。

「ごめんなさい、アイスを選ぶのに時間がかかっちゃって」

「もー！ 心配したんですよ……って、後ろにいる人は？」

アイス片手に微笑むシロナの後ろ、ちょこんと小動物のように佇む少女——四天王が一人、カトレアだ。ウエーブのかかったロングヘアを揺らし、小さく欠伸をした。

「あら、フウロさん」

「カトレアちゃんも来たんだ。やっぱりサンダー？」

「いえ、今日はちよつとした用事の、そのついでです」

三人はスムーズに入場を済ませる。チケットは希少であつたらしいが、シロナはきつちり三人分揃えていた。

「よく手に入りましたね」

「知り合いに譲ってもらったのよ」

シロナは近頃引きこもってばかりだと聞いていたフウロとカトレアだが、元気にいつも通りやっている様子を見れば、杞憂だと分かった。

「それにしても凄い熱気ですね。よくジョンさんの試合は見に来ますけど、ここまで盛り上がってるのは初めてですよ」

「フウロちゃん、ジョンさんの事、もっとよく聞かせてくれないかしら」

フウロは蛇に睨まれた心地がした。何となく恐ろしい雰囲気があったのだ。カトレアに助けを求めて視線を送れば、彼女はパンフレットをパラパラと捲って気づかない。

絶体絶命？ のピンチであつたが、二人の間を遮るような大歓声が割って入った。会場を揺るがす声にカトレアは顔をしかめ、フウロは咄嗟に試合が始まりますね、と誤魔化した。

『伝説を手に入れた男、デユウウ——ツク仮面んっ!!』

爆発のような音、それが声だと気付くのにフウロは少々の時間を要した。ペスト医師のような不格好なマスクと、サンダーをモチーフにした黄色と黒の覆面を被った男が入場してくる。

見下げているはずの観客は遥か上空を覗き込んでいるような錯覚に囚われ、大した記録を打ち立てた訳でもないのに王者の風格を身に纏わせていた。

相手は過去に十七連勝を成し遂げた老練な男。名前はバーナビー。騎士道歴は三十四年とトップクラスで長く、生半可な新人ならば意表を突かれ、戦術に飲み込まれてしまう。

つまり天候パである。意表を突かれるというのも、単純に晴れオーバーヒートでHPが飛ぶ事を指す。対策を取れば、裏選出でボコボコに……という流れだ。

対するデユーク仮面。ポケモンは鍛え抜かれたタフさを持ち、『受け出し』を成立させない程の攻撃力を発揮する。彼自身の蓄えた知識は生半可なものではなく、的確な指示を出して相手を粉碎する。

膨大な知識の城塞と鍛え上げられたポケモンの組み合わせを攻略できる者は、今のイツシュ地方はおろかこの地球上には居ないはずだ。

分かりやすく例えるのならば、昆虫魚類爬虫類両生類鳥類哺乳類等二百種類以上の動物が持つ身体的特徴や特異的能力を記憶し、尚且つそれを組み合わせて戦っている真正正銘の化物。同じ舞台に立つならば、チャンピオンや四天王級の知識量が要求されるだろう。

この世界には勿論レベル技という概念は無い——遺伝で元々覚えている事があるからだ——ため、「このポケモンは某という技を覚える」といった情報が不確定なのだ。尤も、それは流動的な試合において、大半のトレーナーは使うかどうか分からない技を暗記するのは労力の無駄だと——本音は面倒だからと——割り切っている。

ポケモンバトルを制するのは技の組み合わせだ。三次元空間で組まれた相手を倒すためのコンビネーションが勝利を決める。しかし、騎士道を制するのは技単体の威力とその使い所だ。バトン等も確か

に有効な戦術だが、成功した者は居ない。

デューク仮面を知れば知る程、彼の試合を目に焼き付ければ目に焼き付ける程、その恐ろしさが理解できるのだ。シロナはそういった意味で大きな期待を寄せていたし、カトレアはサンダーという客寄せパANDAに目が向いていた。

選出の時間になると、カトレアはパンフレットから目を離して会場に目を向けた。

バーナビーのパーティーはロズレイド、ジユゴン、バクフーン、キュウコン、ボーマンダ、ゼブライカ。サンダーのお披露目バトルと銘打ってはいるが、彼の手持ちに地面、岩を持つポケモンは居ない。恐らく、この六匹のポケモンが彼の全力なのだろう。

デューク仮面の手持ちはサンダー、ナットレイ、ギャラドス、サザンドラ、メガチルタリス、ヒートロトム。メガシンカをするとは分かっていないものの、炎タイプの一貫性が悪い事は一目瞭然だ。

「シロナさん、カトレアちゃん。どうやって倒しますか」

「……倒す？」

「ふうん……そういう見方もあるのね」

突然投げかけられた質問に、シロナはやや困惑する。

「バーナビーさんのポケモンを使うとしたら、どうやってデューク仮面さんを倒すか、ってことです」

「なるほど……難しいわね。どっちのポケモンも強いわ」

試合が始まり、ギャラドスとキュウコンが向かい合う。

「交代ね。ゼブライカが居ればそちらにしたほうがいいですわ」

「彼は「にほんばれ」を使うんじゃないかしら。元々、キュウコンをサポート役にするパーティーよ。それに水タイプの技の威力を少なく出来る」

夢特性と呼ばれるほど珍しい「日照り」を持つキュウコンは、その存在そのものが希少であるため、滅多なことがなければ育てることは出来ない。そもそも日照りキュウコンは最近になって発見された、所謂突然変異種ではないかとされており、年老いたバーナビーが手持ちとして選んでいる事は可能性として有り得ない。彼は長年連れ添っ

たポケモンと戦っているのだ。

キユウコンは「おにび」でギャラドスを火傷状態にさせ、アクアテールをその身で受けて耐えた。次のターンで場の天候を日照りにするとアクアテールを受けて退場した。

「流石に、熟練者同士の試合にもなれば、技を外すことは無いわね」

シロナがボソリと呟く。

鬼火、アクアテール、ゲーム内であれば命中率は100%ではない、外す要素のある技だ。だが現実のバトル——騎士道では、物理的にダメージを与える技を除き基本的に敵との距離を二十メートル空けなくてはならない。

当然、シャドーボールだろうがなみのりだろうが、外す可能性は存在する。けれども思い浮かべてみてほしい。素人が拳銃を六発的に撃つとして、全弾命中させるのにはどれくらいの練習が必要だろうか？

加えて、それを本番で成功させるための胆力、集中力。ルーチンをどれだけ一発に込められるかが問われる。ポケモンには相手を倒しうるのに十分な威力も求められ、当てるだけではいけない。

であれば、本番での試行回数が置ければ多いほど、ゲーム風に言い換えるのなら「熟練度」が高ければ高いほど、ポケモンの技というものが当たりやすくなるのは道理だ。

レートで、ゲーム内存在として、現実世界でなら精密機械とも例えられる攻撃を行えるデューク仮面のポケモンが、技を外すということをするだろうか。現実に合わせて嵌めれば、命中率というものはポケモンバトルにも騎士道にも全く関係のない——数値化など出来ない信用ならない数であることも加味すれば、自ずと答えは出てくるだろう。

シロナは「卓越した」命中精度を持つポケモンを知っていた。手元のタブレットを操作して、『【エイジ】生存説検証スレ27【騎士王】』にまとめたデータを振り返る。

まずは靴。エイジは三十一種類の靴を周期的に履いていた。百二十戦もの試合で確認された靴と、デューク仮面の履く靴の種類——色や形——は今の所四分の三ほど合致している。残りはイツシュ地方

で流行した、若しくは独自のメーカーが販売しているものだ。エイジの履く靴のメーカーの傾向としては高級志向にあり、デューク仮面が新たに履いている靴のどれもがその条件を満たしていた。

二つ目は体格。エイジの公式プロフィールには身長174cmと記され、デューク仮面の身長は177cmと表されている。しかし、彼は上げ底をしている。外からでは分からないように隠されているが、スレッドの検証班が重心の移動の仕方を分析し、導き出した。そのデータを会社の靴のカタログが証明しており、例外はあるものの信用できるデータである。

続いて、身体のバランス。肩幅——勿論肩パッドは見抜かれている——腕の長さ、足の長さ、顔立ち、その多くが合致している。このデータはデューク仮面が上げ底をしている説を裏付ける証拠にも成りうる。

四つ目は上記にも記した通りのバトルに関する項目の幾つか。

五つ目はエイジとデューク仮面の背景である。彼らは共通して、少数しか出回っていないはずのメガストーンを豊富に所持している。法整備が追いついていないため違法などではないが、彼らの出生がどこらも不明であり、およそ豪邸が建つほどの大金を十分用意できるとは考えられないからだ。同一人物ならば、デューク仮面が元々持っていたかのように使用しているのは何ら不思議ではない。

六つ目、声紋。スレッドが5まで到達してしまい、狂気的なスレッドとして知名度が上がってしまったために人が集まった。元々研究者肌のシロナが書く根拠というものには論理的で真に迫る物があり、一定数の人間は居たが、本格的な調査というものは行われていなかった。

が、自称音大の学生を名乗る者が「教授の機械使ったったwww」などという書き込みとともに貼った声紋データ。これがデューク仮面IIエイジ・生存説を勢い付けた。

最早集まったデータはデューク仮面IIエイジを裏付けるものとなった。シロナは直感として予測はしていた。それこそ、デューク仮面の元に押し掛けて一言「違う」と言われれば、諦めるつもりであっ

たが、科学的な根拠が集まってしまったがために来ざるを得なくなつた。

バーナビーのロズレイドをヒートロトムが吹き飛ばし、ボーマンダをギヤラドスが下せば勝負が着いた。

デューク仮面の勝利だ。

「アラ、サンダーは使わないのですね」

「あつれー？ まあ、試合は三回行われるみたいだから」

シロナが目を離しているうちに一回目の試合が終わってしまった。カトレアとフウロは「相手のパーティーでデューク仮面の手持ちを倒す」という会話に熱中しているようだ。

第二試合。ポケモンの回復時間の間に行われた騎士道についての催し物が終われば、二人目のトレーナーが出て来る。

彼は順調に勝ち、無事サンダーも選出できたため、成功で終わった。興奮冷めやらぬ様子の客が出ていく最中、シロナは結論を出した。エイジが何故逃げたのか、デューク仮面として何故生きているのか、自分の死を装って地位を投げ出して何をしたかったのか。

答えを出した。

ジョン・スミスとシロナ——ついでにフウロとカトレア——は、ジョッキを片手に視線を交わす。シロナは無言の圧力で連絡先を交換すると、ジムリーダーと四天王を放って液晶に怒涛の勢いで文字を入力し始めた。

『オレンジ諸島の果て、ルギアの伝承が残された地について知っているかしら？ アナタが住んでいた絶海の孤島、人間ですら住むのを諦めた島、関連がないと言いつれれないわ。そこでアナタはルギアに関する秘密を守ってきたのでしょうか？』

サンダーを捕まえたにしては、あの映像にはいくつか不自然な点が残るわ。——エイジ君。安心して、私はこれ以上深入りするつもりはないから。だけどその上で言わせてもらおうわ、力になる』

『人違いです』

予想通りではあったが、当たってほしくなかった予想だ……。

キンツキンに冷えたビールを喉に流し込んで飲み干し、俺は目の前に座るシロナを視界に捉えた。

フウロとカトレアが訝しげに見ているが、正直構ってられない。

個人用トークアプリ POKÉLINE では訳の分からないことをシロナは宣ったが、「君の正体はエイジなんだろう？　ん？」という魂胆が見え見えである。携帯は即ポケット行きだ。

こういう手合は付け入る隙を与えないように立ち回らなければならぬ。相手にしないことが肝心だ。

「そう言えば、カトレアさんは何故来たんですか？」

話題を作る。四天王様には勿論敬語だ。

「そういえば言っただけじゃなかったわね」

馬鹿め。追求の時間は死んだわ。取り付く島もないとはこの事だろう。長らくポケモン世界で過ごしてきたが、我ながら肝が座ってきたと実感できる。

クツクツク、シロナめ。指を咥えて雑談を見ているといい。

バカ正直に会話をすれば情報という情報が引つ張り出されてしまい、最終的には「覆面を取って下さる？」と極めて丁寧にお願いされるだろう。そうなればもうお手上げだ。どんな手段を用いようと誤魔化すことは出来ない。

「マスクの下を見に来たのよ」

駄目だあ……。チェックメイトが走ってやってきた。

全力疾走で逃げたくなってきたが、それをすれば私はエイジですと自己紹介をすることに他ならない。

大衆酒場特有の話の誤魔化し方を見せてやろう。

「すみませんー」

店員を呼んで注文する。料理がテーブルに積まれることを除けば会話を強引に中断できるいい手段だ。延命措置にすぎないので、何と

か言い訳を考えなくては。

「唐揚げともものタレ四本、あとコークハイ」

「あたしカシオレ」

「ジントニツクで」

「ミルクを」

仕切り直す。

「それで、何の話でしたか？」

「マスクの下の話ですわ」

「確かに、あたしも気になる！」

……。

まともな人間は「ああ、何か事情があるんだな」と気付くものだと考えていたが、常識人がジムリーダーやら四天王やらやっているわけがない。

F u c k !

カトレアと組んで正体を探りに来たか！

「……プライベートな事ですので、あまりおおっぴらに話したくはないですね」

「あら、どういった事情がお有りですか？」

お嬢様いけません。勘弁してください。

「フウロさんには申し訳ないですが、帰ってもいいですか？」とか吐き捨てて帰らせてえ。

露骨な態度をとれば証言の正当性を裏付けることは間違いないため、穏便で、なるべく角の立たないような……火事で顔が焼けたとか、皮膚病であるだとか、あまり触れられたくない部分を前面に押し出せる方がいい。

宗教上の理由、一族のしきたり、この辺りの言い訳は非常に使いやすいが、宗教名や部族名を述べると即座に嘘がバレることに加え、伝統的な衣装が無いのか等といった質問に対する脆弱性が大きい。神話の専門家の目の前で下手に突っ込んだ話をしてはいけない。

であれば、アレしかない。

精神的な問題を抱えているという体を装う。しかし、一番の問題は

俺が精神病について全くの無知であるということだ。

あれか、ゲロでも吐いておけばいいのか。

「精神的な事情です。二年前まで薬を服用していましたが、最近は落ち着いてきたのでマスクがあれば過ごせます……なので取ることは出来ません。申し訳ないです」

やべー、自分でも言つてて訳が分からない。

フウロが物凄くフォローを入れてくれたので何とか話は流れた。それからもう……普通の飲み会だ。仕事の事、趣味の事、ツマミの話、情勢さえ考えなければ両手に花なので実質得だろう。リアルカトレアちゃんを見れたことも大きい。フウロを狙ってなければ攻略しようとおくせくした筈だ。

飲み会は無事解散。シロナもカトレアも大きな探りは入れてこなかったので、携帯のバイブレーションが鳴り続けている点を除けば、概ね乗り切ったといえるだろう。

ついでに、フウロに埋め合わせとして水族館に行こうと誘っておいた。デートである。

リア充パワーマシマシコミュカマシマシ容姿マシマシおっぱいマシマシ地位マシというラーメンチェーン店もビックリなプラス要素のデパート女、フウロ。彼女が居なければ今回の難事を乗り越えることはできなかつただろう……この案件を持ってきたのもフウロだが、それは考えないとする。

こういう日は一発ヤリに行くか……いやいや、シロナがここまで追ってきた事を考えると迂闊な行動は謹んだほうがいいだろう。ヤリに行ったのがバレれば、デューク仮面としての評判が終わる。

普段は何処に行くかと言えば、プラズマ団が『紹介』してくれた店だ。

夢特性の♀ポケモンや色違いを金持ちに売り捌いていた——有り余っているのだ——時、プラズマ団の人間を上客から紹介されたのだ。何でも、戦力として使いたいとか何とか。

ジョン・スミスとしての俺は地位を築くために利用したが、わざわざ

ぎ誘いを受けてまで沈む船に乗るつもりはないので、当初は断った。しかし、プラズマ団のゲーチス派と呼ばれる連中——派閥があるのはたまげた。俺はプラズマ団に関しては何で無知である——に袖の下とかを渡された。取り敢えず様々な事情があったらしくその辺の詳しい説明はなかったが、十分な報酬を渡してくれるようだったので受領した。

報酬は——イケナイものだ。違法な売春に手を出しているらしく、その一部を摘まんだ。初物の青果をくれた事もあり、対価を奮発した事もあった。

モラル？ ヤツていいと言われているのならヤツていいのだろう。第一、売春なのだから対価は得ている筈だ。加えて、十四歳はこのイッシュでは犯罪ではない。寧ろ十四歳からが成人なので、ハッスルしてもよいのだ。

ポケモンバトルの盛んなカントーでは十歳でも——最近問題視されているが違法ではない——オツケーだ。何十年前の法律を引きずっているのか……多分お偉い人が何だかんだと理由をつけて誤魔化してるんだろうよ。

バレなきや犯罪じゃないですよ！

売春でアウアウに手を出そうとも、ポケモンハンターをパルキアで空間ごと深海に飛ばしても、違法なルートで自分のポケモンを売り飛ばしても、無罪だ。

これらに関しては暫くの間は控えよう。フウロを攻略するのに注力したいし、シロナやカトレアの協力者が潜んでいるかもしれない。

飲酒運そくいそとく転はあまりしたくないので、酒を飲んだ後はライモンシテイのホテルで一泊するのが日常だ。そのうちフウロを連れ込める程度に仲を深めたいが、まあ追い追い。

俺はベッドに飛び込んで、トークアプリのPOKELINEを開く。シロナからのメッセージが三通、フウロからのメッセージが二通。フウロの方を先に開いてから会話を楽しむ。彼女は心の清涼剤だ。夏の炎天下に飲む冷えたサイダーの様に癒やしを運んでくれる。

問題はシロナだ。三件の癖にスクロールを必要とするほど長大な文章は、俺の頭を悩ませるのに十分なURLと隙間のない科学的根拠を以って画面に叩きつけられた。

喜ぶべきはシロナの出した結論が真実とはかけ離れた所にあるということだ。

ルギアを祀る一族の末裔イィ〜？

ルギアは持つてるけどさあ……名乗り出るわけ無いでしょ。「エイジだ」という確信を持たせるための後押しをしてはいけない。行動原理すら掴めない奴の甘言に惑わされては、この先まともな人生を歩むことなど出来ないだろう。

『——上記の理由から、サンダーを所持しているという点と、捕獲映像には通常の落雷では発生し得ない形での延焼シーンが見られる点、津波から何らかの手段によって逃げ延びていた点が明らかよ。』

よって、サンダーと海を結びつけるには海の神・ルギアの存在なしでは語れないわ。伝説のポケモンには人間ではおおよそ窺い知れない能力を持つている事は明らかよ。例えばルギアそのものをエイジ君が捕獲・飼養していなかったとしても、アナタが神を祀る血族に連ねるのなら、その力の一端を借り受けることは出来るのではないか？ そう想像するのは難しくないわ。

勿論、これは私の勝手な想像だけれど。仮に的を射ていたとしてもこのことを公表しようとは思わないわ。神話に携わる者としての義務よ。だけど、私は個人的な知識欲を持っているのも確か。良ければ今度調査に付き合ってくれないかしら？ アナタの意見が聞ければ今後の神話研究の役に立つと思うわ』

『ストーリーカー行為は止めて下さい』

エイジ生存説検証スレ二十七って何だよ……途中までほぼ自分で埋めてるじゃねえか。>>>1が完全にシロナじゃねーか。……画面の向こうの女の機嫌一つで、俺がエイジだとバレてしまうのは、怖い。鳥肌が立ってきた。底知れない恐怖がジワジワと背筋を這い上がって、首元に凍えるような吐息を吹きかけてくる。

——何がしたいんだ!?

恐ろしい。恐ろしい。身震いでまともにも立つことも出来ない。
毛布を被つても震えてくる。震えが止まらない。

金が目的なのか、それとも誘い出して殺したいのか、単純に追い詰めた
めたいのか、俺が狼狽える姿を見て楽しんでいるのか。

……ストーリーカー行為を止めろ、は言い方がキツ過ぎたか？
機嫌を損ねたらどうなる？

断言は避けたが、本気でそう思い込んでいたらどうなるんだ！？
ジュンサーへの相談はできない。これでも色々ヤバイことを
ヤッている自覚はあるのだ。隙を見せれば社会的に死ぬかもしれな
い。

流石に三ツ目の引越し予定地は無い。ここを奪われれば行く先
は人の居ない森の奥深くか、この星の反対側か、行方は知れない。

『ストーリーカー？』

何で俺に聞くんだったツ！

自覚がないとでも？

『お金なら幾らでも払うので勘弁してください』

お姉さん許して。

『…………ごめんなさい。私、エイジさんが死んでから少し我を失ってい
たわ。ジョンさんの迷惑も考えずにこんな事をして……謝罪の言葉
もないです』

嘘だな。他人が死んで動揺するなんて事は漫画やアニメのフィク
ション存在であり、泣いている人間というのは可哀想な自分を装って
いるだけだ。親族が死んで泣くというのであればまだ領ける範疇で
はあるが、知り合いだ。

友人が死んだというのであれば、俺にも涙を流すくらいの感情はあ
るが……知り合いだぞ？

……いや待てよ。そもそもココはゲーム世界。シロナは俺の思う
ような闇系お仕事人シロナではなく、大天使シロナエルの可能性が？
死んだ人間の足跡をこじ付けてでも追うというのは偏執的でアニ
メ的な行動とも言える。メタ的に考えれば、これも一種のイベントで
は？

……。

都合の良い妄想に逃げるのは止めよう。この世界に生きるのは紛れもない人間であり、メタ的推理が成立するはずもないのだ。

大体、メタが成り立つというのであればギンガ団残党の連中はタマゴ島には来なかつただろうし、フウロとの恋愛に関しても出会って三日で即墮ちる筈だ。

今から目を逸らしてはいけない。思考を枯らすな。人生の絶頂から転がり落ちるような崖が周囲に溢れているのだ。

シロナの怒涛のストーキング暴露文章。その次に謝罪ときたもんだ。まず大前提として、ストーリーカーとは会話が通じない。俺は向こうが理解できないし、シロナは俺を理解できない。

謝罪は多分誤魔化しだろう。油断した所をパシヤリとするために言っているに過ぎない……筈だ。

何故ゲームのキャラクターとこのような形で関わらないといけなののか……もつと平和的な関係を築きたかった。

疑うことしか出来ないというのは辛いものだ。同志スター○ンはこんな気持ちだったのだろうか。……そういうの、ないから。絶対ない。スターリ○に限ってそれはない。

兎も角、ただのストーリーカーなら問題ないのだ。暗殺者疑惑を払底できればいい。

疑惑を晴らすには何が必要だ？

同じチャンピオンのアデクが闇系のお仕事をしていないなら、シロナもまたそのような事をしていないと言えるのではないか。……本末転倒だ。全く前進できないではないか。

カトレアから聞くとというのは——駄目だ。もしもそうなら黙るに決まっている。同じ組織の秘密をバラしたりするものか。

興信所……も駄目だ。とてもじゃないが調べられるとは思えない。『何故シロナさんはエイジさんを探しているのですか。彼が生きているとはとても思えない』

会話を続けよう。立場によって回答は異なるはずだ。

返信は、贖罪の様な言葉だ。神父になった覚えはないが、唐突で長大な懺悔に俺は思わずうるっときた。人間という範疇に収めていいのか疑問を呈するほどの天使っぷりだ。

自分が居残つていればエイジは死なずに済んだかもしれないと、死んだと思つてる上に罪の意識を感じているらしい。信用して僕はしにましえくんと名乗り出たい衝動をグツとこらえ、そのまま相槌を打つて話を聞き続けた。

お陰で途中から電話に切り替わり、夜中の二時半まで喋り続けた。後半は明らかに酔っ払っている風に呂律が回らなくなっており、同じことを何回も聞かされた。

心に莫大なダメージが蓄積してしまった。申し訳無さで胃が痛い。そんなわけで告白した、フウロに。真面目な人間には真面目に思いを伝えるのが一番だ。純粹で混じりつ気のないマナーパワーがあれば、ちよつとしたマイナス補正も乗り切れるということを証明してやろう。

回答は延期されたが、顔の紅潮や戸惑いが確認できたので悪い賭けではなさそうだ。この信用を得るのには随分と苦勞した……。

あと一ヶ月強もすれば夏だ。水着姿が拝めるように祈っておこう。

「……カミツレちゃん、付き合つてって言われた」

「やっぱり。そうなると思つたわ」

カミツレの家にも通り押しかけたフウロ。

「どうしよう……！ アタシこんなこと言われたの初めてなの」

「サンダーを捕まえたトレーナーでしょ？ フウロちゃんを思つてくれる心があれば、いいと思うけど」

「でも、全然ドキドキしたこともないし……どっちかと言えば尊敬する人って感じなの。すつごく強いんだよ？」

「……かわいいそんな人」

玉碎。哀れ、彼は自分がマスクを被っている変人ということをお忘れしているのだ。ステータスがカンストしていようとも、称号は変人であ

る。

「覆面の下は見たことあるの?」

「無いよ。飲み会でカトレアちゃんとシロナさんが聞いてたけど、精神的なアレがあるって」

「それは……前途多難ね。結局どうするの?」

「……もうちよつと考える」

それだけ言つて、フウロはベッドの上に横になってあつという間に寝てしまった。

「ジョン・スミス……デューク仮面ねえ」

カミツレは手元のタブレットである記事を閲覧する。

『ジョン・スミス氏、ポケモン保護団体に多額の寄付』と書かれたものだ。

（プラズマ団の活動資金……それも個人が出すにしては大きな額を提供しているわ。彼がジムリーダーのフウロちゃんに近づく、ねえ……?）

水面下でドス黒い陰謀を企むプラズマ団。彼らが今年の春に入つて本格的な活動を始めたのには、何か理由があるのではないか。

カミツレの脳裏を過ぎるのはポケモンを奪われ、失意の底に沈む人々の顔。そしてフウロがそうなってしまふのではないかという懸念があつた。

「洗う必要があるわ。彼の経歴……」

暗中模索。都会の闇や暗夜の森に消えたポケモン達は何処へ消えたのか。デューク仮面が呑気にお茶している時でさえ、探り合いは始まっているのだ。

「明後日、探りを入れましょう」

スケジュールには写真撮影、と書いてあつた。可愛らしいサンダーの絵がハートとともに書いてある。ポケモンフード会社の広告の撮影だ。

サンダーと共に撮影する……つまり、所有者であるジョン・スミスが来るということ。

「サンダーさん出す」

ゲームルートが如何にして出現するのかを知るには何が一番良いのかと言えば、三人のジムリーダーが出て来る街の一個前の街——厳密に言えばそうではないが、ゲーム的に言えば一個だ——カラクサタウンでゲーチスが演説をした時期を見る。

これが一ヶ月半ほど前、五月初旬の話だ。ストーリーが四月から始まっていると仮定すれば、一つの街へ行くのに大体一ヶ月程度掛かっているということなのか。つまり、チャンピオンロードのあるソウリュウシティへ辿り着くのは一月。

プラズマ団に差し上げたものは全部、その辺りでどさくさ紛れに回収させて頂こう。残っていれば、の話だが。

正直、一週間ちよつとあれば街から街への移動など出来ると思っていたのだが、一ヶ月も掛かるということはやはり子供の足では厳しい道のりなのか。トレーナーと戦いながら街から街へ、ポケセンからポケセンへと旅をするのは大変だと思う。

ストーリー進行が主人公の移動によって変わるのなら、暫くは悠々とした生活が出来る——と考えていた。五月の時点では。

六月の中旬となった今では、そのような事を考えていた自分が如何に馬鹿馬鹿しいか理解できる。

後悔している理由はいくつかある。

まず第一に、田舎はともかくとして都会は交通網が発達しており、利便性に優れるという点を完全に見落としていた事。

アメリカンなサイズの地方なので、主人公が発発するカノコタウンからカラクサシティが約百五十kmも離れているのだ。東京静岡間の距離位だろうか。それほどの長さを歩くとなれば、ねえ？

自転車くらい使おうわ。

二つ目、リサーチ不足。

五月から六月と言えば、シロナの襲来やフウロへのアタック、カミツレとのサンダー写真撮影、カトレアによるマスク剥がし未遂事件などなど、ストレスで片腹大激痛状態になってもおかしくないイベント

が目白押しだったのだ。

演説の情報だけ知って深く調べなかったし、仕方ないね。

だが、最初の一回の演説しか知らないというのに、情報収集を怠っていたのは不味かったな。

では、何を後悔しているのか。それはもうアレだ、主人公との第三种接近遭遇だ。

今日は久々の休みなんで、いつもの覆面とマント装備だけになり、訪れたことのない飯屋で酒を呷って腹を満たし、ほろ酔い気分でライモンシテイを歩いていたら走ってきたトウコと正面衝突しかけたのだ。

よくある道を譲ろうとして左右にフェイントを掛け合って最終的に同じ方向にずれるやつ。

あれを向こうが走っている時にやったものだから、激突するのは必然。影から飛び出たゲンガーが俺の体を守ったのでコツチは無傷だったが、トウコは派手にすっ転んだ。

「あいたつ!?!」

首筋、ポニーテール、御御足おみあし、尻、どこをとっても百点満点計四百点オーバーの非の打ち所のない美少女。主人公としてはやや性的であるが私は一向に構わん。

五、六メートルは吹き飛んだ——俺が当たればまず骨折は免れないであろう衝撃のはずだ——トウコは、小石に躓いた様にすぐに体勢を整えると、俺に食って掛かってきた。

「ちよつと、プラスマ団見逃しちやっただじゃないの!」

ああ、口が悪い。主人公の喋り方じゃないと思ったが、まあ現実はこちらも悪くない。

寧ろ凛々しくて格好いい。トウコさんまじブラック。プリプリ怒っている姿も最高だぜ。

トウヤ君が何故居ないのかは知らないが、トウコさんがいればいいや。

「申し訳ない。あまりにもビックリしたもので、お怪我は?」

「全く」などと宣うものだから、俺はやはりこの世界の人間としての

耐久力は正直おかしいと思った。平然と岩を砕いたりする人間が多い世界で、ポケモンに護衛させるといふのは正解のようだ。ゲンガーにご褒美のチョコレートを与えながら会話を続ける。

トウコとの貴重なお話タイムだ。

「それで、あいつら逃しちやっただけど？」

「はあ」

「プラズマ団、見てないの？」

「見てませんね。それに、あんな連中とは関わらないほうがいい」

見てないのは本当のことだ。酔ってたし。俺はバレないようにプラズマ団を利用してはいるが、それはトウコを邪魔する理由にはならない。それであの団体の反感を買っても、いずれ沈む組織。末期癌の老人に止めを刺すような趣味はない。

とは言うものの、現実のプラズマ団はひたすらに悪辣だ。黒いなんてん等などと言って笑い飛ばすことが出来ない位で、腐りきっている。BW2……二年後に戻ってこれる時点でおかしいでしょうに。

ジムリーダーが彼らを追い詰めれば、不正を見逃して金を得ていた者達もある程度本腰を入れて潰しに掛かったりするとは思いますが、まだその段階ではない。

エロ同人で犯されている分にはまだいいが、現実にいるトウコがあんなことこんなことやることやられてしまうのは少々可哀想だ。

「子供がこんな時間にフラついてはいけませんよ。早くお家に帰りなさい」

「現行法じゃ十四はほぼ成人、知らない？」

「大人になれない大人、ご存知で？」

「あ？」

ひ、ヒエッツ。

チビるくらい恐ろしい目つきで睨んでくるのは勘弁して欲しい。でもそういう女の子嫌いじゃないし大好きです。

「悪かった。ただ、プラズマ団を追うなら私も行く」

やはりプラズマ団か……私も同行する、ジョン・スミス院いん、というわけだ。

「ふーん……あいつらの居場所を知ってるの？」

「よく知ってる、この街にはよく来るからね」

大嘘だ。ライモンシティにある売春の斡旋組織——プラズマ団の下部組織はよく知ってる。下部組織とは言うが、その構成員の殆どはプラズマ団、余りがゴロツキだ。

お世話になったとはいえ、いずれ消すつもりの場合だ。正体を隠して燃やすつもりだったが……証拠を消すなら今やってもいいだろう。証人もいるし……な。

「凡^{おおよ}その位置を決めよう。君が走っていた方角——遊園地の周辺だな。背の高いホテルが一つ、大きなビルも幾つかあるな」

場所は知ってるが、バカ正直に言うつもりはない。あたかも推理したように、さながらホームズのように言い当ててみせれば少しは誤魔化せるだろうか。

「それが……何？」

「重要な事だ。歩きながら話そう」

こういう時、偏屈者のように人の話を聞かず、頑固に持論を語る。反論はその場で言いくるめるのが吉。

「一つ聞きたい、プラズマ団は……何か持っていた？」

「盗んだポケモン、そのボールを袋に詰め込んでいたわ。探偵ごっこはジュンサーに任せたらどう？」

「なるほど、懸命だ。我々の持っているポケモンバッジが飾りにならないことを祈るよ」

プラズマ団の捜査をジムリーダーが行ったり、四天王が基地に殴り込みを掛けたり、ジムバッジと地位を利用した捜査は——ポケモンの関わる犯罪に限りある程度の裁量が認められている。でなければ公務執行妨害、現場は滅茶苦茶、不当な拘束し放題、間違いなくブタ箱行きだ。

立場としては迷探偵コナソの世界における探偵、がしっくりくるだろう。当然、事前に行動を知らせるようなことは必須である。先日、カミツレから色々話を聞いた。初めて知った事実なので、今得意気に話していることはその時のものだ。

「モンスターボールの重量を知っているかい。一個百gは下らない、それをジャラジャラと音を立てて持ち運ぶのは……ナンセンスだ、非常に疲れるし目立つ」

「簡単に言っつて。めんどい」

「奴らは地下か、低層階にいる。それも周りを囲まれた目立たないビルだ。裏口があるはずだな」

まず一例、と断ってから適当な建物に入る。勿論ハズレだ。

探索を終えるとトウコがニヤリと口角を上げて小馬鹿にした表情をする。俺も笑い返して三つ目のビルに一万円を賭けた。八百長だが、バレるはずもない。

二つ目を巡回し、ハズレ。

三つ目のビルに入っつて、一、二、三階を廻るとトウコは手を出して「頂戴」と小悪魔スマイル。お小遣いあげたくなっちゃう……ヤバイヤバイ。

「まあ待て、慌てるような時間じゃない。地下があるかもしれないだろう?」

「地下ア? ちょっと、あるわけないでしょ」

「いや、間取りがおかしい。階段があってもおかしくない」

勿論そんなことは外から見ても分からない。知っているからテキトー言っつてるだけだ。

裏に回ればドアが、二つ。

両方開ければ、地下への階段と非常口。

「証明完了だな」

渾身のドヤ顔。ゴージャスボールから水口トムとキノガツサを出して「行くぞ」と一声かける。ジュンサーを呼んで、それまでに証拠をちよろまかして、ちよつとした冒険は終わり。

カミツレはサンダーの羽根を優しく梳き、うっとりとした視線で見つめる。

「羽根が意外と柔らかいのね。硬いとばかり思っていたわ」

カミツレには使命がある。早急にジョン・スミスの素性を探らなければならぬ。彼の行った資金提供——寄付は何の政治的影響力もない個人が送る額ではない。

プラズマ団への資金流入は大きな問題だ。ヤーコンがプラズマ団員を街で捕まえようと画策しているが、地形的にボートが大量に配備されると逃げやすくなってしまふ。それだけでなく、単純な活動資金としても足しになる筈だ。

上流の方にあるソウリュウシティか下流のヒウンシティ、開発途中のタチワキタウンのいずれかへ行くことが出来るとなれば、ヤーコンの敷いた監視体制が崩れるのは必至だ。

「アナタ、とつても凜々しいのね……欲しくなっちゃうワ」

ジョン・スミスは監督、ポケモンフーズ会社のお偉い人とお話中だ。金の話か、単なる挨拶なのか、カミツレには判別がつかないものの、妙に上機嫌な顔であった。

撮影はつつがなく終わったが、カミツレは話すタイミングを完全に見失っていた。つついサンダーに気を取られてしまったが、彼の話し相手は専ら高級スーツを来た男。

カミツレが話す機会を得られたのは彼がサンダーをボールに戻す時だった。

「ねえ、この後時間あるかしら？」

「申し訳ない、これから会食なんだ」

「それは……フーズ会社の人ど？」

「ええ、自然で美味しいポケモンフーズ N P Fの方と」

N P F。きのみ由来の材料を中心に、天然の素材のみを利用した高級フーズを専門とした会社だ。カミツレの調べた限りではプラズマ団や他の怪しげな組織との関わりはなかったが、完全にシロとは断言できない。

「なら今度、私と食事にでも行かないかしら？」

「申し訳ないが……」

「フウロの話をしましょう」

「是非ご一緒させて頂きます」

カミツレは予想よりも遥かに簡単に得られた承諾に若干の疑いを持ったが、それはジョンが彼女の想像以上に楽観主義的であるということ。カミツレが探りを入れに来ているなど欠片も考えていないのだ。

ジョンは美人と飯を食えてラッキー、と思っている。

予定を合わせた二人は早速個室で向かい合うことになった。他の目が入らない場所はモデルのカミツレにも、これから行う話し合いにも都合が良かった。

「アナタに幾つか聞きたい事があるの」

「別に構いませんが……私がフウロ以外に心を寄せていると思っっているのですか？」

「違う。フウロちゃんの話じゃない」

ジョンの覆面から見える目が細められる。訝しんではいるものの、話を拒絶する素振りは見せない。

カミツレの探りたいことは、プラズマ団との繋がりが。企業との関わり、金の使い道、その出处。怪しさというものは隠そうとすればズレが出てくる。

カミツレが忍ばせている盗聴器が会話を拾い、離れた場所でヤーコンがそれを聞いている。質問は既に尋問に変わっているのだ。

「……ポケモンの保護ってあるわよね、最近話題の」

「保護？ そんな話題がありましたか？」

「サンダーを自然に返せって言っている団体、当事者でしょ？」

「覚えてない、覚えておく必要が無い。脳の無駄です。第一アレは保護じゃない」

態度と言葉に迷った様子はない。プラズマ団の表向きのスローガンには真っ向から対立しているが、裏向きの態度ソックリだ。彼らはポケモンを開放したがらず、欲望が見え透いている。

ただ、ジョンが欲望まみれであるとは言い切れない。事実としてプラズマ団との関連性が見出だせない保護団体にも寄付を行っている。典型的な金持ちの行動とも言える。騎士道のスター選手で、サンダー

を捕獲した豪運の持ち主。農場を一人で経営し、農薬を使わない栽培をしている。

だが秘密主義的だ。何故人を雇わないのか、マネージャも付けない、目の下に隈があることは——特に試合の日——しよっちゅうだとフウロは語っている。

人件費はケチっている、しかしポケモンフーズ代は山ほど出している。

何かがおかしい。

不穏な空気が漂い始める。二人共食事には中々手を付けずにいた。

「じゃあ、保護って何？ 意見を聞きたいわ」

「随分と変な話をしたがる」

ジョンは懇懇と保護について語る。

「ポケモンは良き隣人です。しかし、家畜とよく似ている。違う点は賢く、不思議な力を持ち、遺伝子改良が積極的になされていない」

ポケモンの遺伝資源に対する研究はポケモン協会が圧力を掛けたがるほどタブー視されている。彼らはまるでポケモンを人間の友人であるかのように扱い、それこそ家畜のように扱うことを是としない傾向にある。

しかし、ポケモンブリーダーという職業も存在する。タマゴから孵ったばかりのポケモンを人に馴れさせたり、強くするための育て方を研究している。

タマゴを作るのには勿論ブリーダー資格がなければならないし、タマゴが出来れば書類を提出しなければならない。

「保護とは、彼らのその善良な意思を踏みにじり、ミキサーにかけて選別するようなやり方を断固として認めないことだ。……こんな話をするべきじゃあない、まして食事時だ」

犬や猫がペットショップで選ばれ、余りをミンチにするようなことだ。尤も、どちらも絶滅危惧種に指定されているが、悪質なブリーダーはポケモンをそうしている。販売ルートが裏に近づくので、ジョンは積極的にそういった奴を追いつめようとしているが。

「……最近流行っているでしょ、プラズマ団。そのせいかしら」

「聞いたことはありません。解放がナンタラカンタラ」

「あれはどう思う?」

「机上の空論ですね。人間はポケモンにその経済の多くを依存しています。特に、イツシユはそうだ。ポケモンとともに発展している。手放すなど不可能、故にただのカルト団体だ。気味が悪い」

ジョンはワイングラスを傾けて、メインディツシユの肉料理を口に運ぶ。

「でも、あなたはプラズマ団に多額の寄付をしている……そうでしょう?」

「身に覚えがない。目に見える落とし穴には嵌まりませんよ。私はプラズマ団に寄付などしていません」

「実質同じよ」

「トレーナーが探偵の真似事ですか。ストーカーには懲り懲りです」

「あら、バッジの意味を知らない?」

イツシユは今現在も続く開拓の途上において、トレーナーの助力を必要とする。一般に探偵は捜査権を持たないが、優秀なトレーナーはよく捜査協力を求められてきた歴史がある。伝統が制度として残っているのだ。

「つまり、私を疑っている? プラズマ団と組んでいると?」

「疑惑がある、断言はしてない」

「なるほど。もしそうなら、どうなんですか?」

「……え」

「何か犯罪をしているわけではないでしょう? でなければのさばる筈がない。それは警察が機能していないという事を表しているのだから」

カミツレは表情を変えずに、その心の中を怒りで満たしていた。プラズマ団の所業は到底許されるものではなく、トレーナーならば少しは憤りを感じてもよい話だ。

(薄情者ね)

少なくともフウロは任せられない、と評価を下しつつデザートのジェラートに舌鼓を打つ。自分は自分であるが、悪は悪である。カミ

ツレは年上のジョンが冷たい考えをしているのに、落胆せざるを得なかった。

「所で、メインディッシュはまだですか」

ジョンは神妙な顔？ をしてそう言うので、カミツレは小首を傾げた。メインの肉料理は食べただろう、と。

「……フウロさんの話をすると言うから此処に来たのです」

「……………」

「まさか！ フウロさんを想う一心で、話をしに来たというのに！」

「それならアドバイスをしましょう。プラズマ団に手を貸して知らぬ存ぜぬを貫くつもりなら、永遠にフウロちゃんの気持ちは理解できないわ」

ジョンは数秒間沈黙する。息を少し吐いて、カミツレと目を合わせた。

「マスクの話をしているのなら、いずれ彼女には見せます。その団体をどうにかしたいというのなら、手を貸すことはやぶさかでない。だが、暇ではない。日々の仕事に追われ、ポケモンの世話をし、ファンサービスもある。此処ぞという時に呼んでくれ」

「……どうだ、と言わんばかりにカミツレへ連絡先を手渡す。」

「イツシュの未来が掛かってるわ。此処ぞという時は、常に訪れているの」

「こき使ってくれるな」

彼はそれだけ言うと、そそくさと帰ってしまった。支払いを勝手にやったらしく、カミツレは奢られる形になってしまった。

「……お金だけなら、任せられるんだけど」

評価、金だけの男である。あながち間違っていないのも問題ではあるが、フウロがそれに気付いていないのも問題だ。

「あ、ヤーコンさんから……『微妙な成果だな、黒に近い灰だ』ね。味方になればいいのだけれど」

実力だけならば、申し分ない。ジムリーダーを鎧袖一触に倒せる程の強さは、やはりトレーナーとしては尊敬できる。だからこそ、敵には回したくないし、フウロの話を引き張り出しても対話をしたの

だ。

——イツシュはポケモンとともに発展している。手放すなど不可能

「プラズマ団……彼の言うことが正しいなら、破滅の道を歩んでいる……」

伝説のポケモン、ゼクロムとレシラム。プラズマ団がその力を借りようと画策していることは、カミツレでさえまだ掴めていない情報だ。勿論、ジヨンはすっかり忘れている。

「不気味ね……」

カミツレは店を出ると、夜を照らし出すライモンシティの光に目を細めた。

「眩しい……この明かりなら、影に潜むプラズマ団を探し出すのは難しいわ……光が強ければ闇が濃くなり、弱ければ闇に侵される……ジヨンさんが冷たく見えるのも、輝いているせいかもしれないわね」

カミツレはヤーコンから「通信機を切れ」と連絡されているのに朝まで気付かなかった。

イツシユ追求編

15

コンクリート製の冷たい階段を下る。

コオ、コオ、コオと靴音が音を立てる度、トウコは見下ろした先の男に「静かにしろ」と怒鳴りつけてやりたかった。

この十数段を下りた先には、悪行三昧のプラズマ団が居るアジトがあるのだ。プラズマ団員を幾度となく撃退したトウコであったが、今ばかりはモンスターボールの位置をしっかりと確認せざるを得なかった。

覆面を付けた変な男——ジョンだ。一悶着あつてトウコは彼と行動を共にしているが、今から踵を返して立ち去つても誰も文句は言わない筈だ。

けれども、トウコが彼に付き添うのは悪行に対して許せないという義憤の念があるからだ。頭に被った鍔付き帽子の位置を整えると、ジャンビーの入ったボールウオッシュを手を持つ。

ジョンはキノガッサと水ウオッシュ、ロトムを先行させている。トウコには見覚えのないポケモンだったが、並外れた強さを持っている事だけは理解できた。

曇りガラスの扉の前で、ジョンはトウコに目配せをしてから開けた。

(ちよ、いきなり——!?)

いきなり飛び込むなど無謀にも程がある。トウコはいきなり背中に氷を突っ込まれた様に声を張り上げる。

「作戦は!？」

一対無数。狭い室内——しかも内部を知らない状態で戦えば、一方的に技を撃たれて倒されてしまうかもしれない。トウコからしてみれば、ポケモンの強さに自信があろうとも神風特攻には付き合えない。勿論、トウコは負ける気など端から無いが。

ジョンはこの質問をスルーし、代わりにプラズマ団への盛大な挨拶を見舞った。

「こんばんは、死ね！」

「!?」

その直後に放たれたキノガツサのタネマシンガンが、ポポポポと間抜けな音を立てて中の人間も何もかもを吹き飛ばした。

一瞬遅れて轟音。埃が舞い上がってトウコは思わず咳き込むが、悲鳴の大合唱が耳をつんざく。

コンクリート製の壁は抉れて吹き飛び、人と人が折り重なり、棚の下敷きになる者もいた。砲弾が直撃したかの如く悲惨な有様であったが、ジョンは呻くプラズマ団員を踏み越えて奥の部屋に向かう。

「な、あ……ッ！」

強い。博物館やヤグルマの森でプラズマ団員と戦い、そして撃退したとは違うバトル。文字通りレベルが違いすぎる。人間を骨折させるほうがまだマシな部類に入るのだ。中途半端な実力のポケモンで挑めば、死ぬ。

「何だオマエラ！」

「プラズマー！ 爆弾か？ 戦闘員はコッチに居るんだよ馬鹿め！」

奥の扉からプラズマ団員——彼らは制服を着ていなかったがすぐに分かった——がポケモンを伴ってなだれ込んでくる。数は五人。チヨロネコ、メグロコ、ミネズミ等、トウコなら苦戦したであろう数と面々だ。

「ポケモンを引っ込め——」

「やれ」

身動き一つ取れ無かったトウコが唯一絞り出した優しき。プラズマ団の行為に同情はできないが、ポケモンは使われているのだ。せめてもの救いを差し伸べてやらなければいけなかった。

ポポポポ。そして、爆発音。

キノガツサのタネマシンガンは蝶番ごと扉を吹き飛ばし、ポケモン

も人間も等しく壁に叩きつけた。

「終わりだ。君は外でジュンサーさんを誘導しなさい」

にべもなく言い放ち、彼は傷ついて今にも息が絶えそうなポケモンに見向きもせず奥の部屋に立ち入る。

立ち起こった埃のため口元をハンカチで押さえているが、その気遣いをポケモンに振り分けることはない。

トウコは唇がワナワナと震え、奥歯を強く噛みしめる。

「……アンタねえ!」

「名前で呼ぶといい。名刺だ」

ジョンはトウコの方をチラリとも見ずに名刺を投げ渡す。地面に落ちたそれを拾い上げて、トウコはビリビリに破いた。

「最ッ低ね、騎士道の選手の癖に」

彼女は急いで鞆からきずぐすりといいきずぐすりを取り出し、倒れたポケモンたちに振り掛けて治療を始めるが、呼吸は弱くなり、段々と力強さが失われていく。

一発でチョコロネコが十二体前後吹き飛ぶダメージだ。過剰な攻撃にはいくらポケモンと言えども耐えることは出来ない。自然のサイクルで淘汰されるのと同じように死んだ。

「どうした、盗られたポケモンは見つかったか……ああ、ご愁傷様」
「ッ——!」

その何とも思っていないような一言で完全にブチ切れたトウコはジョンの胸ぐらを掴み上げ、全力の右ストレートを叩き込——

「ゲンガー」

彼の影から飛び出したポケモンがトウコの腕を掴んで止めた。彼女は振り解こうとするが、ポケモンと人間では力に差がありすぎる。出来るのはただ叫ぶことだった。

「離しなさいよッ!」

「見なかったことにする」

「そんな事を言ってるんじゃない! 殺す必要は無かった!」

主人の怒りに応えるかのようにトウコのジャンビーがボールから飛び出して「キヤルー」と怯えた声を出す。ゲンガーはトウコの腕を

離すと、赤い手形の痕が出来ていた。

「何を今更。君たちが野生のポケモンと戦って、勝つのと変わりない」
「は……」

トウコには理解ができなかった。何故この虐殺と言っても過言ではない戦鬪が、ポケモンを戦わせることに繋がるのか。突拍子もない言葉に呆れるも、次なる文言は浴びせかける冷水として最適であった。

「何故野生のポケモンが飛び出してくるのか、彼らにはそれが生存競争に必要な手段だからだ。惨めに負ければ……当然、待つのは緩やかな死だ。さて、君は何匹殺した？」

彼は五匹など取るに足らない数だ——と付け加え、棚の書類を再び漁りだした。

十や二十で済むのか、旅の中で戦った野生のポケモン達は。トウコは心の中で計り知れないほどの衝撃とともに、受け入れがたい現実と直面することになった。多くの場合、群れで無事に怪我は治療されるが、今のトウコにそれを知る由はない。

道を歩いて目が合った、自分から仕掛けていった、食事時に現れたので追い返した、きのみを採取していたら戦いになった、原因は様々だったがどの戦いにも勝利し、フラフラと立ち去っていくポケモン達を確かにトウコは見ていたのだ。

トウコは気に留めたことすら無かった。我武者羅に強さを求めていたわけではないが、逃げた彼らの行く先を知ることがなかった。知ろうとすらしなかったのだ。

生まれ落ち、成長し、戦い、生き延び、戦い、戦い、トレーナーと出遭って、傷つき、逃げ延びて、死ぬ。そんな生に一体何の意味があるのか。

冷たいタイルに転がるチョコネコ達と同じように、ただ死ぬためだけに生まれるのか。

トウコの中に熱い感情が芽生える。眼から滴り落ちる透明な血潮であり、喉で支える激情の叫びであった。

ジュンサーが来るまで、二人は祈りを捧げるように沈黙していた。

雨の降る日、トウコは遊園地を訪れていた。

先日突入したプラズマ団のアジトには犯罪の証拠となるであろうモンスタールボールは無かったのだ。その代わりに別の証拠があったらしいが、その事はトウコには教えられていない。

ジョンはトウコに二度とプラズマ団と関わらないよう忠告して、ライモンシティで安全に眠るために二十万程手渡した。トウコはそれを受け取ったが、今はプラズマ団を探して遊園地にいる。

客足は少ない。静けさの中、雨の叩く音が響き、二人は視線を交わした。

「Nー」

トウコは何かを探していた。それを知る人物、最も近い人間、有意義な答えを聞くことの出来る男。求め、そして出遭ったのは決して偶然ではない。

トウコの中で劇的な変化が訪れたのだ。成り行きで感情でプラズマ団を倒していた頃とは違う、強い意志が芽生えた。推し量ることの出来ない何かがある。プラズマ団の影で蠢いているのを、トウコの鋭敏な嗅覚は察知したのだ。

求めるのは真実。記憶に無いでは済まされない事実、調べなかったことを後悔するであろう本当を探求する気持ちだが、トウコを突き動かすのだ。

騎士道にダブルバトルが導入されるらしい。

というのも、サンダー人気に頼ったシングルバトル商売は長く続かないと判断してのことらしい。君の意見を聞こう、と騎士道協会のイツシユ本部に呼ばれたので、シングルのルールを流用すればいいんじゃないんですかねと言っておいた。

まもるやトリックルームの優先度のルールはシングル時代から存在したので、二体同時に攻撃してもいい技を決定すればいい。

例えば、かえんほうしゃ。アレはやろうと思えば二体同時に攻撃で

きるのだが、そんな事を許してしまえば特殊一強時代が来るので、どうにかしてそこら辺のルールをゲーム準拠で押し付けた。

いや、見事通りましたよ。金のアヒルの言葉をこうもアツサリと聞き入れてくれるとは、全くお笑いものだ。

ダブルはシングル以上にヤバイ、と個人的に実感しているバトルの仕方だ。挑発が無い、まもるが無い、雪崩持ちも威嚇持ちもない、地震はあるが飛行がない、猫騙も補助要員もない、天候トリル始動役も無し、無い無い尽くしで潜ればまず一勝も出来ないだろう。

きつちりと作られた構築には手も足も出ない。何をやってくるかわからない相手に勝つことは、不可能だ。故に、この分野に関しては負けも有り得る。

凡その見立てだが、種族値と構築の暴力で最初の三ヶ月は無敗で戦えるだろう。何せこの世界では技を覚えさせるのにも一苦勞するのだ。ましてシングルとダブル両方で戦うには十二体のポケモンが必要となる。

自分が有利になるように頑張つて働きかけました。

そんな事は置いておいて、フウロと正式にお付き合いすることが決まっていたしました。やったぜ。

顔が見たいと仰られたので、普通に見せました。一人くらい見せてもいいんですよ……別に。「伝説めっちゃ持ってますw」とか言っていないので。自分をさらけ出す最高の妥協が一人だ。結婚願望は前々からあったのでその位は見積もっている。

言い訳も有名人に似ているという理由で注目されたいわけではない、とか何とかテキスト言っておいた。よくある理由ではないか。自分のコンプレックスを隠すために、努力してそれを覆そうとする。今の俺の状況ぴったりだ。騎士道を始めた理由と矛盾しない。

専門的なことはともかくとして、もうフウロは恋人なのだ。聖夜に性なる夜を過ごす相手であるし、バレンタインの記録が零から一になる為の重要な人物だ。

そのためには何としても既成事実を作らなければならない。

この既成事実というのは、俺が赤ん坊がコウノトリに運ばれてやつ

てくるなどという迷信を信じている乙女思考だからではなく、一度肉体関係を持てばフウロのように真面目そうな娘はボロを出さない限り別れを切り出さないと、という想像の元で行われている。

加えて、スキヤンダルは向こうも望まない筈だ。人間としてある程度までもな事をして、愛妻家と呼ばれる程度にいいことをしてやればいい。満足させてやれば別れはしないだろう。

一月以内にホテルで休憩し、二月以内に生活水準を引き上げて俺なしでは生活できなくして……って結婚できない女か。まるで胃袋を掴もうとしているみたいだ。

しかし、よくよく考えてみれば、我が家は無いのだ。

地下に隠されたコテージはタマゴ島のをそのまま持ってきたので、別に税金を払っているわけではない。そもそも敷地面積の大半を農業・開拓用として購入している為、無許可で家を建てるのは違法だ。

勿論、小さい倉庫を家として書類にしているが。役所に申請して本当にこれでよろしいのですか？　と言われたのはいい思い出。耐火性などが問題になるらしいが、人が山脈の向こうにしかないので許可をもらえた。ガバガバである。

だが、フウロが我が家に来るのは当然予期できる。非合法の家を見せるのは不味い。非ッ常々に不味い。落ち度は無い方がいいのだ。

早急に新しい家を建てたいのだが、フウロに見せても恥ずかしくない物を建てるにはまだ資金不足だ。余りはあるが、半分以下になるのは勘弁して欲しい。

どうにかしないと買った時、頼りになるのはコネだ。タチワキシティやヒオウギシティ——BW2で追加される街——の開発話を持ち込まれたのだ。

糞ド田舎でマサラ状態だったが、コンビナートが出来るとか出来なとかで開発が進められるらしい。労働者の家族を周辺に住まわせたかったので出資とかしない？　と持ちかけられたのだ。

スターのみを量産し、人を雇い工場を立て、加工と流通を効率的に行って六次産業化を目指せばそれなりにいい商売になりそうだが、過

労死待ったなしだ。

そしてブラックシティとホワイトシティ——両方とも存在するのは現実だからだ。あの辺りは街なら二、三個は入る——の開発も耳に入ってきているのだ。一枚噛むならそっちの方が良さげだろう。

まあ、金は焦らなくてもいいか。そのうち湧いて出てくるのだ。

ポケモンワールドトーナメント、PWTが開催されることになった。何回かやって止めたので詳しくは覚えていないが、ジムリーダーが山ほどやってくるお祭りの奴だ。

今年に入って「やらないか？」とポケモン協会の幹部が提案したらしい。そして見事採用、第一回の開催地がイツシュに決まり、二年毎に行われる事となった。チャンピオンリーグのある地方の幾つかが参加を表明し、予選をやるらしい。

いの一番にフウロが知らせてくれたので頑張つて！ とエールを送ったが、騎士道からも枠はあるんじゃないの？ と大歓迎状態であった。

金には困っているが勿論丁重にお断りした。優勝賞金は少額、CMやらなんやらで稼いでも効率としては最悪である。それに農場から離れる訳にはいかない。作業の大半をポケモンに任せているが、やはり俺がやらなければいけない部分は多々ある。

人生初の彼女が出来たのだから、焦らず生きよう。俺はようやく登り始めたばかりだからな、この果てしなく遠い騎士道をよ……。

カミツレは知ってしまった真実に動揺せざるを得なかった。ジムは訓練生に任せっきりで、モデルの仕事にも中々身が入らないでいた。

ライモンのある日の夜。フウロがジョン・スミスとまたデートに行くと言うので、カミツレはプラズマ団との関わりを確かめるためにこっそりと後をつけていたのだ。

友人が寝取られ——友達に彼氏が出来るかもしれないのは喜ばしい事であるが、その様を見せつけられるのには少タイラツときいて

た。自分から見に来て何だという話ではあるが、世の理は尽くりア充
爆散せよ、である。

しかし友人とプラズマ団対策のためにも、ジョンは見張っておくべ
き対象だ。二人が帰るまで監視しておこうと追跡していたのだ。友
情と責務、少しの怒りが混ざっていたが、カミツレは夜に紛れてその
任を遂行した。

(……知らなければよかったわ)

後悔。それは情報として紛らわしいという程度を越えていた。

いいカンジで向かい合っていた二人だったが、ジョンは突然覆面を
剥いだ。人気のあまりない場所、バレないと思っているのか、それと
もカミツレに気付いていたのか、辺りを見回してから覆面を取り去っ
たのだ。

次いでウィッグ、カラコン、髭、顔を覆い隠すものがなくなる度に
カミツレの中で正体が判明していく。会話は聞こえなかったが、彼の
正体は紛れもなくあの「騎士王エイジ」だ。

思わず閉口してしまうカミツレ。彼は死んでいるので偽物の顔だ
ろうが、どうしてそれをチョイスしたのか全く分からなかった。

(似ている……あまりにも似過ぎてているわ)

カミツレはまずこの事をヤーコンに相談すべきか迷った。ヤーコ
ンは聡い男で、まず秘密を漏らすことはないだろうし、この行動に隠
された真のメッセージを解き明かすことが出来るかもしれない。

だが、ジョンがカミツレがこの場に居ると知って、このような行動
に出ているとしたらどうだ。それは「顔を誤魔化す事が出来る強大な
バックがいる」という一種のアピールとも取れる。

だがそれはプラズマ団との関わりを暗に示す行為であり、秘密主義
的な男がそれをするのかどうか、という話になってしまう。

(まさか、この期に及んで自分はただのそっくりさんです、なんて言う
はずないわね。普段の生活でも、自分の顔を隠すことに意味が無いも
の)

ジョンがカミツレの存在に気付いていないとしても、彼女はこの行
動に意味を見出せなかった。

(話すべきよ。フウロちゃんにも、他の頼れる人物にも)

五里霧中。一寸先の見えない謎の中で、カミツレは自分自身を見失う程に取り乱してはいなかった。人間としてある種完成された精神は、取るべき行動をハッキリと示すのだ。

隠された真実を暴こうとする者達が、潜む者に挑む。

夢、希望、平穩。金と地位に見守られ、幸せを享受する俺に訪れた唯一の試練。

ダブルバトル。

魔物が棲む魔境に騎士道は足を踏み入れてしまったのだ。

『では、騎士道シングル代表のデューク仮面さんに、第一回目の騎士道ダブルについて意気込みを語ってもらいましょう』

ライモンシテイの騎士道スタジアムの中心で、俺はマイク片手にダブルバトル頑張るぞいと熱意を叫んだ。

「ポケモンの技のみを使って、コンビネーションを決める変則的なバトル！皆さんの目を飽きさせることはないでしょう」

声を張ってキャラ作り。看板の仕事も楽じゃない。

本業はバトルであるが、今回のダブルバトルに関して、俺は慎重な選択を採らざるを得なかった。

パーティーはメガガル、ニンフ、モロバレル、ドール、メガジュカイン、ドランの六匹だ。ぶっちゃけ遠慮する気などもう無い。

コンセプトは「ダークホールでぶつ殺す」である。随分前に使えなくなつたチートオブチートであつたが、どうせなら騎士道協会に駄目と言われる前にやりたい放題やってやろうという腹積もりだ。

いや、そもそもダークホールという技自体を知らないから、禁止しようがないのだ。追従者が現れる前に禁止されるだろうが。

ドールのダークホールの強さは、対策のために神秘の守りやラムカゴ等を搭載し、追い風この指止まれ猫騙し等で好き放題動かれるまでがテンプレートである。

実際俺もそうだった。シングルでブイブイ言わせていた頃、たまにはダブルでもやってやるかと手を出した所、見事レートが1300。一勝も出来ずに終わったのだ。

その洗礼を、今から俺が受けさせてやるのだ。

俺が舞台の上でマイクパフォーマンスをしているのを、シングルで

ボコボコにしてきた選手達が見守っている。大方、シングルでは駄目だったがダブルで勝とうなどと考えているのだろう。

馬鹿め、シングルでも勝てない能無し共がダブルで勝とうなど甘い甘い。

何時の時代でも頂点に立つのはこの俺、このジョン・スミス以外には存在しないのだ。

初回ということで俺は最初と最後の計二回戦い、その他の試合は他の選手同士が戦った。大した事もなく、ダークホールをキメてガラーラでグロウパンチを積み勝利した。解説の人はダークホール初見のようで、解説しきれていなかった……可哀想に。禁止されてなきや反則じゃないんですよ。

さて、今回の戦いで注目すべきポイントは幾つかある。どいつもこいつも俺と騎士道協会の作成したダブルバトル指南に従って、守る、岩雪崩、はっぱカッター、熱風等で戦っていたことだ。

補助技は精々守るに加え、身代わり、剣舞等シングルでもよく見られるものだ。ただし、シングルですら積み技は余り使われない。

積み技を何故使うか、簡単に言えば長所を伸ばし抜き性能を上げる、読みを強要する、こんな感じだ。これを読んで、抑制し、相手に勝利する。だが、彼らは伸ばすべき長所を数値として把握できないのだ。

結果、特殊ナットレイや物理シャンデラ等という例が出てくる——技があるのかどうか不明。考慮したこともない——し、例えるならパールシエンが瞑想を積むような事態が発生する。意表は突けるが……ねえ？ ぶつちやけそういうのにも慣れたのだ。

その代わり、俺ことエイジの真似をする人間は数多く出てきた。猛火のバシャーモ、ただのガルーラ、胞子キノガッサにSをまともに振っていないポイヒガッサ、砂隠れガブリアス、メガしないライボルト、倫理的な「配慮」をした道連れを持たないゲンガー。

技構成も真似をしたように似通っているが、それらを単品で突っ込むアホばかりだ。相性補完すら出来ていないのもいる。

しかし、無理もない話だ。彼らはそのポケモンが何故強いのかを知

らない。例えるのなら、「ヒトモシ、君の体当たりは三ヶ月前に計った火の粉より強いようだ。つまり君は攻撃力が強いんだね」と、こんな感じで十分な分析ができない。まあ研究者には有り得ないことだが、普通のトレーナーには有り得ることだ。

考えてみて欲しい、うら若きトレーナーが冷静に、自分と自分のポケモンを分析するために論文を読む、若しくは考察のために論文を購入するだろうか？

仮に読んだとしても、ポケモンに数字をつけることはほぼ不可能で、将棋のように棋譜があつてきちんとした勉強ができるわけではない。

経験則による判断やポケモン一匹一匹と向かい合うことで彼らは強くなっているのだ……という事が雑誌に書いてあつた。四天王の誰かのコラムであつたが、興味がなかつたので内容しか覚えていない。

騎士道に関してはもっとデータが少ない。

『デューク仮面、天晴今回も全勝であります』

不安はあつたが、試合を全勝で終えた今なら断言できる。

この世界はずっと生きやすい。

例えよう。俺の手持ちは32の6乗分の一を乗り越えて選ばれたデザイナーベビーの如き選ばれたポケモン。彼らは別の時間、別の空間を乗り越えて集められ、戦いと闘争と試合の果て、煮詰められた戦術を以て戦っているのだ。

つまりイージーモードである。ただ、ミスをしないようにしつかりとしたパーティーを組まなければならない。茶番で金が貰え、評判が上がるのだからやっておくに越したことはない。

もつと早く気付くべきではあつたが、視野が広がってきたのだ。彼女が出来て幸せが有頂天になったから、余裕ができたのだ。フッフ……俺が怖いぜ。どこまで幸せになれば済むのだ。

疑いに疑った甲斐があつたというものだ。ただ、既に騎士道の選手になった人間はそうそう新しいポケモンを育て上げて投入することは出来ない。これは慣れと時間の問題だ。だが永遠の安泰はない。

なれば、警戒すべきは今後の新人枠だろう。自惚れているわけではないが、スターと言う自覚はある。憧れてはじめてました、等という輩がぼこじやかと出て来るのは道理で、騎士道を見据えてパーティーを組む人間が出てくるかもしれない。

クレセリアが欲しくなるので、どうにかこうにか調べて、捕獲してもおかしくない土壌を整えようか。世界ひろしと言えども、クレセリアを突破できる事は出来ないはずだ。ただし、虫悪は除く。

こまけえこたあいい。伝説いっぱい持つてる凄いい人に、俺はなる。

向かい合うフウロとジョン・スミスは、きちんとした正装をして格式高いレストランで食事を取っていた。

別々のルートで合流したので、ジョンは覆面を付けてはいない。

器用にナイフとフォークを使って焼き加減の甘いステーキを口に運ぶ彼に対して、フウロは付き合い始めたばかりだと言うのに若干の不信感を抱いていた。

根拠は——カミツレからのリーク。プラズマ団とのコネクションが深いという推論は、心優しいフウロを惑わせるには十分な衝撃を持っていた。

フウロは仮面の下の素顔が、隠された偽物だとは到底思えなかった。瞬きもしていたし、作り物の様な違和感は無かったと記憶している。歪みのない顔だった。

ジョンに対してフウロは少なからず憧憬の念を抱いているものの、親友の言葉を疑うような真似はできなかつた。

フウロの知る限りでは、ジョンはプラズマ団に与する邪悪な輩ではないと思っていたし、ポケモンに愛情を注ぐ良いトレーナーだと認識していた。非常に多くのポケモンと暮らしており、お金に糸目をつけない為、伸び伸びとした生活を送っているのも判断要因の一つだ。

その彼が、ポケモンの解放を謳うプラズマ団と手を組んで悪事をしているなど、フウロにはとても考えつかなかった。

さりとて、親友の考えが間違っていると頭ごなしに否定もできな

い。フウロはジムリーダー同士で話し合いの機会を作るので、それまでによくよく考えておくようにとカミツレからは言われていたが、疑うことが難しい。

ジョンはフウロの前では格好をつけて、ボロを出さないように極力慎重な立ち回りをしていたので、見破られない程度には信用を得ていた。

だが、フウロは不安を感じている胸中を隠し通すことはできなかった。だからこそ一言、違うと宣言してほしかったのだ。

「……ねえ、ジョン君」

「フウロ？ 料理が口に合わなかったのかい？」

「ううん、美味しいよ。そうじゃなくて……ジョン君がプラズマ団に関わってるんじゃないかって」

目を丸くしたジョンは口元を丁寧に拭ってから、朗らかに笑う。

「いやはや、君の口から荒唐無稽な冗談を聞ける日が来るとは」

「冗談じゃないですっ！ カミツレちゃんがそう言ってたから……」

「……そこまで言うなら、今度話し合うのもいいかもしれない」

内心で予定は未定などとほくそ笑んでいるジョンをよそに、フウロはジョンの疑惑を晴らすべくヤーコンらの主催するジムリーダー同士の話し合いの場に彼を連れて行こうと考えていた。

自縄自縛じじょうじじやくしたとは露知らず、ジョンは家に行ってもいいか等と上機嫌で尋ねる。上の空で聞き流していたフウロの頭の中は、どうやって無罪を示すのかで精一杯だ。

「明日とか、明後日とか、ジョン君の家に行つていい？」

「は……」

無実の罪であるということを示すには、フウロはジョンという人物の人となり进行深入知り、理解する必要があった。

ジョンは「家が狭い」だの「見せられない」と、言い訳を並べてフウロに突きつけるが、彼女の強い意志に対してはさしたる理由にはならない。

結局、ジョンはフウロのお宅訪問許可を出さざるを得なかった。残念ながら、彼は大空のぶっ飛びガールを止める手段を持ち合わせてい

ない。尽く見事なカウンターで返された。

家が狭く、見せられない状況だろうと彼女にとってそれは些細な事。優しさ溢れるフウロがそんな事で躊躇うはずもないのだ。

風薫る山肌。青々しい下草の生い茂る、ジョン・スミスが保有する広大な敷地の一角。爽やかな風を受け、フウロは目一杯伸びをする。

心地よい陽気とポケモン達がのどかに暮らす光景は心が洗われるような晴れ晴れとしたもので、その場に寝転がれば日が沈むまで昼寝をしてしまう自信がフウロにはあった。

レストランでのお願いの後、ジョンの家を訪ねたフウロ。彼の案内で小さな倉庫の様などころまでは来たが、肝心の家が見つからない。

「ねえ、ジョン君の家は何処なの？　ここからじゃなーんにも見えないよっ。」

「家は、それ」

……。

たつぷりと間を置いて、フウロは「うん？」と首を傾げた。

「その建物が家です」

「たて……もの？」

港にあるようなコンテナを小さくした倉庫。下手をすればホームセンターでも売ってそうな四角い箱が、家である。否、家であるとジョンが主張しているものである。ジョンの本拠地は別にあるのだが、フウロがそれを知るはずもない。

「狭いし、見せられないって言ったらろう……入って、どうぞ」

押し入れのような引き戸を開けてジョンが中を示せば、人が二人寝転がれるかどうか。小さな机とクッションが置かれているだけで、とてもではないが人間の棲むところとは思えないだろう。

「……サンダーの映像では、もっと、普通の家に見えたけど……」

「あれはポケモンのための雨風を凌ぐ場所、たまたまあそこに居たのさ」

間違っではない。この倉庫とは別に簡易的な建物が存在するものの、果実を箱詰めする為の建物だ。暫くの間は家として利用してい

だが、今ではすっかり作業場と化している。わざわざ狭い場所で過ごす意味もない。

そもそも手ブレの激しい冒頭の映像では、そこと倉庫の区別はつかないだろう。

みすぼらしい——もとい小さい犬小屋のような場所で住んでいるとは全く考えていなかったのであろう、フウロは身体を硬直させて数秒後、ポロポロと涙を溢し始めた。

夏は蒸し暑く、冬は肌を刺すような痛みが襲うであろう。雨風に晒されないだけマシではあるが、埃の積もった劣悪な環境に身を置く苦しみは相当なものだと予想できる。

ひよ、と内心あつげにとられるジョン。フウロは彼に詰め寄り鬼気迫る表情で叱りつける。涙で赤く腫れた目も相まって、恐ろしさは二倍だ。

「ポケモンを大事に思っても、自分を大切にしなきゃ駄目だよ！」

「お、おう?」

「朝ごはんは!? ずっとお酒ばかり飲んでたりしないよね!? そもそも布団がないと体を痛めるよ!? ちゃんと掃除してる!」

ダメ出しが数分間続くと、ジョンはもうフウロに頭が上がらない。印籠を見せられた悪代官の如く低頭平身で、「これからは健康に気を付けます」と言わされた。

流石に家を建てるとは言わないらしく、代わりに家に来いなどイケメンっぷりを発揮する。フウロは下心のある——ジョンを調べるという——後ろめたい気持ちであったが、ジョンにも下心はたっぷりだ。ピンク色の妄想で頭がマンパイである。

ともあれ、ジョンは朝食を必ずフウロの家で食べるよう約束させられ、暫く厄介になることとなった。

ホドモエシテイ。盛況するマーケットから少し外れたカフェで、少しボサボサな髪を後ろでまとめた少女が一人、スポーツ新聞をコーヒー片手に眺めていた。

彼女の名はトウコ。先日ジョン・スミスと共にプラズマ団のアジトを襲撃した者で、昨日に至っては冷凍コンテナに隠れたプラズマ団を千切っては投げ千切っては投げ、獅子奮迅の活躍で七賢人の一人を追い詰めたのだ。

結局のところ、その七賢人と団員はゲーチスの話術によって逃されてしまった。

フン、と忌々しい記憶に鼻を鳴らしていると、モーニングセットのスクランブルエッグトーストの香りが鼻孔を刺す。

ケチャップをたっぷりと掛けて齧り付いていると、トウコの目に見覚えのある名前が飛び込んできた。

『アユーク仮面、ダブルバトルでも快勝か』

「……………ふーん」

トウコはよく彼の動向を追い掛けるようになっていた。偉そうに物を語るので粗を探してメールで突付いてやろうというのが一つ、金をくれるので関係を持ったというのが二つだ。当然ながら肉体関係はない。

トウコの見立てではバトルに関して欠点という欠点は無いし、他の追隨を許さない戦術とポケモンは一見の価値があるものだ。

トウコは準備を整え次第、ホドモエジムのヤーコンに挑む予定であった。その前に電話でジョン・スミスの電話番号をプッシュする。

あの日の別れ際、二十万の入った封筒に目がくらんだトウコは、その時抱いていた感情とは別に「使える！」と思い電話番号を請求したのだ。思惑を感じ取ったのか、それとも子供に甘いだけなのか、パترونになってやろうとジョンが言い出したのだ。

以来、何かしらの成果を出したり、挑戦をする前にはジョンに一言強請りゆすり——おねだりを言うようにしているのだ。

暫くして人が出る。聞き覚えのある声だが…………。

「もしもし？ ジョンのおっさん？」

「開口一番に何てことを言う奴だ」

「私よ私、ト・ウ・コ・さ・ま。今ホモドエでヤーコンさんに挑むところなんだけど、旅費が——」

「——いや、友人……え、ああ……新人で、注目のトレーナーで……まあ、そうだけど………違う………」

「おーい、もしかして修羅場？」

電話越しに聞こえるのは女性がジョンに対して詰問している声だ。誰だの知り合いだの女だのと聞こえる辺り、地雷のような何かを踏んでしまったようだ。

ジョンがトウコのパトロンとして資金を提供しているのは事実だ。ポケモン協会の定める規則により、トレーナーが一部のトレーナーに対して資金提供などをすることは認められている。まあ、どのスポーツだろうと似たような制度はあるが。

事情を話せば、電話の向こうにいる女性を説得するのは容易いが、トウコはジム戦の数時間前にそのような気の滅入る話はしたくないのだ。聞こえていないであろうが、激励の言葉を一言だけ投げかけてトウコは席を立った。

トウコは面倒事に費やす精神をバトルに向けたが、残念なことに、次のジム戦で戦うのは電話の向こうの女性——フウロなのだ。

修羅場、とは何だ。

現実逃避する思考にすら修羅が住む、そんな状況に直面することだと俺は思う。

それは唐突だった。今朝、朝食の席でたまたま携帯が鳴ってしまったので応答したのだ。その相手——トウコからの電話に出ただけで「その女、誰？」と、絶対零度の視線に晒されるのは流石に予測できなかった。

人生で一回は安全地帯から言われたい言葉^{ことば}世界一位に輝いた「その女、誰？」である。女の人や女性ではなく「女」であることも嫉妬ポイントが高い。

ただ、付き合い始めて間もない時期にこれだけの嫉妬ポイントが稼げるとは、まさか毛ほども思わなかった。フウロはもつとこう、ニパーつとスルーしてくれるものだと思っていたが、一瞬で鬼に化けることが出来るらしい。

フウロが朝食のソーセージが刺さったフォークを手に持ったまま、鈍く錆びついた眼光を光らせて俺に詰め寄ってきたのだ。

流石に命の危機を感じたが、相手はガールフレンド。ゲンガーを呼んで撃退など出来るわけもなく、洗いざらい事情を話さざるを得なかった。

別に浮気してないし。ただのパトロンだし。

フウロには余りこういったことは憤むようにと、釘を刺された——本当に刺されそうな気迫があった——が、仕方ないのだ。

例えば、満員電車で一時間ほど揺られ、面倒な上司と生意気な後輩に囲まれた職場に行くとして、そこに絶世の美少女が居たらどうだろうか。癒やされるはずだ。

であれば、彼女も金も権力も握った俺が美少女に癒やされたいと思うのも、ちよつとお小遣いを上げて癒やしてあげたいと思うのも道理なのだ。

まあ、さしたる問題はもう無いので、後顧の憂いを断つためにプラ

ズマ団のアジトというアジトを襲撃して火を放つ。これから毎日アジトを焼こうぜ、どんだんやろうじゃねえか。

——とはならない。

プラズマ団のお客様を見て欲しい。何があったのか知らんが、彼らの味方は意外にも多く、政治家や何らかの団体に所属する幹部とかがそれなりにいるのだ。

いや、なんでだろうな。マジで。ポケモンを解放する！ とか言つて、伝説のポケモン持ち出して負けるのに。タイタニックに乗るとは何とも笑えない奴らだが、笑えない奴らだからこそ解せない。利に聡く、嗅覚の優れたハイエナが泥舟に乗るか？

イツシユ地方は独立気風の強い——まるでアメリカのような地方だ。そこに新秩序を打ち立てようと現れた集団をこうもアツサリ受け入れるとは、謎だ。

吸血鬼が後ろに座っているわけでもあるまいし、何か勝算があるのか。

プラズマ団がもしも新秩序を築き上げるのなら——敵対までしなくていいだろう。まだぶっ壊したアジトは一軒だけだし、勝ち馬に乗るといいうのも悪くない。

ただ、本家のストーリーを全く覚えていないので、Nが伝説ゲットで厨とか城浮上とか、Nがチャンピオンとして戦った？ 事しか覚えていない。あいつらマジで何がしたいんだ……。

しかし、ここはドーンと構えて、じっくりと情勢を見守って、勝ちそうな方に加勢するのが一番いいだろう。かつての関が原もそうやって軍配が上がったのだ。

トウコがヤーコンを倒したのが七月の頭なので、チャンピオンリーグに着くのは、一つの大きな街に移動するのに半月掛かるとして、大体八月の中旬頃。ないしは九月前を見込んでおけばいいか。

今年も夏が来てしまったので、サザナミビーチで褐色メロンと戯れるのもいいだろう。だが、夏休みベリーメロン堪能計画には大きな障害がある。

騎士道には基本的にオフシーズンが無い。

というのも、ポケモンバトルは年がら年中行われているのでチャンピオンリーグなど大きな大会の期間などを除き、纏まった休みを取るかどうかは自由なのだ。言い換えれば、しょっちゅうバトルしているので多少休んでも対して影響がないのだ。

理由は——ポケモンも人間も頑丈すぎるからだ。

ポケモンはポケモンセンターで休めば元通り、すっかり元気になって戦いに復帰する。もちろん個人差はあるが、一日二日動けないとなれば、それはよっぽどの重症である……と言えば察しがつくだろう。

元来、ポケモンは好戦的な生き物で、戦えば戦うほど成長して喜びを見出す——マゾ科の——生き物。バトルから解放しろなどという団体は今日日プラズマ団辺りしかない。

生息地を保護しろ、という声はあるのだが、ポケモンバトルを止めろと言う声は不思議と見掛けないのだ。少なくとも俺がエイジの時代にバトルをやっていた時は聞いたこともなかった。

話を戻すが、ポケモンは問題ない。であれば人間にも何らかの超常的要素がある。それは単純に、体力の問題だ。奴ら一般人でも素人中高生アスリート並にエネルギーが有り余っているのだ。

休暇を取れと言われて「よし、ポケモン達と修行してきます！」と労基法も真つ青な底力を見せる。……もちろん、そんな奴だからこそポケモントレーナーをやっているといるのもあるが。

だが、俺にそんな体力はない。八時間労働でクタクタだし、どちらかと言えば試合よりそらをとぶでの移動の方が疲れるくらいだ。その癖売れっ子なので、どいつもこいつも体力が無尽蔵にあると思っているのか、山ほど仕事と試合をぶっこんでくる。

休みが一週間に零回しか無いなんて耐えられない。朝は農作業、昼と夜は試合か取材か、このペースだと死んでしまうので五郎○ブームのように一過性だと信じたい。

安い労働力を大量に仕入れられれば、農場を（俺が）低労力で、（俺の）利益が上がるように運営できて、朝の作業の負担が減るというのに……。

プラズマ団から人間を開放して安くこき使ってーなあ……。社会

のゴミ箱の如く掃き溜めから寄せ集めた人間ばかりいるから、多少減つても気付かないし……いや、止めよう。俺の勝手な考えで現実の生活を乱す訳にはいかない。妄想は妄想で止めようね！

ただ、農作業と言つても精々が収穫・播種^{はしゆ}程度だ。他の作業の大半はエスパークタイプのポケモンや、水タイプに丸投げである。

ジョン・スミスの子ヤチエのみ農場の売上は初期こそ低かったものの、今では大分安定しているのだ。ネームバリューの力さまさまである。

そんなわけで、我々は労働者の権利を守るべく立ち上がらなければならぬのだ。労働者よ、立ち上がれ！

そんなわけで、資本主義的な思想を打ち砕き、人民のための共産主義を築き上げる為にジムリーダー^{フリーフィンク}会議にやつてきたのだ。

と言うのは嘘で、フウロにせがまれたので試合後にライモンシティのポケモン協会に寄つたのだ。

会議室でフウロ様がお待ちです、と受付のお姉さんに言われ一つ鼻歌でも歌いたくなるような気分になる。いきなり会議室でプレイとは中々の強者、いや、もしかして上級者なのか。

ホイップステップジャンプと会議室に飛び込むと、ジムリーダー全員の視線が突き刺さった。

「……why?」

「!? ……何故此処にこいつがいるツ!!」

次いで、ヤーコンの怒鳴り声。激おこぶんぶん丸であるのは確定的に明らかであったが、理由を俺が知る由もなく、ただただテンションが下がるだけである。

フウロが何事か話すと、彼らは悲鳴のような——突然ゴキブリを台所で見たとの如く立ち上がる。

ヤーコン氏が随分とご立腹な様子でフウロに食って掛かり、あのドラゴンタイプの使い手——アイリスじゃなくてシャガさんというらしい——が、何とも恐ろしげな表情でコチラを見ていた。

彼らは全員円卓を囲み、ホワイトボードに大きく書かれた「プラス

マ団への対応」について話し合っていたばかりなのであろう。

まあ、あれだ。とても場違いな客であるということは理解できた。が、フウロ以外のドイツのコイツもアイツも、腰のボールホルダーに手を伸ばして、「野犬が入ってきたから警察を呼ばなきゃ」みたいな感じで固まっている。

酷い対応の仕方だ。どれだけ嫌われているんだ……まるで腫れ物扱い、君らも文化人であるなら会話をしたまえよ。尤も、ポケモンバトルをしても負ける気はしないが。

ちなみに、野犬を見たら保健所に連絡しよう！

デルビルとかポチエナなんかは狂犬病に掛からないが、こちらの世界にいる犬……もとい狼は、ちゃんんと狂狼病に掛かってしまうのだ。

発症後の致死率はほぼ100%なので、日本のように根絶した国を除いて、哺乳動物にはよく気を付けましょう。この世界では、ポケモンレンジャーがよく死んでるとだけ、言うておく。

犬——簡潔に言えば愛玩動物であるが、彼らは人間に対して恭順する姿勢を示す個体を選抜していった結果、出来上がった産物である。耳は垂れ、顔は丸く、ワンと鳴くアレである。

その昔、かつての地球でもキツネに対して「選抜」を行った実験が存在した。結果、人に対してよく懐く個体が生まれたのだ。それを何十年、何百年、何千年と繰り返してできたのが我々の最もよく知る犬である。

残念だが、犬になる前の狼は——ポケモンとの愛玩動物化の歴史で敗北しているのだ。というのも、近年になって人の遺跡からのポケモンとも形態特徴の似つかない絵——俺からすれば等しく落書きである——や、体毛が発見されてたのだ。

遺伝子解析をした結果、動物園に居る狼に近いと話題になったのである。

しかし、この世界……ポケモンの進化の軌跡だけがほとんど分らないというのが納得いかない。

人間に遺伝子があるのならそれは紛れもなく、大昔の大昔、原初の

海に生まれた1つの生命体を元にしてているのだ。原核生物、古細菌、真核生物と別れた生物の進化の枝から、ポケモンというドメインが生まれたということなのか？

「考え事かしら、ジョン・エイジさん」

脇道にそれた思考を戻したのは、電撃的なファッションセンスで有名なカミツレ氏の電撃発言である。あのスレでも覗いたのか。スーパーモデルが掲示板を覗いても良い事はないと思うんだが。

「それで『フウロ』、今日呼び出したのは何の用だい」

まあ、どうでもいい。こういう手合は無視に限る。人の名前を馬鹿にするという事は、名付け親と名付けられた者を貶しているのと同等。つまり俺は二倍バカにされたのだ!!

で、フウロから事情を聞けば、「無実であることを示す」か。正直囁つてしまいそうになったが、疑いを晴らしてもらうに越したことはない。だが中々どうして、面倒な女だ。

厄介事とは関わり合いになりたくないのです、後は全部フウロに押し付……任せ、踵を返して立ち去ろうとした。が、そうは問屋が卸さない。

「ジョン・スミスよ」

シヤガである。白いお髭を蓄えたムキムキマッチョマンの爺さんは、見る者の心を透かして見るような視線で——こういう目をするのは俺の最も嫌いな人種である。問答でまともに相手をするとなんか勝てないのが特徴だ——俺に何事か問いを投げかける。

「そなたが真に信じるのはポケモンとの生活であるのか、ペテン師の戯言であるか」

「経済規模を考えればポケモンの損失は後世に暗い影を落とすでしょう。お分かりで？」

それだけ言って、呼び止める声がなかったので帰った。

プラズマ団は……負けまあす！ とか言ってみたら、多分目を丸くするんだろうよ、とかそんなことを考えて都会を歩いていた矢先。

一通のメールが届いた。メール自体はしょっちゅう届くが、それはあくまでも表向きのアドレスの話で、私的に利用しているアドレスに

は当てはまらない。

どうやらシロナから聞き出したようで、中身を見てみれば「ダークライについて話を聞きたい」との事。チェーンメールかと突っ込みたくなるような——娘が悪夢で悩んでいるんですとか何とか——内容だった。

しかし、これは、そう、とてもいい……。

「クレセリアを探すのに協力して欲しい」だと。

会議は紛糾した。

洗脳でもされたのかと言うほどフウロが意固地になって「ジョンは大丈夫だ」と主張する。

それを聞いても周りのジムリーダー達は首を捻り、顔をしかめ、おまえは何を言っているんだと、フウロを説き伏せようとする。例えるのなら、砂漠に落ちた餅をまだ食べられると言っているようなものだ。

フウロを除くジムリーダー達の共通認識は、ジョン・スミスは信用ならない男である。プラズマ団との癒着が証拠として提示されれば、飛ぶ鳥を落とす勢いで糾弾することが出来ると彼らは確信していた。逮捕できれば後顧の憂いを断つことが出来るが……問題はフウロだ。ジムリーダー側の内情が筒抜けになっているやも知れぬ状況で、おちおち会議など出来たものではない。

結局、一回目のジムリーダー会議は碌な決定も下せないままお開きとなったのだ。

それから一週間も経たない内に、新聞は大きな事柄をデカデカと載せた。『悪夢に苛まれる少女、クレセリアが救う』『ジョン氏、伝説のポケモンをゲット』等と妙に持ち上げる記事が出回った。

記事の内容が真実であれば、プラズマ団側に伝説のポケモンが渡ることになる。

やはり、やりにくいと、どのジムリーダーも頭を抑えられるような窮屈さを感じる。ジョンがジムを巡ってバッジを手に入れたことは

誰もが知って、そして強烈に頭に叩き込まれた出来事であった。

圧倒的力量差。

一対多で戦えば勝ち目は十分にあるだろうが、プラズマ団を含めた多対多であれば無事では済まない。ジムリーダー達は行動に移す前に、何かしらの手法でジョン・スミスを引きずり落とさなければならなかった。

警察に逮捕させるか、ポケモン協会を通じて試合に出ずっぱりにさせるか等、手法は問わないが、立ち上がるタイミングで拘束できればいいのだ。

だが、彼らは政治を得意とする集団ではない。それ故に、フウロを除いて決起しなくてはならないのだ。

けれども、その決起するか否かの会議は当の本人、ジョン・スミスの乱入により有耶無耶となってしまった。だが、彼らは立ち上がる。

それはジムリーダーとしての宿命であり、ポケモンを育てるものとしての責務であり、イツシュに生まれた人間としての矜持から生まれたものだった。

そして、更に一週間経った七月中旬。

ゼクロムがNの元に下った。

二十日間の勾留。

トウコが留置所にぶち込まれ、その内の五日が過ぎた。

リュウラセンの塔でNがゼクロムを手にしてから、約一週間が経過したタイミングだ。

「……クソッ！」

トウコが悪態とともに激しく地団駄を踏むと、見張りの警官がすっ飛んできて怒鳴りつける。

暖かさを感じられない鉄の檻、そこに囚われた彼女は眠っている間以外はこうして足を乱暴に地面に叩きつけ、よく声の響く室内で罵詈雑言を喚き散らす。

食事用のスプーンで壁を掘っては取り上げられ、少しでも暖かな食べ物運んだ警官の顔に張り付いた。隣人はトウコが留置所に入つて二時間で他の部屋に移され、見張りは今怒鳴った者で三人目だ。

経緯がどうあれ、立派な公務執行妨害やら何やらで即現行犯である。

だが、トウコがこうして留置所に囚われたままにいるのは、他ならぬゲーチスの陰謀であった。

セツカジムを突破し、七つ目のバッジを手に入れたトウコが古代の城——ウルガモスのいた遺跡である——に足を踏み入れ、チェレンやアデクラと共にその最奥へ到達した時の事だ。

彼女らを待っていたのは親玉たるゲーチスと、数人の警察官だった。警官らはゲーチスの息がかかった者達であり、トウコ達が侵入するやいなや「国有地への不法侵入」を名目に手錠を掛けた。

イツシュをフラフラしていたアデクと、虎視眈々と陰謀を巡らせてきたゲーチス。法律の知識は言うまでもなく、ゲーチスに軍配が上がる。

ゲーチスの手下と言えど、相手は国家権力の僕。抵抗するわけにもいかず、見事お縄となったのだ。

アデクとチエレンは比較的早く開放されたが、トウコはこうして今も拘束されている。念には念を入れて、Nが注目するトレーナーを捕えているのだ。

だが、トウコには脱出する手立ても、物理的な解決方法も持っていないかった。モンスターボールは取り上げられ、携帯電話も無い。

拘束されるのは二十日で、既にその四分の一が過ぎた。故に、トウコは一刻も早くココを出なければならぬと焦っているのだ。

あのゲーチスは、二十日あれば事を済ませられると宣言しているのだ。トウコにはそれを阻止する方法が分からないが、Nの言葉に従って伝説のポケモン・レシラムを捕まえなければいけない気がしたのだ。

そして、何の手立ても無いまま、更に五日が過ぎた。

六人目の警官が早く寝るように促して彼女の部屋の前から立ち去る。トウコは拷問のような退屈を味わっており、募る焦りと怒りで気がどうにかなりそうだった。

事実、彼女は耳が遠くなるような爆音を聞いた時、とうとう狂ってしまったのかと自嘲する程であった。

だが、折り重なる悲鳴と銃声、爆発音が響いてようやく現実だと気付いた。

(……誰かが来た？ 足音が聞こえる……一歩が大きい、男だ。それにもう二人か三人いる……これはポケモンの足音?)

隣人のいない留置所、息遣いや心臓の鼓動さえ響く静寂。

足音がトウコの部屋の前で止まった。

「弁護士だ。扉を開けるが、大丈夫か？」

仮面を付けた男が、くぐもった声で問いかける。

「アンタみたいな弁護士、居るわけ無いでしょうが。一歩でも寄ってみな！ アンタの小さいチ○○食い千切ってやる！」

「いや、資格は持ってないが、弁護士だ。警官も快く通してくれただぞ」「冗談が下手ね、ママのおっぱいでも吸って出直してきな！」

「肉体言語で弁護した。君も得意な筈だ……私の目が節穴だったか、パトロンは降りるべきだな」

そこまで話して、トウコは自分に話しかけてきた怪しげな風体の男に合点がいく。お金をくれる足長おじさん、ジョン・スミスだ。

「ちよつと……ここまで来たの!? ジョン!」

「今この時この瞬間、私は世界で最も弁の立つトレーナーだ。よしんば世界二位だと言う奴がいても——」

「——お喋りはそこまで。逃げる算段はあるの?」

「当たり前だ。天秤は傾いた」

ジョンが側にいるサーナイトに扉を吹き飛ばさせると、ケーシイをボールから出して、鬱蒼とした森にテレポートした。

「ねえ、私のボールは?」

「胸にふた——い”ッ!」

「さつさとする!」

「勝ったと思うなよ……」

「何の勝負よ」

足の指を踏まれたジョンがトウコのモンスターボールを返却すると、彼女は木の幹にもたれ掛かってジョンに問う。

「で、何がどうなって私を連れ出したの?」

「実に簡単だ、『ゲーチスが、支配体制、変えちまう』」

「……」

「……」

「……んなもん、私にどうしろって言うのよ」

トウコが吐き捨てる。

「いやなに、レシラムを捕まえてNとゲーチスを倒せばいい。悩むのはその後でも遅くない」

「プラズマ団を倒すってワケ?」

「そうだ、まだ間に合う」

「……まだ?」

トウコの疑問に答えるように、ジョンは端末を取り出して動画を再生した。

「ゲーチスのポケモン解放宣言だ。ここで止めなければ、ポケモンと人間はイッシュ地方において深刻な分断を受けるだろう」

—— 我らが王、N様は

—— 伝説のポケモンと力を合わせて

—— 新しい国を作ろうとなさっています！

トウコの眉間にしわが寄り、食い入る様に画面を見つめる。

演説が続き、人々の間に動揺が走る。

—— ポケモンを解き放つて下さい！

演説の最後までトウコは聞き入った。一字一句逃さず、耳の中に収めたのだ。動画が終わって、ジョンが何かを問いかける前にトウコが立ち上がった。

「行かなくちゃ。ゲーチスは、世界を丸ごと騙す気よ」

「……まあ、待て。慌てるような時間じゃない」

トウコが彼を睨む。出鼻を今まさにくじかれたのだ。

「あによ」

「選択肢は、多い」

「何かあるの？」

「いいか、落ち着いて聞け」

ジョンは子供を諭す大人の如く、語って聞かせた。

「プラズマ団との戦いは、危険が伴う。命を落とすかもしれない」

「死なないわ。私が勝つもの」

「伝説のポケモンに勝つ保証はどこにある？」

「レシラムを捕まえればいいのよ」

「生息場所は知っているか？ 何年掛けるつもりだ、寿命が来ちまうぞ」

「……何が言いたい！ アンタの底が見え透いているぞッ！」

ジョンの隠し事は、子供にアツサリと見抜かれた。トウコが半身を彼に向けてボールを構える。

彼の仮面の奥の目が、飾り付けられたガラス細工の様に無機質に光る。今度は、底冷えするような低い声で語りかけた。

「プラズマ団の報復は怖くないか？ 将来は何の職に就きたい？ 家族は心配か？ これからどうやって稼いで生きる？ 水面下では殺し合いが始まっているぞ？」

「しらばっくれるな……!」

トウコの鬼の形相に、ジョンは溜め息を吐いた。打って変わって、優しい声で話す。

「……今なら逃げられる。いや、逃してやれる」

「は……!?!」

「お前も、お前の両親も、今なら俺が逃してやれる。その後の生活も面倒を見れる。何も背負う必要はない」

「……ゲーチスは真実を隠している。アイツに世界を任せたり、ましてやアンタに任せることはないわ」

まだ何事かを言おうとしたジョンの横っ面に言葉を叩きつける。

「御託はいいから!! さっさと連れてけ!!」

「そうか……それなら……」

——目を閉じる。

「は?」

「移動する」

「そんなの空を飛べば……」

「現在、イツシュ地方に限れば内乱状態だ。噂の域を出ないが軍隊からも離反者が出ている、撃ち落とされるかもしれんぞ」

「それ、嘘でしょ」

「なら飛ぶといい。どのみち面倒なことになる」

「……どうやって、どこに移動するわけよ」

「チャンピオンリーグに出現したNの城だ。方法は言えない」

今度こそ、底冷えのするような声でジョンは言った。

「目を、瞑ればいいのね」

「ああ、俺が良いと言うまで」

トウコが目を瞑って、ジョンが後ろに回り物音がしばらくする。ポケモンを出す音や溜め息が聞こえ、それから一分程経つと、唐突に空気が変わった。

肌で感じる気温やさざめいていた虫の声が消え去り、風が変わる。乾いた風がピューピューと吹き上げているのだ。トウコは咄嗟に後ろを振り返った。

その細部を見ることはなかったが、彼女は巨大な影がそこに存在したことを垣間見た。幸いにも、刹那の探険は彼がボールを丁重に仕舞っていたため、露見することはなかった。

何事もなかったかのように居直り、目を瞑る。

「見たな？ ポニーテールが揺れているぞ」

「ッ——」

冷水を浴びせられたかのように心臓が飛び跳ねる。全身の血液が体中を巡り、訳もなく呼吸が浅くなった。

蛇に睨まれた蛙のように、身体が竦み上がる。何よりも鋭敏な本能が警鐘を鳴らす。

(コイツ……ヤバイ！ 下手に誤魔化せば、消される)

かつて無いほどの危機であった。頭をフルに回転させて、舌を必死に回す。暴力では確実にジョンに軍配が上がる。

(ジョンは、何故だか知らないけど私には甘い……留置所をぶっ壊してでも私のところに来たのよ、何か企んでいる。そこに付け込むしかない)

「さあ、何のこと？ テレポルトに気を使うなんて、アンタも中々おかしな奴ね。知ってたけど」

「テレポルト、使ったことはあるのか？」

「砂っぽくてしようがない、のど飴とか無いの？ 気の利かないパトロンね」

「……もう目を開けても良い。冗談だ」

そこはゴツゴツとした岩肌の露出した場所だ。険しい山の、その安全地帯の内の一つらしかった。トウコの背後には洞窟への入り口が、数メートル前に移動すれば断崖絶壁が待っていた。

「……は？」

「チャンピオンロードだ。ジムリーダー達がプラズマ団に抵抗するため潜伏している」

洞窟に足を踏み入れれば、ポケモンと修業をするトレーナーがチラホラと見え隠れする。彼らは一緒にしていることを選んだ、というわけだ。

そんな彼らも、もしプラズマ団の野望が成されれば、ポケモンを手放さずにはいられないだろう。

歴史的に、イツシユはゼクロムとレシラムに深く関与しており、とりわけポケモンとの結びつきが深い。しかし、おとぎ話の伝説が蘇り、別れを告げろと迫るのならば。

人々はその影響力に抗うことができるのか。

聖書の中の天使が「そうせよ」と告げるのと同じだ。根強い信仰、親しみ深い伝説に諭されてなお抗うとしたら、それは同じ伝説しかないのである。

ジムリーダー達……否、政府軍の基地はチャンピオンロードの脇道に入って、作業員用と書かれた扉を潜った先にあった。

近代的かつ広大な内部には、トウコも、そしてジョンでさえも感嘆のため息を漏らす。

「ねえ、来たこと無かったの？」

「当たり前だ。コツチにコネは何一つ無い。道を教えてもらったただだ」

二人の下に銃を構えた兵士が駆け寄り、ジムリーダーが集まっている場所に誘導する。

案内された部屋にはジムリーダーが詰めており、トウコに向けて、次々と歓迎の言葉を投げ掛け、円卓の一席に彼女を座らせる。

(……ジョンが居ない)

いつの間に消えたのか、ジョンは彼女の側から霞のようにいなくなっていた。彼の不気味な動向は、トウコの中で喉に刺さった骨の様に存在を主張していた。

近未来的な飛行物体が家に飛んできた。軍事関係には明るくないのだが、反重力？ つばい動力で飛んでいる機械だ。後で調べたのだが、ガンシップと言うらしい。

そのガンシップから出てきたのは迷彩服を来た兵士、勿論国家権力

に堂々と逆らうわけにはいかないので、ニコニコビジネススマイルである。

「やあジョン・スミスさん。お噂はかねがね、陸軍大佐のカービィです」

「どうも、カービィ大佐。今日はどんなご用件で？」

「大統領から、君に協力要請が来ている」

B級映画じみてきた。ああ、イッシュとかそこら辺は大統領制である。開拓精神が強いからね。

で、話を聞いてみれば、トウコとライトストーンを何やかんやしてプラズマ団をぶっ潰したい、という事である。

空爆すれば？　と思っただが、どうやらポケモンと戦争に関する条約で、戦闘行為に巻き込む・利用することは原則として禁止、らしい。民間人を巻き込まないとかそこらへんと同じだ。

とまあ、銃器も余り使えないそうなので、結局ポケモントレーナーを使って制圧するらしい。……何かおかしいよなあ？

「ポケモンを利用する勢力に対して、ポケモンを利用した鎮圧は認められている。法律には疎いようだな」

「当然です、私はしがない一トレーナーですから」

「そうか。だが、我々は優秀なトレーナーである君に前々から『目』を付けていた。今回の件、頼んだよ」

「ええ、勿論」

とまあ、プラズマ団に寝返るかどうかの蝙蝠プレイは出来ないようだ。いや、国の体制がひっくり返れば罪が罪で無くなるから問題ないんだけどね。

今の所最大派閥である組織には逆らわない。以上。

そういう訳で、ゲーチス派に囚われたトウコを強引に連れ出して、わざわざパルキアを使って移動したのだ。

……パルキアを使うのは単純明快。誰が味方なのか分からないからだ。迎えの兵士から街の花屋のお嬢さんまで、どこにプラズマ団の息が掛かっているか全くの不明。

そういう片っ端から私刑ZAPしたくなる相手を周りに侍らせる趣味は

ない。

とまあ、国家に対して従順で居る限り、少なくとも今は荒々しい手段——ジェノサイドパーティーをしても構わないのだ。

尤も、俺が寝返るか寝返らないかは、トウコが本当にレシラムを捕まえられるかに掛かっている。駄目なら、長期的にどちらが滅ぶかで判断する。

良くも悪くも民意に左右されやすい体制で、ポケモンを解放すべき派閥が多数派に回った時、俺は手土産を抱えてプラズマ団に属するだろう。

フウコ？ 普通に集められています。ジムリーダー達は断固として俺を関わらせたくなかったようだが、そこら辺の権限は大きくないよ。うだ。そもそも、軍がポケモン協会に圧力を掛けてるので抗議自体が無謀であるのだが。

というわけで、

「待っていたぞ、トウコ」

「何者なの？ アンタ」

Nの城でトウコを迎える。そこら辺に居たプラズマ団はしばいておいた。今頃肉塊になっているだろう。

ともあれ、このまま何事もなくハッピーエンドである。

Nの城に乗り込めー！

ポケモンリーグのあった辺り一帯を囲う様に現れた「Nの城」。周辺部ではプラズマ団員と多数のトレーナーがポケモンバトルで激しい争いを始めている。

城から伸びた階段では一層激しい攻防が行われており、時折人やポケモンが落下する。

そのNの城ではまるで巨大な大砲を放ったかのような振動が断続的に響き、ジムリーダー達はプラズマ団の下っ端達を足止めしながら、トウコが突入した後を心配そうに眺めていた。

轟音の直後、廊下のタイルが次々と捲れ上がって弾け飛ぶ。曲がり角からうっかりと顔を出したプラズマ団員とポケモンは、その身に余る破壊の衝撃波を受けて吹き飛んだ。

「フイ〜」

ニンフィア4体とメガサーナイト1体がハイパーボイスで薙ぎ払った廊下を、メタグロスを盾にしたジョンが歩く。

「これまで」に数回繰り返し返された行為だが、うっかり巻き込まれてピクリとも動かなくなった人間とポケモンを無視して歩くジョンに、トウコは心底腹が立っていた。

しかし、まともに戦えばトウコは無事では済まない。集団で襲われればとてもではないが一人で捌ける数ではない。それが更に腹立たしくもあった。

(……コイツ一人でいいんじゃない?)

トウコはゲーチスもNもぶん殴ってスッキリしたいところではあるが、単純に事を解決できないと感じていた。それに加え、ゼクロムの登場も気になる。

ジョンが何故自分に注意を払い、ここまでやっておきながらお膳立ての様なことばかりをするのか。

「次の階に行くぞ」

「待て」

「つアンタは……ダークトリニティ！」

「ハイパーボイスッ！」

突如二人の前に現れたニンジャめいた白髪の男は、5匹のポケモンが放ったハイパーボイスを回避。何たることか、一瞬でジョンの背後に回り込むと煌めく白刃を一閃、その首を刎ねんと腕を振り切った。

しかし、その首が舞うことはない。ジョンの影より飛び出たゲンガーが先んじて彼の腕を切り飛ばしたからだ。そして追撃のシャドーボール、ダメージは加速した。

一瞬の攻防、舞い散った煙が晴れた跡に残っていたのは、ネギトロめいたダークトリニティの死体だった。

「えっ………死んでる」

「アンタが殺したのよ」

「先に襲ってきたのはアツチだ。俺は悪くねえ」

「……人が死んだのよ？」

「は？ どのみちコイツらは終身刑だ、いつ死のうが一緒だバカチン」
ジョンはそれだけ言つてとつと階段を登る。トウコはむせるような血の匂いを振り払うように歩き出す。真相を明らかにするには、何れにせよNの下へとたどり着かなくてはならない。

それから二度、同じようにダークトリニティの襲撃を乗り切ってNの城の五階へ辿り着く。

「ようこそ、ライトストーンの持ち主……と、お邪魔虫」

一際大きな扉の前で、ゲーチスがジョンとトウコを迎える。豪華絢爛な衣装には似合わない射殺するような目でジョンを睨みつけていたが、「まあ、いいでしょう」と踵を返した。

その背中に――

ヒヤリとして、ハッと気付いたときにはもう遅いのだ。

ダークトリニティ――あからさまにニンジャで、主人公を拐うやべー奴――に襲われた時は死ぬかと思った。

ただ、ゲンガーが一人で殺ってしまったので、実は大したことない奴だったらしい。世の常は専守防衛だとハッキリ分かった。

しかし……これでは都合のいいタイミングでゲーチスの方に寝返るのは無理だ。彼の特殊な部下を思いつきりぶっころころしたし、どっただけ恨まれるか分かったもんじやない。仕方ない、潰すか。

無駄に多い階段を登って、無駄にでかい扉の前に到着。ここがトウコにとっての目的地——Nの居場所——だと知ったのは、なにかをこちやごちやと話していたゲーチスを、扉ごとハイパーボイスでぶっ飛ばした後の事だ。

「わ……ワタ、クシの、け………」

最後に何かを言い残して、ゲーチスは死んだ。Nがキリツとした顔で英雄がどうのこうの言っているがスルーだ。この後はトウコとNがバトルをして——

「ゼクロム、彼を」

——どうにかするはずなので俺は観客に徹する、筈が。

「排除しろ！」

ゼクロムが「バリバリダー！」と唸り、青白く帯電しながら突っ込んでくる。距離にして僅か十メートル未満、一秒足らずに目の前へ迫ってきた巨体に、俺はハッと我に返る。

襲われている？ バカな！

……いいや、馬鹿め。タイプ相性をご存知でない!?

フェアリーにドラゴンを繰り出すとはな！

「ハイボツ！」

合図とともにニンフィアとメガサーナイトを合わせた計五匹のハイパーボイスがゼクロムに直撃し、勢いを殺せぬまま俺の頭上を掠めるように飛んでいった。

所詮はポケモン、伝説と言っても数値の存在よ。……全然ビビってなんかいないんだからね！

「N……悪いがお前さんの切り札を倒してしまった」

「……？ 何を言っているんだ、君は」

呆れるような声、伝説が負ける訳ないと思っているようだが、四天

王に挑むようなレベル帯の伝説が、一致弱点の五倍ハイパーボイスを耐えるわけない。多少レベルが上下しようともメガサナは百レベル、HPは丸ごと吹き飛ぶだろう。

「伝説のポケモンが——」

背後、紫電の迸る音。巨大な鳥の飛び立つような風が髪の毛を揺らす。ニンフィアが可愛らしい鳴き声で俺の後ろにいる、倒れたはずのゼクロムを威嚇する。

「ババリバリッシュー！」

——やられると思うのかい？

「出てこい、ガブリアスッ！」

「ゼクロム、クロスサンダーだ！」

後ろにボールを放り投げ、盾にする。

地面に電気は無効、フェアリードラゴン妖に龍は無効。ダメージが少ないならそれで結構結構コケッコォ、サーナイトとガブリアスを交互に盾にして圧殺するのみ。

伝説とはゲームにおいて「ポケモンという規格に押し込めた」存在であると、なんとなく思っではいた。

無限戦法に完封される伝説とかちびつ子涙目だし、システム的にNPCのポケモンでも倒せる存在だしな。これくらいオーバースペックでも丁度いいのかもしれない。

……現実じゃなかったらな!!

電気技を喰らったガブリアスが吹っ飛ぶ。

龍技を喰らったメガサーナイトも吹っ飛んだ。

ついでに言えばダークホールでも眠らなかつたし、何とかして腹太鼓を積ませたマリルリのじゃれでも倒れなかつた。

……頭の痛くなる耐久力だ。フライゴンが百匹は吹き飛ばさず。

こんなことをやっているうちに、馬鹿でかい窓のある方まで追い詰められる。俺の手持ちにはまともに出せるポケモンはいない。トウコは俺達の……と言うよりもゼクロムの攻撃に巻き込まれないよう遠巻きに見守っていた。

トウコはまだレシラムを捕まえないのか、それともイベントが発生

していないのか。さっさとしてくれないと俺がマジでピンチの一線越えるんだが。

今回の一件で伝説には伝説ということが良く分かった。マジ感謝。だから助けてくれ。

「待て、N！ いや、待って下さいN様！ 命だけは何卒お見逃しを！」

こういう時は土下座に限る。

媚び媚び媚び媚び媚びイイイイイイ！ へへへ、下手に出て許してもらいましょうや。背中を向けたらアイツぶつ倒してやる。

「……少なくとも、ボクはポケモンを堂々と盾にするようなトレーナーを許せそうにない」

原作展開はよ。流れとしては、多分、レシラム捕まえてゼクロムノックアウトやる？

トウコー……！

早く来てくれ……！

「ま、待ってくださいよN様ア……そ、そうだ！ トウコさんが何とかんとかを持っているらしいじゃないですかア——！」

「確かに、彼女はライトストーンの持ち主……気にかけてはいたけど……レシラムは応えない。ボクの思い込みだったみたいだね」

「ちよつといい？」

Nの冷静かつ思い込みの激しい受け答えに、今まで黙っていたトウコが口を挟んだ。

「その男、色々と『クサイ』のよね……挽き肉にしたい気持ちは分かるいでもないけど、させないわ」

「さっすがあートウコ様は話がわかるウウ……！」

「アンタは黙ってな！」

俺はゴキブリと言わんばかりの素早さでトウコの後ろに隠れる。Nはやれやれといった風にポーズをとる。

「キミに出来ることは二つ。勝ち目のない戦いを挑むか、新しい世界を待ち望むか」

「何言ってるの。ゲーチスが死んだんだからアンタに洗いざらい吐か

せるわよ」

Nがゼクロムを全面に出すと、トウコのバッグからライトストーンが光を放ち、宙に浮かび上がった。数瞬の瞬きの後、石の浮いていた場所にはレシラムが佇んでいた。

まあその後はNがトウコに対してレシラムを捕まえるだの仰って、トウコが捕まえた。どこに隠し持っていたのか初手マスターボールである。

それからはもう滅茶苦茶にやりあって、顔中汗まみれや。レシラムの業火とゼクロムの白雷、生み出した熱量はこの場所で神話を思わせるような激しい戦いを呈していた。

天井は吹き飛び、余波から逃れようと俺が廊下に飛び出した直後、壁が吹き飛んで見晴らしを良くしていた。

空に暗雲が立ちこめ、白と黒のポケモンが縦横無尽に駆け巡る。

これがポケモンバトルか……!!

遙か上空で行われている戦いをボーッと眺めていると、聞き覚えのある軍靴の音が幾つも階段を駆け上がってくる。

見覚えのある軍人が俺の側まで寄ってくる……確か、カービィ大佐だったかな。ワラワラと六人ほどの軍人が銃を構えて彼に続き、俺にその先端を向けた。

はあああああああああ!?

オイオイオイ……死んだわ俺。

「……向ける相手が間違っていないのですか?」

パニックになった俺の頭が、やっこのことでひねり出した言葉がこれた。鋼タイプを囷にしようにも、銃の方がボールを投げるより速い。

「間違っていないとも、ジョン・スミス。ポケモンで人殺しとはやってくれたな」

「なん……だと?」

いやいや……国家が傾く危機に何を言っているんだ。ゼクロムは「マジでヤバイ」ぞ。俺がやったのはチンケな殺人じゃなくて、正当な悪人の排除だぞ。

俺が何かを言おうとすると、銃口を乱暴に突きつけてくる。

「つべこべ言わずに両手を上げて膝をつけ、聞きたいことが『山ほど』あるそうだ……あれだけ殺したんだ、生きているだけ儲けものだと思うがね」

……証拠は全部消したはずだ。一体、何が聞きたいんだか。

思うに、何かの権力者が変なこと言い出したんだろう。

「何が聞きたいんだ」

「黙れ」

生かして連れてこいとか言われたんだろう、ウカツな奴だ。バレバレである。

思えば、この世界には騙しやすそうな人の良いバカか、間抜けな悪人しか居ないではないか。

「俺が人を殺しただと？ 冗談はよせ、この場で死んでしまったのは正当な防衛の結果だ。向こうは俺を本気で殺りに来ていた」

「……お前がテレポートのような手段で移動していることは知っている。」

……は？

「空間研究所が断続的な異常を検知している。危険な巢に隠された家も把握しているぞ」

なんだそのオーバーテクノロジー!?

知っていたらやらなかったぞ……何なんだ、この世界は。

「さあ、大人しく来てもらおうか」

「……こんな筈じゃなかった」

「後悔しても遅い」

「お前たちが居なければよかったのか、それとも、俺が居なければよかったのか」

「何をごちやごちやと——」

——カツ!

刹那、轟音と閃光が全員の目と耳を覆い隠す。ゼクロムとレシラムの決着が付いたのか、そうでないにしても俺にとっては都合がいい。ボールを取り出して、いつものポケモンを出す。

「パルキア……コイツらを、海に沈めろ」

光が収まると、俺の周りには誰もいなかった。B級映画染みた展開だが、邪魔者が消えて実にイイ。

だが、見られた。

白黒はつきりさせたトウコとN。白に軍配が上がったようだが、トウコは俺を、パルキアを、しつかりと目にしていた。

……殺したくねえなあ。

だが、伝説のポケモンを、見られた以上、生かしてはおけない。……はずなんだが。

考えてみれば、最初から動機は「見られたくない」だ。この世界に来た当初はマトモに人類の心配をしていたのだ。

だが、欲が出た。金を稼ぎ、生殺与奪の力を実感し、チャホヤされて舞い上がり、罪を重ねた結果、なんでも出来ると気付いてしまった。

俺の枷は外れてしまったのだ。

「そのポケモン……ま、後にしましょ。で、N……アンタは負けたわけだけど？」

「……キミの、真実……ボクの理想が破れた……分からない。二匹の伝説……異なる考えを否定するのではなく、受け入れる事で世界は化学反応を起こす……」

意気消沈するNと、パルキアを見ても動揺しないトウコ。俺はパルキアをボールに戻してから彼らの方へ歩み寄った。

俺は観客に徹する。

トウコとNが話している間に、結論を出す。

殺すべきか、否か。

個人的には殺したくない。

だが、ああ、とんでもないことに、この期に及んで責任感が出てきたのだ！

冷水を浴びせられたような気分だ。

俺は自分自身への免罪符を発行し続け、その罪を自覚するや否や懺悔を始めたのだ。これが笑わずにいられるだろうか。

であれば、殺さない方便を考えよう。

そう、トウゴはパルキアというポケモン自体知らないのではないのか、あの気の強い女の事だ、話せば黙ってくれそう。あれはあれでバカではない。

そう、気が変わらない内に、早く言うべきだ。

「……トウゴ、少しいいか」

「取り込み中よ」

「重要な事だ」

「……N、ちよつと待ってなさい。で、何？ 下らないことだったらぶつ飛ばすから」

「さっきのポケモンを見たことを、黙っていて欲しい」

「はあ……!?!」

面食らうトウゴ。

だろうな、誰だってそう思うよな。

だけどな、重要な事だ。主に俺の精神衛生上、とても。

全ての罪から逃げ出して、隠居しようというのだ。少しの後押しが欲しい。

「大事なことだ」

「どういう風によ」

「人の生死が関わる」

「……はあ、しょうがないわね。黙つといてあげるわよ、ほら、これでもいい？」

「……良かった。これで俺は何時でも責任転嫁できる」

「なっ!? 何企んでんのよ!」

俺は振り返らない。これ以上人の世界で好き放題は出来ないだろうが、まあ一生分楽しんだ気がする。

ケーシイを出してテレポートで人の居ない部屋へ転移し、パルキアで家に帰った。土地をウロウロしていた警察や軍人なんかは残念だが消して、家とポケモンと果樹園を丸ごと転移させた。

断捨離をした気分だ。身分と名前を捨てるのは二回目だが、今回はもう何も怖くない。

ひっそりとした山奥で、細々とポケモンと暮らそう。ゼルネアスが

居るし、まあ何とかなるだろう。

俺の抱えていた金・見栄・地位は、こんなにも簡単に捨てられるものだ。欲望に取り憑かれてあれやこれと手を出さず、騎士王とか何とかで持ち上げられてればよかった。どうせ死ぬ前には雲隠れするだろうが。

やましい事があるだけで生きづらいのは当然だが、俺はこの世界に自分の常識を押し付け過ぎた。

だからと言って法に裁かれる気は全く無いが。

俺の騎士道ももう終わりだ。あの仕事は歪な承認欲求が満たされて死ぬほど退屈だった。あそこそこ楽しかったが、廃人だった俺にとって天職だったのは間違いない。

俺の思うがまま、誰にも真似出来ない事を好き放題出来た。人生でこんな体験が出来てもう満足だ。

俺はもう居なくなつた方がいい。この世界と俺の世界は決して交わる事が無いのだから。

この世界に生きている人が居て、俺はそれの邪魔をするべきではないし傍観者として——ゲームのプレイヤーとして世界の流れを俯瞰するに留めておくべきだ。

だからもう誰にも会う事はないだろう。

E p i l o g u e

『ジョン・スミスさんが失踪して今年で三年になります。騎士道協会は彼の捜索と遺——』

彼女はラジオの電源を切って、バッグにテントや食料、ロープ等を詰め込んで、旅に出る新人トレーナーのように何度も確認した。

地元部族の協力と相棒のポケモンのお陰で、時間は掛かったが遂に「彼」の居場所を探り当てる事が出来た。

きのみの木に囲まれた巨人の家に住む者がいるらしい。そこはサン族の間では悪魔の谷と呼ばれる場所で、遠くから見ることが出来ても決して近づくことが出来ないらしい。

侵入者を拒む暴風、恐ろしい化物、百の生贄で開く門。サン族の語る言葉はどれも信じ難い伝承であったが、それを恐れて踏み止まるオンナではない。

旅に危険はつきものなのだ。ベテランのトレーナーである彼女はそれをよく理解していた。

事実、暴風はポケモンが飛行できないほどではなかったし、化物は断層の模様で、生贄の門というのは人の頭程の大きさのきのみがなる木が道なりに生えているだけだった。

ペンペン草も生えない場所だと言うのに、そこだけは下草の生い茂る豊かな森だった。しかし巧妙に隠されており、そこは決して晴れることのない場所だという。

そして、森を抜けた先には文字通りの巨人の家があったのだ。

——コンコン。

陰気な午後の事だった。誰かが唐突に我が家のドアを叩く。

(来客？ まさか?)

俺は膝の上に座るサンダースを床に降ろし、ゆっくりとした足取り

で扉に向かった。

俺の専らの生活は「借りた」本を読んで、実ったきのみを食べる無に等しいものだ。それが三年程続いている。

外に出ることはなく、此処に辿り着くには一番近い村からでも一週間以上は掛かるし、彼らは脅している。

なのでポケモンのイタズラかと思ひ、扉を開けた。

「……ああ、懐かしい顔だ。疲れただろう、きのみジュースを振る舞うよ」

突然の来客に面食らったが、三年分の歳を取った彼女を家の中に招待する。拒絶はしない。俺は何も変わらなかったが、どうやら彼女はとても変わっているようだ。

「混乱している？ それは知らん」

彼女は怒っているような、泣いているような、狸に化かされたような、どうしても解釈できる顔をしていた。俺の顔を不躰に触るや否や、問いを投げ掛けてきた。

余程気になるようだ、ここまで追って来る程度に。

「……話すと長くなる。簡単に言えば、俺は自分の罪から逃げ出した」
彼女は「どうやら俺に話させたいらしい。」

「俺の「騎士道」は、人と交わることがない……」

自嘲気味に言った言葉。俺の行いを知る彼女なら、その意味は十分に理解できるはずだ。

「よく分かるだろう？」 ■■■

呼び慣れた彼女の名前を、俺は囁いた。